

我觀密教發達志

15

439

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

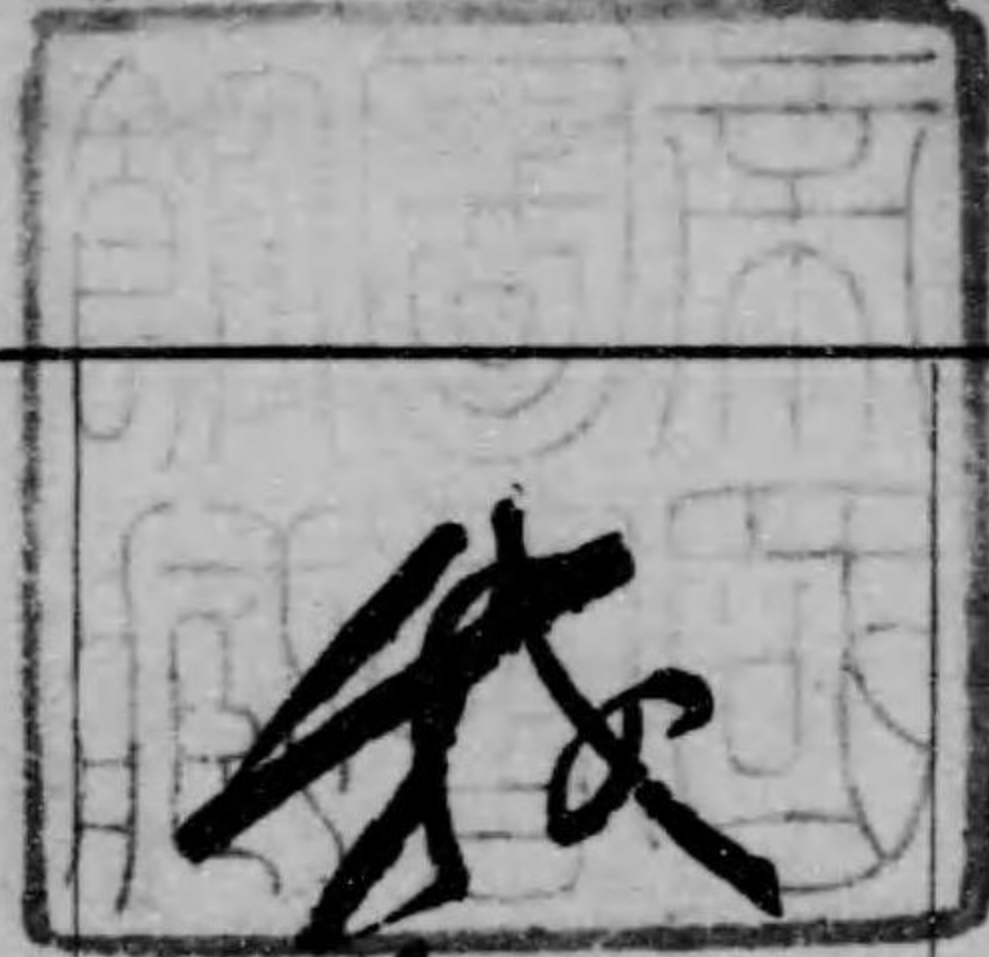
始



權田雷斧著

我
之
家
族
考
迹
志

東京
丙午
出版社發行



大正
14. 5. 14
内交

序

古人曰順緣逆緣皆近菩提劫樹院知心居士大村
西崖先生著密教發達志爲研究密軌者所益雖多
破斥我

高祖大師相承法義不尠老迂不耐默止拭老眼錄
所觀爲八十歲長壽記念後學諒之云爾

維時大正十四乙丑年二月

老比丘 雷斧

目次

第一篇 自教興至隋

(大村氏著
密教發達志頁數)

付法之傳説 (一) 一
空海請來錄付法傳及遺告等 (二) 二
大日如來與釋尊 (二) 三
釋尊說密教不 (五) 八
釋尊排呪術 (五) 八
方等經雜密呪 (一〇) 一〇
外道神物入佛教 (一〇) 一一
佛像漸興 (一三) 一二
向東觀佛 (一六) 一三

金剛薩埵	(一七)	一四
龍猛非密祖	(一八)	一五
外道呪術漸入佛教	(二五)	一九
陀羅尼與明呪之差別	(二八)	二〇
呪經與陀羅尼經	(四〇)	二三
安然卓見	(四二)	二三
鐵塔相承說之妄誕	(四二)	二四
吳竺律炎譯經	(四九)	三一
華嚴教主	(六九)	三二
卽事而真	(九〇)	三三
梵網經	(九六)	三四
阿含部中有呪者	(九八)	三四
八識十地十度等	(一七)	三五
印之由來	(一四五)	三五

第二篇 初唐

密教樞機	(一九)	三八
般若理趣	(二〇)	三八
十六大菩薩生	(二一)	四〇
胎金兩宗之本原	(二二)	四一
烏茶國灌頂師	(二三)	四二
阿地瞿多譯經傳法	(二四)	四二
以法擬人	(二五)	五九
縛折羅之名	(二六)	六〇
惡法入密教	(二七)	六〇
本尊不定	(二八)	六一
雜密屬胎藏系統	(二九)	六一
無行傳大日經	(三〇)	六二

密教矯救邪弊……………(二九九)……………六五
 毘盧遮那爲曼荼羅主……………(三二二)……………六六
 使呪法經……………(三四二)……………六六
 流志譯南天密教特色……………(三四三)……………六七

第三篇 盛唐

善無畏譯經傳法……………(三五三)……………六九
 大日經梗概……………(三六五)……………七六
 南天密教與中天密教……………(三七一)……………(七九一)
 印度學風……………(三八〇)……………八八
 善無畏與無行……………(三八二)……………八八
 大日經所說曼荼羅有十數種……………(三八三)……………八九
 大樂不空金剛……………(四〇一)……………九三
 宗教之藝術化……………(四〇七)……………九四

蘇悉地經梗概……………(四〇七)……………九四
 蘇婆呼經梗概……………(四一七)……………一〇〇
 求聞持法……………(四二二)……………一〇三
 事理二法界……………(四三四)……………一〇五
 胎金兩部會融……………(四三四)……………一〇六
 空海不重無畏……………(四三六)……………一〇七
 空海血脉……………(四五〇)……………一〇八
 大日經疏釋……………(四五三)……………一〇九
 龍智菩薩……………(四七〇)……………一〇九
 達摩掬多……………(四七一)……………一一〇
 本師寶覺……………(四七一)……………一一〇
 空海付法傳荒唐無稽……………(四六九)……………一二四
 金善互授……………(四七四)……………一二五
 金剛智譯經傳法……………(四七六)……………一二九

金剛頂經義訣	(五〇七)	一五三
金剛頂三摩地法	(五〇八)	一五四
曼殊千臂千鉢經梗概	(五一六)	一五七
瑜祇經梗概	(五一九)	一六二
惡法	(五二八)	一六三
		(五四〇)		

第四篇 中唐

不空開密教盛運	(五七九)	一六六
不空不遊印度本洲	(五八〇)	一六六
略出經與金剛頂大教王經	(五八九)	一七〇
卅七尊與卅七菩提分法	(五九二)	一七〇
不空肆意誦出	(五九五)	一七一
理趣釋梗概	(五九八)	一七三
金剛頂經念誦法經等	(六〇八)	一七五

蓮華部法出處矛盾	(六一二)	一七六
雜密佛頂入金剛頂宗	(六一五)	一七七
瑜伽宗重智	(六二一)	一七七
入藏表不舉釋字母品及菩提心論	(六二三)	一七八
不空不重胎藏	(六二七)	一七八
金剛頂宗聖觀音法	(六三四)	一七九
孔雀明王始爲佛母	(六四〇)	一八〇
三部明王	(六四七)	一八一
十八道	(六五〇)	一八一
仁王般若法	(六五一)	一八二
隨求明王	(六七四)	一八二
陵誡崇拜	(六七八)	一八三
金剛童子法	(六七八)	一八三
方等顯經	(六九四)	一八四

土壇變為木壇……………(六九七)……………一八四

第五篇 中唐承前以至晚唐

守護國王法……………(七四五)……………一八六

金善互授……………(七五〇)……………一八六

惠果傳法……………(七五一)……………一八七

兩部一具流傳之祖……………(七五六)……………一八八

金剛界九會曼荼羅……………(七五九)……………一八八

金剛界六會……………(七六六)……………一九五

四大神由來……………(七六八)……………一九八

金剛頂宗等諸尊混入及住位雜亂……………(七七四)……………一九九

蘇悉地院……………(七七六)……………二〇〇

依流志譯經增補……………(七七七)……………二〇一

金剛界用成身一會……………(七九五)……………二〇二

四曼義……………(八七八)……………二〇二

偏重金剛頂宗……………(八八〇)……………二〇四

初金後胎初胎後金……………(八八〇)……………二〇五

台密不二……………(八八三)……………二〇六

安然完成教相……………(八八四)……………二〇六

修驗及神道……………(八八九)……………二〇七

密教邪義……………(八八九)……………二〇七

我觀密教發達志

權田雷斧著

第一篇 自教興至隋

付法之傳説

然檢金剛會及其弟子不空之所親筆錄。未曾見有之。蓋其事初出于不空俗弟子趙遷所撰不空行狀。竝嚴郢所撰不空影讚及碑銘序。三十七尊出生義亦粗同。出生義者。雖稱不空譯。其末文云。復以誓約傳不空金剛阿闍梨。然後其枝條付囑頗有其人。是豈不空之所自記耶。乃爲不空之徒所。述明矣。

評して曰はく、親ら筆録する所に非ざるを以て、信を措くに足らずと云はゞ、天台の玄義・文句止觀は、智者大師の弟子灌頂の筆記にして、智者大師親ら録する所に非ず

と雖も、誰か智者大師の親説を疑はん。今、此れも亦然り。趙遷、嚴郢等俗弟子と雖も、親たり不空三藏の巾瓶に侍して、其の所説を聽き、其の行動を視て、至切に之れを記す。豈夫れ信ぜざらん乎。若し此れをも信ず可らずと云はく、又何をか信ぜん。三十七尊出生義は、高祖の請來に非ざる故に、血脈に釋迦を加ふる故に、依用の限りに非ざるなり。然るに末文に、復以誓約傳不空金剛阿闍梨、然後其枝條付囑頗有其人。と記するを以て不空の譯に非ず、其の徒の所述なりと判ずるは、理由甚だ薄弱なり。不空自ら傳不空金剛阿闍梨と記するに何の問かあらん。

空海請來錄付法傳及遺告等

然而空海據此作請來錄付法傳及遺告、海雲金剛界大教王經師資相承傳法次第記亦然。爾來台東兩密諸師、稟受此説、血脈印信悉從之。道詮、群家諍論、宗叡真言疑目等、雖斥言其不足厝信、歷代密家辯證甚力、因襲之久、遂爲通説、如不可復動者焉。雖然、豈夫然乎。

評して曰はく、三十七尊出生義は、承和十四年圓仁、慧運の請來にして、我が高祖大師の付法傳請來錄、御遺告等の著作は既に承和十二年以上にある。然るを何の理由ありて、出生義に依ると云ふ乎。又諍論と疑目とは、道詮、宗叡入密以前の著作ならん。何となれば、後に兩師入密して、高祖大師の門葉に列する故に。以て諍論、疑目は兩師最後の本意に非ざるを知るべきなり。

大日如來與釋尊

其所謂毘盧遮那佛者、既以天竺梵語説大日金剛頂等經、而密教始得傳于世。豈本地無相法身而已哉。其所以有梵語言迹之身、乃非釋迦牟尼世尊、而誰爲能説之哉。故圓珍、些些疑文云、真言文字是梵王言詞、可謂隨方文字、法身無言、權託示理、何言法然道理所成文字、是以遮那身格雖詭辯縱橫、若措形而上論、而立于歷史上見地、卽爲能説者之實、以指之、則遂不得不歸于釋尊。故觀普賢經云、釋迦牟尼佛名毘盧遮那遍一切處、其佛住處名常寂光、大日經説百字生品所謂法自在牟尼者、蓋指釋尊、一行疏釋之云、法自在牟尼、此卽毘盧遮那別名也。金剛界傳法次第記亦云、毘盧遮那如來卽釋迦如來。是此約法性身、圓仁金剛頂經疏、録大興善寺阿闍梨説云、彼法華久遠成佛、亦是

此經毘盧遮那佛不可異解。是以台密一家。以大日與釋尊爲同體。說不過於一佛之內。證外用。法應二身之差別。三十七尊出生義。乃爲釋師子得於大日。而授于金剛菩提。殆似欲會通同體。別體兩說。然空海作辯顯密二教論。以大日與釋尊之三身爲各別。而云。應化佛者。不說內證智境界。其意蓋急于堅立密教。強欲著其與顯教之勝劣差別。輒以爲是言耳。爾來東密諸師。往往雖固執此見。而其認大日如來之存在於行者心密三昧所觀境。乃固有之。然遂不能立證釋尊以外。大日如來者之出世。說化於事實上。畢竟不外於身格異同之辯而已矣。

評して曰はく、法身說法は法界的にして、六塵を以て教體とす。故に變化身釋迦の單に聲名句文を以て、教體と爲すに同じからずと雖も、兩部大經は、印度に於て結集する故に、結集者印度語を使用するなり、法身の正說、豈印度語に限らん乎。故に經云、各各同彼言音と。結集の經印度語なるを以て、遮那即釋迦と立つるは理由頗る淺弱なり。圓珍の些些疑文に、法身無言。權託示理と云ふは、圓珍未だ法身說法の實義に接せざる以前の疑問ならん歟。圓仁、金剛頂經疏第一に云はく、問、如是、內證、寂靜無相、言心、迴絕、何故、今云、於、內證、境、說、此、經、耶、答、如、汝、所、說、內證之境、言亡、虛絕、何以、故、非

諸凡夫之境、故是即顯教之所說也。彼教未知、如來內證甚深、義、故、今此、秘密教、其、義、不、然、寂照俱時、寂、故、法界俱、寂照、故、法界同、散、不、妨、寂、寂、不、妨、散、如來、內證、其、義、如、是、問、諸、佛、說、法、必、爲、利、他、今、與、內證眷屬、說、法、有、何、利、益、答、是、即、自、受、法、樂、如、轉、輪、王、與、自、眷、屬、受、大、快、樂、非、是、國、內、萬、民、所、知、也。以て法身無言。權託示理は、密教の眞意に非ざるを知るべし。志主、遮那身格、詭辯、縱橫等と罵倒すと雖も、志主の引證する所の普賢觀經に、毗盧遮那遍一切處と説くが故に、法界的の身は凡人所見の歴史上の見地に立つて論ずべき佛身に非ず。若し變化身ならば、所化の凡人所見の歴史上の見地に於て之れを論ずることを得べし。釋尊は、遮那所流現の一身なる故に、本を以て末に相從して、釋迦佛に歸して論ずるに何の怪事かあらん。誰が何れの處に於て詭辯を縱橫に弄せし乎、明かに之れを示せ。然らざれば、却つて志主の詭辯ならん。法全開梨が、彼法華久遠成佛。亦是此經毗盧遮那と釋するは、開會決了なるべし。何ぞ志主の所見の如くならん。台密一家、以大日與釋尊爲同體等と云ふと雖も、遮那釋迦同體は、東密一家最も能く成立す。何ぞ偏して台密と云はん。今、略して、東密一流遮那釋迦同體の教理を示さん。虛氣執を脱して之れを聽取すべし。其の理と

は曼荼羅に於て、横の流現に就かば、四重圓壇悉く大日の流現する所なるを以て、曼荼羅第三重の釋迦、即大日の變化法身なり。法體に約すれば、則ち釋迦即大日なり。此の變化法身の釋迦、攝機益物方便引接の爲に、印度に影現して、八相成道の化儀を示す。是の故に伽耶成道の釋迦、其の法體に約すれば亦即大日なり。此の理を以て、義門に約すれば遮那釋迦二なりと雖も、法體に約すれば不二なり。此れを法體不分、義門得別と云ふ。其の教とは、大日經具緣品に云はく、我昔坐道場降伏於四魔、以大勤勇聲除衆生怖畏と。理趣釋經に云はく、即彼毗盧遮那於閻浮提化八相成佛、度諸外道と。高祖大師付法傳に云はく、一三五乘源一派別、法報應化體同用異、所謂應化佛者、亦名十身盧遮那、大小釋迦等常途顯教之主是也、乃至所謂法佛者、常住三世淨妙法身法界體性智大毗盧遮那自受用佛是也、金剛頂經及大日經等、說是也と。雜問答に云はく、釋迦名毗盧遮那者、其爲機根、無非一切毘盧遮那、無非一切天龍八部云々、雖然、三身四身非無其由、如是無量人法義門併是大日如來萬德一門耳と。但し天台止觀業は、伽耶成道の釋迦を以て本位として、遮那釋迦同體を論じ、天台遮那業と東密は、遮那を以て本位として、同體を論ずるを異とす。東密に於て、遮那釋迦別體

を主張するは、唯東寺の三寶のみなり。高祖大師の眞意に非ざるを以て、古義新義の學將斷じて取らざるなり。志主、弘法大師は、遮那釋迦別體の説と誤解するは、二教論の釋迦三身大日三身各各不同の釋を以て病源と爲す。是れ唯其の文字を讀みて、高祖大師成立の眞言密教の教理を解せざるに由る。二教論は、大日經第六百字果相應品に、大日を以て能例とし、釋迦を以て所例として、大日の説法を明す經文を釋し玉ふ御註釋なり。所釋の經、既に大日と釋迦とを能所例として、義門に約して、別を示せる隨經演義の註釋なれば、體同と雖も、用異に就いて、義門得別に依つて各各不同と釋し玉ふに何の問かあらん。義門に約すれば大日の三身と、釋迦の三身と太だ別なり。何となれば、大日の三身は、悉く法身の故に。瑜祇經に云はく、五智所成四種法身と。釋迦の三身は、報化は法身に非ざるなり。體同用異の釋と、各不同の釋とを以て、通會して實義を得べし。切に告ぐ、僞食すること勿れ。又顯密の勝劣は、本經の説火を見るが如し。何ぞ一概に、弘法大師を貶して強欲等と云はん。別體を固執する者は、唯東寺三寶の徒のみ。何ぞ、東密諸師と云はん。是れ志主、博く本經儀軌及び歴史を涉覽すと雖も、本志を著さんと欲するに急にして、台

密東密の教理に於て、研究深からざるの致す所歟。嗚呼、又大日は、六大法身宇宙の元則、萬有の根源なり、宇宙を認識する者、誰か遮那を認識せざらん。單に三昧觀境とのみ云ふ可きにあらざる也。

釋尊說密教不

抑釋尊果說密教不。

評して曰はく、守護國界經第九に云はく、此陀羅尼者毗盧遮那世尊、色究竟天爲天帝釋及諸天衆、已廣宣說。我今於此菩提樹下金剛道場、爲諸國王及與汝等略說此陀羅尼門と。此の經を以て、釋尊密教を説くことを立證す。

釋尊排呪術

然釋尊未曾行呪術、又常排斥之。

評して曰はく、志主、小乗教の上に於て、外道等の、世流布の呪術の禁と開とを論ずるは得たりと雖も、未曾行呪術と云ひ、常排斥之と云ふは、意、密教所傳の誦呪呼摩祭祀

等の供養法は、悉く皆釋尊入滅後の竄入と云ふに在るならん。然るに、志主、釋尊禁呪の證として掲ぐる所の、第一證、長阿含經第十四は、單に外道梵志等の猥りに、活命の爲に、醫藥呪術を行ざるを排斥して、沙門瞿曇無如此事と云ふと雖も、之れを以て、釋尊一切の呪術を禁絶する確證と解す可きにあらず。何となれば、同經第十二、大會經第十五に、釋尊自ら地神山神等に對して、其の虛僞心を降伏せんが爲に結呪し、又乾沓婆及び羅刹の爲に結呪し、阿修羅諸天等の爲に結呪し給ふ。若し第十四卷の文を以て、絶對禁呪の證と爲さば、一經の前後相違に非ずして何ぞ乎。第二證、四分律第二十七は、六群尼自ら活命の爲に世間の呪術を學習して、之れを行ざるを呵責すと雖も、自ら護身の爲に之れを行ざるは之れを開許せり。知るべし、活命の爲め、又名利の爲に呪を行ざるは、之れを排斥すと雖も、一概に呪術を禁ずるに非ず。故に有部の目得迦に云はく、佛言、諸苾芻僧伽、上座初見行食來、應先教長、跪合掌唱三鉢羅、佉多上座、即應告可平等行と。又云はく、室利笈多、情世尊設毒食、佛遣一人於上座前唱三鉢羅、佉多由是力、故於飯食內諸毒皆除と。此の三鉢羅、佉多是、神呪に非ずして何ぞ乎。又文殊問經に云はく、若肉如林木、已自腐爛、欲食得食、若欲噉肉、三說此

咒云々。又雜阿含經第九に、佛舍利弗に對して、避除蛇毒咒術章句を説き、有部の尼陀那第一に、佛療痔病咒を説き、有部の毘奈耶藥事第六に、佛避除結界惡鬼邪神咒を説き給ふ。大毘婆娑論第十八に、世尊安産の咒を説き玉ふ事を出だし、同論第八十三には、佛提婆の爲に治頭痛咒を説き玉ふことを掲げたり。其の他小乘の三藏中に於て、咒を説くこと頗る多し。然るに偏して排斥を論ずるは一隅を守りて三端を知らずと云ふべし。

方等經雜密呪

至大乘方等部。如非佛說論所言。概屬後代述作。方等又云方廣。元敷衍之義。以明非佛直說。以故。其經典中往往有密呪。

評して曰はく、志主、大乘非佛說の義を取る乎。果して然らば、更に之れを論究せざる可らずと雖も、今は密教に就いての所論なる故に、且らく之れを擱くべし。但し方等の字を釋して、元敷衍之義と云ふは非なり。佛說の十二分教中に、方廣あり、華嚴經亦方廣と名く。豈敷衍の義ならん乎。且らく天台の意に由つて之れを釋せ

ば、方とは方廣なり、廣く藏通、別圓の四教に通じて談ずる故に。等とは平等なり、四機等しく被むる故なり。

外道神物入佛教

密教事相。於是達於完成之域。竟至於與婆羅門教。殆無釋其外貌矣。

評して曰はく、遮那の大悲方便は、種々の機根に隨つて種々の所見の身を現じ、種々所宜聞の法を説きて、正道に引攝するは、加持說法の本意なり。故に原始より婆羅門教に拏枳尼あり、祭祀の人法あれば、密教にも亦拏枳尼あり。彼れに毗紐あり、祭祀の人法あれば、密教にも亦毗紐あり。彼れに事火の人法あれば、此れに亦呼摩法あり。壇儀供養法等隨つて亦然なり、餘は准知すべし。中に於て、彼れは業繫身。或は妄計の身、此れは遮那所現の等流法身なるを異と爲す。佛滅後、外道の神物、佛教に入つて後の發達に非ず、原始密教既に已に斯の如し。然るに佛滅後約二百年にして、外道の神物、佛教に入りてより、後佛教に天等の形像ありと云ふは、未だ密教の教理を解せざる者と云ふべし。

佛像漸興

想。當時佛徒已浸染世俗。漸生崇敬外道神物之風。不然者。豈得有如斯彫飾耶。輒又熟觀其彫飾諸圖。佛徒所禮拜之物。唯有空塔波菩提樹法輪佛遺物等而已。佛傳圖中。佛當在之處。只著佛足跡而標之。未曾彫出佛身。其未有佛像也明矣。方佛在世時。給孤獨長者言。佛身像不應作。蓋佛滅度後。猶久不見有作佛身像者。佛徒意謂。造佛像。非所以敬佛也。其間雖僅有出愛王勝軍王所造檀金二像。及給孤獨長者特得佛聽許所造瞻部影像。尙與後世普爲禮拜作者。其意自別。且未至廣行于世。然在婆羅門教。佛在世時。夙有神像。以祭祀禮拜焉。十誦律云。舍衛國有一天神像。能與人願。有一居士。從其所願。得隨意願。歡喜故。以白氈裹天像身。毘奈耶云。作諸鬼神等像。因想。初外道神像。先入佛教美術。既而佛傳圖中仿之。至以彫出佛身。爾後普造佛像。以禮拜之者。蓋實胚胎婆羅門教之俗也。

評して曰はく、小乗教は、原始時代に佛天等の形像を畫作し彫刻して之れを祭祀することなしと雖も、密教は、兩部大經に曼荼羅を説く故に、原始時代より佛天等の形像を畫作し彫刻する義を説くこと明了なり。又顯教大乘に、浴像功德經あり、灌佛經等あり。又佛在世に既に佛像を造る。何ぞ因想。初外道神像。先入佛教美術。既而佛傳圖中仿之。至以彫出佛身。と云はん乎。然りと雖も、隨緣顯現の一相に約せば、志主の説の如き事なきにも非ざるべし。故に一概に否定せずと雖も、總體に於て取ること能はざる也。

向東觀佛

又説於三昧中立。東向見佛。後世密教曼荼羅。多以東爲上。而開西門。阿闍梨向東踊呪者。其根源乃在於茲。

評して曰はく、東は方位の始なり。胎藏曼荼羅は、因曼荼羅なる故に、東の方に安置して、阿闍梨は座を西の方に設けて東に向つて念誦す。金剛界は、果曼荼羅なる故に、胎曼に相對して西の方に安置し、阿闍梨は東方に坐して西面にして念誦す。又四種法に隨つて方向同じからず。故に東面にして念誦を爲すは、敢て般舟經を以て源とするに非ず。又平素の行法は、多く息災の故に北面にして念誦す。然るを

多以東爲上と云ふは何ぞ乎。

金剛薩埵

傳謂金剛薩埵一人保壽能持密教。閉居于南天鐵塔中。所談荒唐不須復辯焉。評して曰はく、法界道場中間衆の聖衆、教主遮那の教勅を奉けて、皆悉く眞言教法を受持すと雖も、金剛薩埵は未來の不知に代つて說法を請求する對告衆なるを以て、特に金剛薩埵を以て受持密教者と爲すなり。又保壽に至つては、小乘尙留多壽行の法あり。大乘三乘教は菩薩に變易身ありと談ず。況んや密教の三密加持に於てをや。數千年の壽を保つ、敢て怪むに足らざる也。閉居鐵塔中とは、其の典據如何。已入大地の菩薩、果後化他他受用の方便身十方法界往來自在出入無礙なり、何ぞ閉居と云はん。志主、此れ等の教理を知らず、豈教を論ずるを得ん乎。金剛薩埵者、亦與大日同屬假設一法人。若以大日金薩龍猛龍智金智之血脈、唯爲思想系統、以理言之、不以事言之、無敢稱嫡嫡相承口口相傳。是則可矣。苟構造虛傳、以欲博後人敬信、遂却滋疑網、爲密教所不取也。

評して曰はく、金剛薩埵とは、即ち普賢菩薩、遮那に從つて灌頂を受けたる名なり。普賢は既に釋迦在世に出現す、何ぞ假設の法人ならん。大日は前述の如く宇宙の元則、萬有の實體なり、何ぞ假設と云はん。若し遮那は理佛なり、人格と爲して論ずる故に假設なりと云はゞ、不可なり。何となれば、事理は一雙の法門なり。既に其理あり、豈之れに契當する人身ならん乎。又若し大日を以て假設と云はゞ、彼の法華の久遠實成の釋迦も是れ亦假設ならん。能く密教の教理に熟達して大日眞人を理解すべし。然るを以理言之、思想系統と云ふは、却つて密教の爲に取らざる所なり。構造虛傳、以欲博後人敬信とは、誰れ人を指して云ふ乎。生盲は日月を見ず、聾駭は雷鼓を聞かず、徒に經軌の文字を讀んで文底の眞理を解せざるは、蓋し此の如き乎、嗚呼。

龍猛非密祖

夫釋尊已不說密教。大日金薩亦爲假設法人。則不得以龍猛不爲密教開祖。兩部大經作者、所謂傳持八祖除大日金薩者、乃爲之耳。雖然、熟按龍猛傳記、未曾見有應爲密教

開祖之事蹟。龍樹菩薩傳云。龍樹菩薩者。出南天竺。梵志種也。天聰奇悟。事不再告。在乳舖之中。聞諸梵志誦四圍陀典。各四萬偈。偈有三十二字。皆諷其文。而領其義。弱冠馳名。獨步諸國。天文地理。圖緯祕識。及諸道術。無不悉綜。時有婆羅門。善知呪術。欲以所能與龍樹爭勝。告天竺國王。我能伏此比丘。王當驗之。王言。汝大愚癡。此菩薩者。明與日月爭光。智與聖心並照。汝何不遜。敢不宗敬。婆羅門言。王爲智人。何不以理驗之。而見抑挫。王見其言至。爲請龍樹。清旦共坐。政聽殿上。婆羅門後至。便於殿前。呪作大池。廣長清淨。中有千葉蓮華。自坐其上。而誇龍樹。汝在地坐。與畜生無異。而欲與我清淨華上大德智人。抗言論議。爾時龍樹亦用呪術。化作六牙白象。行池水上。趣其華座。以鼻絞拔。高舉擲地。婆羅門傷腰。委頓歸命。龍樹傳又錄龍樹學隱身術。竊入王宮事。付法藏因緣傳畧同。西域記云。龍猛菩薩。善閑藥術。養餌養生。壽年數百。志貌不衰。引正王既得妙藥。壽亦數百。又云。龍猛菩薩。以神妙藥。滴諸大石。並變爲金。是等記事。皆唯傳其能呪術而已。非所以可徵密教開創焉。西域求法高僧傳。敘持明藏云。龍樹菩薩特精斯要。亦不過以可知其能誦呪。而結集持明藏者。却爲其弟子難陀。大乘入楞伽經者。唐實又難陀所譯。固係龍猛滅後之述作。其所謂持內證乘懸記。何足信憑耶。至摩訶摩耶經懸記。不明龍猛所持。

密教。西藏傳。以龍樹之師爲薩羅訶。又分祕密經軌。爲作修瑜伽無上瑜伽四種。且謂其作修二經。金剛薩埵受之於大日。而授龍樹。龍樹傳持七百年。授諸龍智。是爲喇嘛右宗傳燈。然龍樹述作中。未曾見有說密教者。釋摩訶衍論者。起信論之疏釋。固非密教。且雖云龍樹造。姚秦筏提摩多三藏譯。我邦淡海真人三船元開及最澄以來。定論以爲僞作。蓋新羅僧月忠撰之。菩提心論亦稱龍樹造。不空譯。然其釋義引諸經中。有善無畏所撰大日經供養次第法。龍樹豈有引唐代善無畏之言哉。且論首大阿闍梨云。五字。一本作大廣智阿闍梨云。故安然教時義云。或目錄云。菩提心論不空集也。按是書乃不空之徒錄其師說耳。苟具隻眼者。誰不覩破之。故圓珍曰。菩提心論。或云龍樹造。或云與善三藏集。此未決解。私謂後說爲正。

評して曰はく、釋尊密教を説き玉ふことは、先きに掲ぐる守護國界經分明なり。若し守護經は、佛説に非ずと云はく、更に論ぜざる可らず。又龍猛の述作中、未曾見有說密教者とは、何ぞ夫れ淺見なる乎。智度論第九に云はく、佛有二種身、一者法性身二者父母生身。是法性身滿十方虛空無量無邊、色像端正相好莊嚴、無量光明、無量音聲、聽法衆亦滿虛空、常出種種身、種種名號、種種生處、種種方便、度衆生、常度一切、無須臾

息時。如是法性身。佛能度十方衆生。受諸罪報者。是生身佛。生身佛次第說法如人法と。此の中に法性身の說法と云ふは、密教の内證自受法樂の說法を釋するに非ずして何ぞ乎。法身說法は顯教の談ずる所に非ざる故に。又釋摩訶衍論を以て、起信論之疏釋。固非密教と云ふと雖も、眞言の教理を以て解釋するに非ざれば、徹底的に不二摩訶衍を解釋すること能はざるを如何。是の故に顯密兩際に通ずる論と云ふべし。淡海三船最澄の徒、僞論と貶するは、自己所信の宗義に相違するを以てなり。支那本朝華嚴三論の諸師、皆龍樹の眞作と判ぜり。故に一概に僞論と斷定す可らず。釋論所説の教理は、佛教幽玄の眞理を開示して、毫も違ふ所なきを以てなり。菩提心論所引の供養次第法は、梵文の經を引證するものにして、善無畏譯の大日經第七卷に非ず。故に龍樹豈有引唐代善無畏之言哉と云ふは、頗る不當の言なり。又有人、龍樹非密祖と云ふを破して云はく、兩部大經の所説は、一言を以て之れを言はく、阿字本不生の眞理を説くにあり。阿字本不生の術語は、龍樹の教系より出でたり。華嚴般若三論等皆阿字本不生を説く。其の上に於て、密教の所説と、三論等の顯教の所説と大差淺深あり、然れども本不生を説くに至つては同なり、密教の極

意は即ち阿字本不生不可得にあり。此れ等の言句は悉く龍樹の教系より流出したる言なり。故に絶對に、龍樹は密教の祖師に非ずと云ふを得ざる也。龍樹の教理が、極めて密教と深き關係を有することは、争ふ可らざる事實也。加之、西域求法傳に龍樹菩薩特精斯要と云ひ、又龍樹の弟子難陀、明呪藏を撮集して十二千頌を得たるが如き、龍樹と密教との關係の極めて深甚なるを推するに足るべしと。取意當時未有密教也、瞭瞭焉耳。

評して曰はく、龍樹在世の當時、未だ密教あらずんば何に依つて法身說法の義を釋する乎。法身に色相莊嚴言語音聲ありと談ずるは、密教不共の法門なり、兩部傳法阿闍梨たる志主、之れを知らざるには非ざるべし、如何。

外道呪術漸入佛教

願如來滅後、多經年所、佛日翳光、制戒漸弛、佛徒而讚歎外道呪術、如上述。評して曰はく、釋尊弟子の爲に世間外道の神呪に於て、之れを禁じ、或は開するは、志主の前述の如し。故に知る、佛弟子世尊の在世に於て呪を行することあるべし。

何ぞ佛滅後制戒漸弛。佛徒而讚歎外道呪術と云はん乎。素怛覽は別意趣あり、纔に三五の經律を讀んで概判す可らず。況んや大小乗の佛教、既に已に明呪を説くをや。

陀羅尼與明呪之差別

龍猛之時。翅有經律論雜四藏。而呪經未出。別有陀羅尼既興。陀羅尼者。總持之義也。外道所無。外道之呪梵言曼怛羅。以表思語爲義。明梵言毘地耶。以智爲其義。其用竝在祝禱禁厭。陀羅尼固不同之。其初非必有口誦語言。唯能記持諸法名相義理而不忘失。一憶起之。則說法得無礙自在。是名云陀羅尼。故謂得陀羅尼。行陀羅尼。而不言誦陀羅尼。蓋心中總持諸法者也。

評して曰はく、外道には呪ありて陀羅尼なし、故に呪と陀羅尼と不同なりと雖も、佛教には神呪にして而も陀羅尼なるあり、陀羅尼にして而も神呪なるありて、其の別辨じ難し。其の眞言の一一の文字に無量の義を含蓄し、無量の法を詮顯し、無邊の功德を總該攝持す、故に陀羅尼と云ひ、之れを譯して總持と云ふ。神呪の梵文も亦

一字に千理を含蓄して、敢て陀羅尼の文字と異なることなし。陀羅尼に除難破魔の勝能斷惑證理の力用あり。神呪に亦斷惑證理の力用、除難破魔の勝能あり。故に二と云はゞ則ち二、不二と云はゞ則ち不二なり。二者斷じて全別と判ずること能はざる歟。眞言即陀羅尼なり。呪の梵語を曼怛羅と云ふ。然るに大日經の疏に、眞言の梵語を擧げて曼怛羅と云ふ、以て知るべし。又神呪は陀羅尼と法體同なりと雖も、且らく差別を爲さば、作用に異なる歟。呪には漢字等の隨方の文字を加用するあり、大元神呪の速救急等の文字の如し。更に四句分別して云はく、

唯呪非陀羅尼者、如外道等神呪。

唯陀羅尼非呪者、如佛教念慧爲體開持不忘等陀羅尼。

亦呪亦陀羅尼者、如佛教中所說神呪及陀羅尼。

雙非句、除前相。

志主龍猛時代呪經未出と云ふは、大乘經は後世の作にして佛説に非ずと計するを以てなり。有部の目得迦に依るに佛説の神呪を出せり。龍樹以前既に呪經あり、何ぞ未出と云はんや。又、有人破して云はく、大村君は陀羅尼を以て記憶術と見て

阿の一字を覺へると、阿彌陀佛阿闍佛阿難阿伽陀藥等の阿を以て首字と爲すものは、皆之れを記憶することを得。故に四十二字門を覺へ得れば、宇宙間の萬有悉く記憶して一も知らざるなし。故に辯說爽快にして說法自在なり、此れを以て字陀羅尼を得と論じて、菩薩の身體を以て字引の如く爲すは、太だ誤なり。何となれば、智度論に依るに、文義、忍、呪の四種の陀羅尼あり。中に於て、且らく文字陀羅尼に就いて論ずるに、得陀羅尼と云ふは、文字に字相と字義とありて、例へば、梵文の羅字は塵垢を相とし、遮字は遷變を相とす。是れ則ち染淨變不變、相對的なり。然るに、菩薩は更に深く其字義の絕對不可得の眞理に悟入するを字陀羅尼門に入ると云ふ。陀羅尼を誦するは修行なり。得陀羅尼、行陀羅尼は得果なり。故に、得陀羅尼とは、菩薩四十二字を讀みて先づ其の字相を知り、更に進みて深く絕對平等、無相不可得の空理に悟入するを云ふ。故に記憶術を云ふにあらず。智度論を熟讀せん人のれを知るべし。又、陀羅尼を以て記憶術と爲さば、智論の入音聲陀羅尼を如何に解釋するや。毀譽褒貶に對して、其の心動轉せざるを、入音聲陀羅尼を得と云ふ。菩薩は、音聲の上の不可得の理を證得する故に、音聲の上の屈曲差別たる毀譽褒貶の

爲に心動轉せざるを、入音聲陀羅尼を得と云ふ。然るに陀羅尼を以て記憶術と爲さば、入音聲陀羅尼を得れば、則ち何を記憶するや。説の是非を知らんと要する者は、須らく智度論を讀むべしと、取意。

呪經與陀羅尼經

但此種陀羅尼經中、帶外道呪法之意者、往往而有焉。

評して曰はく、其の義なきに非ずと雖も、外道の呪と佛教の呪との差別を辨ぜざるは云何。

安然卓見

故安然序其八家祕錄曰、竊檢諸阿闍梨目錄、並於貞元錄中、抽其新入經法、以爲眞言一家教門、諸舊譯中陀羅尼法、皆不取之、遂使學者、不了所由、缺博覽焉、可謂眞中肯綮者矣。

評して曰はく、貞元錄中新入の經軌を抽きて、密教相承の經軌と爲して之れを授く

るは、太だ理由あり。何となれば、無畏金智不空は兩部純密教の祖なる故に、惠果相承は、金剛智不空の法脈なる故に、惠果特に無畏金智不空所譯の經軌を抽き取りて、眞言一家相承の經軌として弘法大師に授く。又參考對照に便せん爲に、流志等所譯の經軌を取りて之れを授與すと雖も、舊譯の三藏は、雜部の密教相承の故に、正依とするに非ざるなり。安然此の理を解せずして、遂使學者不了所由缺博覽と評するは何ぞや。彼の愚を學ぶ者は、亦愚と云はざるを得ざる也。

鐵塔相承說之妄誕

而有更爲說者謂龍猛開南天鐵塔面受兩部大法於金剛薩埵其說本出於金剛頂經義訣曰此瑜伽經大經本阿闍梨云經夾廣長如床厚四五尺有無量頌在南天竺界鐵塔之中佛滅後數百年無人能開此塔以鐵扉鐵鎖而封閉之其中天竺國佛法漸衰時有大德先誦持大毘盧遮那眞言得毘盧遮那佛而現其身持誦成就願開此塔於七日中遶塔念誦以白芥子七粒打此塔門乃開塔內諸神一時踊怒不令得入唯見塔內香燈光明一丈二丈名華寶蓋滿中懸列又聞讚誦此經王時此大德至心懺悔發大誓願

後得入此塔中入已其塔尋閉經於多日讀此經廣本一遍謂如食頃得諸佛菩薩指授所堪記持不忘便令出塔塔門還閉如故爾時書寫所記持法有百千頌此經名金剛頂經者菩薩大藏塔內廣本絕世所無此文中大德之名固不可知而後代密家據趙遷不空行狀嚴郢不空影讚及三十七尊出生義以附會于龍猛付法傳龍猛傳云入南天鐵塔中親授金剛薩埵灌頂誦持此秘密最上漫荼羅教流傳人間於是龍猛鐵塔相承說始成臬寶玉印鈔等以義訣所謂大德爲龍猛證之以楞伽懸記呼龍猛稱大德然其出據薄弱固不足取焉金剛界傳法次第記又引金剛頂義訣云南天竺國有大鐵塔中有金剛界曼拏羅聖者形像鑄鐵所成其塔中有梵夾廣如床廣八九尺高下五六尺盡是金剛界大教王廣梵本經是頗異於前所引義訣之文義訣今本唯存上卷傳稱智藏撰述智藏卽不空之諱也然卷首不置其名文亦似非不空之筆而其所釋本經乃爲金剛智譯略出經蓋金剛智之徒所筆錄耳海雲所引無龍猛開塔及薩埵而授之事且塔中鑄鐵所成曼拏羅像不同義訣所言稍如近于傳其實想莫乃非金剛智或不空口決眞本歟圓珍乃以鐵塔爲往古賢人所造法寶藏庫是如愈得眞者情未知其所據至尊海祕密決疑抄則引云如來錫杖以白鐵爲環以鐵塔之鐵亦爲白鐵噴飯殆不可支焉更

考義訣之文。龍猛未入塔中。又未謁薩埵。而謂能持毘盧遮那真言。果爲於何處從誰傳之耶。或爲塔外既有密教耶。殆是自家撞著之說耳。不須復深論也。鐵塔相承若果爲實。則知之者豈獨金剛智不空而止哉。必應於印度廣有其傳說。埋所當爾。然而法顯佛國記。玄奘西域記。義淨求法高僧傳。慧超往五天竺國傳等。入竺諸家所記。無一及於是者。何也。是可以證印度絕無如此傳說者非耶。我邦德一。以其無文傳疑之。亦固宜矣。

評して曰はく、義訣は現代唯上卷のみを存すと雖も、弘法大師惠果に從つて之れを相承し給ふことは燎然たり。惠果は不空正嫡の法資なり。不空に從つて義訣の大徳は何人なるかを聴取して弘法大師に口授し給ふなるべし。大師、豈私案を以て龍猛と断定し給はん乎。假令、金智之徒筆録と爲すとも亦然り。此の文中、大徳之名固不可知と云ふは、評論を好む妄評に非ずして何ぞ乎。惠果、空海の相承は面授面なり、其間の消息察知すべし。又、玉印鈔に楞伽懸記の文を擧ぐるは、其の例を示すのみ、敢て證とするの意にあらず。其出據薄弱不足取と云ふ評は、志主に返戻すべし。淨住の海雲撰の金剛界傳法記は頗る誤謬あり、之れを評すること、天台法曼流祖相實法印の審印信謬譜、及び泊如僧正の鐵塔誦傳の啓蒙の如し。斯の如く

誤謬ある書を取りて稍如近干傳其實と云ふは、何ぞ夫れ偏見の甚しき乎。義訣の卷首に記者の名を置かずと雖も、入唐八家の諸師、唐の阿闍梨に從つて、不空三藏の記と相傳す、何の疑問かあらん。然るを亦似非不空之筆と云ふ、其の似非の點如何宜らく之れを示すべし。又且らく與へて、金智の徒の筆録と爲すとも、門弟子菩提三藏に親炙して筆録する所、敢て疑を容るべきに非ざるなり。龍猛出世以前、既に釋迦所説の密教あり。龍猛開塔以前に、遮那の真言を受持するに、何の自家撞著かあらん。志主、前に大日を論じて云はく、其認大日如來之存在、於行者心密三昧所觀境、乃固有之と。又云はく、假設一法人と。是れ自家撞著に非ずして何ぞ乎。蔽己臆脚、發他腫足は君子の爲さざる所なり。法顯、玄奘、淨義等の記する所に、鐵塔の談なきを以て、印度絶無と云ふは、早計と云はざるを得ず。何となれば、入竺諸師の記録に託せざるを以て否定せば、探玄記に掲ぐる所の日照三藏口傳の南天城南の大塔も亦虚説なるべし。法顯等入竺諸師の記録に之れなき故に、菩提達磨も亦印度に絶無なるべし。法顯等入竺諸師の記録に之れなき故に、豈夫れ然らん乎。法相の徳一、初は密教の流傳を疑ふと雖も、後に入密して高野大師法水の末流を掬せり、

以て理解すべし。

唐慧祥法華經傳記云。昔外國有鐵塔。高丈餘。於中安置芬陀利迦阿差摩。摩訶毘盧舍那經等梵夾。各有百千偈。又華嚴探玄記云。日照三藏云。此城在南天竺。城東大塔是古佛塔。佛在世時。已有此塔。三藏親到其所。其塔極大。東面鼓樂供養。西面不聞。於今現在。密家依之。欲證鐵塔實在。奈其遂不的確。何西域記載。僑羅國西南三百餘里。有跋邏末羅耆釐山。全山殆以一巖成。引正王爲龍猛造迦藍於茲。去山十數里。鑿開孔道。當其山下。仰鑿疏石。以構長廊。步簷崇臺重閣。閣有五層。層有四院。各鑄金像以置之。量等佛身。妙窮工思。自餘莊嚴皆用金寶。穿巖作牖。中室朗然。龍猛以釋迦佛所宣教法。及諸菩薩所演述論。鳩集部別。藏在其中。上第一層。唯置佛像及諸經論。下第五層。置資產什物。中間三層。僧徒所舍云。法顯所記。達嚩國過去迦葉佛僧伽藍。曰波羅越寺者。卽是所謂龍猛南天竺鐵塔。蓋出於此伽藍之訛傳焉耳。西域記又載。婆毘吠伽論師。外示僧法之服。內弘龍猛之學。受觀自在菩薩之教。至南天竺。歎那羯磔迦國金剛神所。誦持金剛陀羅尼三歲。呪芥子以擊石。開巖壁而入洞。以待彌勒出世。是無乃非龍猛開塔說粉本乎。彼此所說。何相似之甚也。但以鐵塔之說過怪。或視爲寓言。乃附所謂深祕之釋。以塔爲

法界宮殿。於是會通乃成。而荒誕自廢。不須復追窮也。要之。有呪術而無密教。有龍猛而無鐵塔。塔中所傳。或謂胎金兩部。或謂金界一部。竝不過說。屢樓幻影矣。

評して曰はく。法華傳探玄記は、鐵塔誦傳の啓蒙に於て始めて之れを掲ぐ。是れ唯相似の事實を示すのみ。之れを以て鐵塔の實在を證せんと欲するに非ず。啓蒙を一讀せば、燎然たるべし。其の他に於て眞言宗の先德學將誰か法華傳探玄記を以て鐵塔の實在を證せんとする乎。妄評すること勿れ。西域記の龍猛菩薩の爲に、引正王の建つる所の伽藍、清辨論師石窟等の事を以て南天鐵塔の粉本と云ふは、師心の憶說にして論ずるに足らず。金智不空、引正王建立の伽藍、清辨石窟の事實を知らずして、誤つて鐵塔と傳ふべけん乎。其の人格を研究して評を爲すべきなり。若し凡夫の意識の上に、怪を感じざるを以て虛傳と爲し、或は寓言と爲さば千古の事實、十中の半は虛傳寓言なるべし。豈夫れ然らん乎。密教は法々の上に於て、淺略深祕の兩釋を作るは常の事なり。志主自ら兩部傳法大阿闍梨と稱す、豈之れを知らざらんや。事實に於て、實在の塔を法界宮と釋す、何ぞ之れを怪まん。敢て會通の爲に法界宮の釋を作るに非ざるなり。荒誕自廢、不須復追窮の評は、返つて志

主に呈すべし。金剛頂義訣を破壊せんと欲して、不空の自記に非ずして金智門下の筆記と云ひ、又引正王所造の伽藍、或は清辨石窟の訛傳と云ふと雖も、相像憶談に過ぎずして、義訣を否定する理由甚だ薄弱にして、義訣を破壊し了する能はず。義訣を破壊し了せざれば、南天鐵塔巍然として、天を衝きて立てり。志主の想像憶説、荒唐無稽追窮すべき價值なし。志主の病眼は、龍樹時代に呪術ありと雖も、密教なし、龍樹あれども鐵塔なしと見る。吾人の正眼は、龍樹時代に呪術あり、密教あり、龍樹あり、鐵塔ありと見る也。有人、破して云はく、大村氏は、南天鐵塔を嘘言と斷定して、其の結論に清辨論師入洞窟の話をして、鐵塔の粉本として、之れを捏造したるものと云ひ、又、虚説なれども、或視爲寓言、乃附所謂深秘之釋、以塔爲法界宮殿、於是會通乃成、而荒誕自廢、不須復追窮と。鐵塔を以て法界宮殿と云ふに至りては、追窮せずとの意なる歟。果して然らば、大師は最初より法界宮殿と釋せり。然るに弘法大師が前に種々の解釋を爲し、窮して終に法界宮殿と釋したるが如く云ふは、思違ひなるべしと、取意。志主は、自ら傳法阿闍梨と稱す。深く密教の教理を理解すべし。事物鐵塔豈法界宮に非ざらん耶。

吳竺律炎譯經

有竺律炎者、中印度人、與維祇難相伴至吳、難卒之後、黃龍二年、於揚都譯摩登伽經等。摩登伽經中、有旃陀羅女招阿難呪釋尊擁護阿難呪、六句神呪、婆羅門呪、刹利呪、毗舍神呪、音陀神呪、大梵天王、婆毘多羅呪、八首、起語始用唵字、結語用莎縛訶、唵字出于烏波尼沙土、以阿塢莽三字合成、三字元表三吠陀、最勝尊貴、無物可比、深高靈妙、言語道斷、故呼曰唵、以表歸仰之心也、後轉爲毘紐、溼縛梵天三尊合一之幪幪、古來外道明呪、起首皆用此語、佛教乃亦仿之、而莎縛訶之語亦出於外道呪、六句神呪者、其功力在得免呵責、爲後來六字經法根本、是經說星宿、頗爲委詳、其形貌姓氏、祭法等、竝似婆羅門教所說、是則外道星宿崇拜之風、亦漸入佛教者也、經中又說旃陀羅母誦呪之狀、云、爾時、女母於自舍內、牛糞塗地、布以白茅、於此場中、燃大猛火、百有八枚、妙過迦花、誦呪一周、輒以一莖投之火中、緣是觀之、後世密教持誦護摩等法、可以察其所由來也。

評して曰はく、密教の眞言の初後に、唵莎縛訶あり、星宿供、呼摩供、及び三重壇、金剛線等に於て、廣く諸經軌等を研究せられたるは、其の博覽稱讚すべし。本來密教の

法門、瑜伽の儀軌は、遮那法身法界宮に於て一法缺くることなく、一水漏することなく、宇宙の動作を以て悉く三密の作法として、圓滿無碍に之れを説き玉ふと雖も、加持界中、隨緣顯現の日の前には、本志の説の如き事情なきにも非ざるべき故に、一概に否定せずと雖も、之れを以て密教事相の根源と認めて、法界宮の眞説を無視するが如きは、兩部傳法阿闍梨遍照無障金剛と稱するに對して、自家撞著にあらずして何ぞ乎。

華嚴教主

跋陀羅所譯。又有大方廣佛華嚴經。其梵本者。稱昔道人支法領從于闐得之。其述作年代。蓋在西晉之時歟。後至唐代。實又難陀更譯八十卷經。即增訂本也。二經大抵相似。唯舊譯教主盧舍那。新譯謂之毘盧舍那。毘之義即遍。盧舍那之義即照。連之以向上其身格耳。或以釋尊爲應身。盧舍那爲報身。毘盧舍那爲法身。或毘盧舍那爲自性身。釋尊爲變化身。固皆不過於釋尊身格之異稱。要之法身而說法。以是經爲宗。

評して曰はく、華嚴經の教主は十身具足の盧遮那身を示現して普機のために普法

を説く故法報應化の三身を以て概判すべからずと雖も、強ひて三身を以てこれを判ずれば、所説は即ち對機の説法なる故に、能説の佛身は、他受用報身、所説の善法は、隨他意の法門なり。故に、華嚴五教章第一に云はく、一是性海果分。當是不可説義。何以故。不與教相應故。即十佛自境界也。故地論云。因分可説。果分不可説者是也。二是緣起因分。即普賢境界也。法身は對機の説法を爲さず、故に果分不可説と云ふ。然るに志主、要之法身而說法。以是經爲宗と論ずるは、今古の珍説なり。恐らくは華嚴經を解せざるならん歟。如義眞實語を以て、果性不可説の法門を説くを、眞言密教とす。果分の法門は、自性法身に非ざれば、之れを説くこと能はざるを以ての故に、密教の教主は法性法身なり。顯密の岐路を混じて、法身を以て華嚴の教主と爲すは、一笑に附すべし。

卽事而眞

今竝入密教。各爲呪主。如是取俗間所崇信諸神以禮拜之。令世俗信之。從其信而教以佛道之意。是所以密教之興。而古德濟世之大慈悲。自不得不然而已。當相卽道卽事而

眞之義、乃可見焉。化度之法、要隨方適時。何必膠柱株守哉。雖似背釋尊排呪術之意、豈其爲戾於弘濟之本願者耶。

評して曰はく、此の段、稍々密教の意を得と雖も、若し密教を以て古徳大悲作成と爲さば、卽事而眞、當相卽道の義に契はざるにあらざるなき歟。

梵網經

惟華嚴經出後、欲令大乘戒權威最高、而述作此經耳。

評して曰はく、梵網經を以て、華嚴部に屬するは説の如し。而して作者は、印度人歟、將支那人歟、若し印度人なりと云はく、彼の土は、釋迦一化無別菩薩僧の故に、小乘制戒の戒法の外に、別に大乘戒あるに非ず、何ぞ大乘戒權威最高と云はん耶。若し支那人ならば、製作の時代、及び梵國に流傳して梵譯せられたる年代如何、本志の説の如きは、只暗推にして明了を缺くに似たり。

阿含部中有呪者

長阿含經載釋尊爲降諸天幻僞虛妄心所説五呪、阿含部中有呪者止是耳。評して曰はく、志主が佛陀の眞説なりと信ずる阿含經中、既に已に呪あり。前に釋尊神呪を説かずと云ふ自語相違に非ず耶。

八識十地十度等

經中所明八識十地十波羅蜜諸法本不生義等、皆密教教相之所由來也。評して曰はく、八識十地十波羅蜜等は、兩部大經の説相にして、教相にあらず。説相と教相との分齊を混同して、談義す可らず。

印之由來

抑印者元印璽也。圖章也。印于文書器仗以爲信。印于封檢以爲緘。故又云契。取于記驗有徵。符合不濫。而決定無疑也。佛徒夙用之。毘奈耶雜事云、時有賊來。盜僧庫藏并及私物。爲無記驗。苾芻不知何時失物。佛言。苾芻可著其印。是時六衆便以金銀瑠璃水精玉石而作其印。於指環上以寶莊飾。見諸俗人。卽便舒手呈示指環。願言仁等無病長壽。諸

俗問言。指上何物。答言。賢者。此是指印。所開許。俗人譏笑。作如是言。沙門釋子爲憍慢事。衆寶嚴飾爲指環印。非眞沙門。非婆羅門。諸苾芻聞已。白佛。佛言。苾芻不應著指環及寶莊飾。應用五種物爲印。所謂鍮石。赤銅。白銅。牙角。六衆印上。刻作男女行非法像。諸俗見譏。仁等沙門尙有染欲心耶。苾芻白佛。佛言。凡印有二種。一是大衆。二是私物。若大衆印。可刻轉法輪像。兩邊安鹿。伏跪而住。其下應書元本造寺施主名字。若私印者。刻作骨鏤像。或作觸體形。欲令見時。生厭離故。可知。佛在世。既有寺印。及比丘私印。刻法輪觸體等形。阿育王亦用牙印。見于阿育王經等。其後陀羅尼門興而有字印。出于般若大論等。先已說之。其以阿字表不生義。以羅字表塵垢義。猶輪形標說法。觸體形標厭離想。於是印契乃兼標幟之意。故印梵言母陀羅。亦有標幟義。既而呪法之興也。三密之思想發達而伴之。因欲印成意密所觀之境。口密所誦之呪。銅牙刻形印。不可以印于觀想音聲之上。乃代之以身密有標之相。以求結成瑜伽。所以工夫種種手相者。蓋不外於是。而仍呼之以印契者。乃借標幟義而道耳。

評して曰はく、印契の釋義、説き得て餘なし。獨り初心晚學のみならず、前資勤奮も亦之れに依つて解す可き也。

第二篇 初 唐

論じて曰はく、志主は、小乘經中、四阿含經を以て佛陀の眞説と爲し、大乘諸經を一括して後人の作と判じ、其の中に於て、密經漸次に發達を爲す。而して其の發達の年代を檢するに、譯經の前後を以て考證を爲し、研究緻密、閱覽博該、高く先哲に越へたり。大乘非佛説主義者は、志主の説の如くなるべしと雖も、是に於て論ぜざるを得ざるあり。何となれば、四阿笈摩佛陀の眞説なることは、共許と雖も、小乘經所説の法理と、大乘經の法理とを對辨するに、小乘經は淺く、大乘經は深し。大乘經中に於て、顯密所説の法理を對辨するに、顯淺密深、諸宗論なし。志主亦許す歟。而して佛陀の眞説なる小乘經は、總じて法理の淺薄にして、後人作經の大乘の法理の深遠なるは如何。後人の作經、佛陀の眞説に勝れて深きは、何の故かある。何の故に、正覺正見の佛陀、深玄幽微の法門を説き給はざる耶。若し所被の機、二乗の故に、對機説法止むを得ざる故にと云はく、聲聞等の外に既に菩薩あり、何ぞ菩薩勝慧の爲に、深遠なる宇宙の眞理を説き給はざる耶。是れ余が大乘非佛説主義者に對向して、質疑の

一端なり。志主の解釋如何。

密教樞機

密教眞價實在觀法而存焉。若微觀法者。則有相事密。悉是形骸耳。精粕耳。於其爲宗教。復何益之有耶。

評して曰はく、密教の眞價、志主の説の如し。現代の眞言行人、省察せざるべからず。

般若理趣

大般若經理趣分。不啻爲理趣經根原。又實爲密教教理之淵藪。經謂薄伽梵已獲一切如來之灌頂。住廣大遍照身語心性。依遍照如來之相。在欲界頂他化自在天王宮中。而爲金剛手菩薩等說之。其所明。主在一切諸法自性清淨平等。卽是理趣法門。秘密法門。金剛法門。灌頂法門。又卽是平等智印也。若能信受之。則現身疾證。無上正等菩提。當經十六大菩薩生。定得如來執金剛性。乃說三呪以加持之。令持之者。消除業障。聞法不忘。疾證無上道。忿怒調伏。大貪大樂等教相。亦皆歷然在焉。其遍照如來者。非密教教主毘

盧遮那佛而誰乎。金剛手菩薩者。卽爲金剛薩埵。十六大菩薩生一轉。而加之以金剛薩埵。以成金剛界十七尊。可謂密教之所負於般若。寧過於華嚴矣。

評して曰はく、般若理趣品は、本質にして、理趣分は、影像なるべし。何となれば、理趣分の當分に在つて、十六大菩薩生とは何を指して云ふ歟。基師述讚太だ解釋に苦めり。若し理趣品を以て、本質と爲すに非ざれば、如何にして當生十六大菩薩生と説くことを得る。十六大菩薩生とは、四方四佛の四親近の十六大菩薩を指すに非ずして何ぞ耶。志主、大般若の理趣分本、理趣品末を成せんと欲して、本影を顛倒して解釋を爲すは太だ誤りなり。理趣品は、毘盧遮那自受用身の直説なる故に、常恆三世一切時、身語意業金剛大毗盧遮那如來と。大般若理趣分は、變化身の釋迦密教を傳説せんと欲して、遮那の相を現じて之れを説く。故に、經に依遍照如來相と。既に能所依の相あり、何ぞ能依の雜部密教を以て所依の純正密教の根源と爲さん。若し然らずと云はゞ、理趣分當分に於て、如何が十六大菩薩生を解する耶、如何。釋尊所説の顯密、雜部密教に於て、其の雜に二あり。一は、顯教を説く中に於て、殊に別に密教を説く。但し法門を交雜せしむるに非ず。守護國界經、心地觀經等

の如し。此れに亦事相と教相とあり。大品般若經往生品の罪多福少、福多罪少、但行清淨の三菩薩の中、但行清淨の三類は、密教の教相を説く。事相は知るべし。二は、密教の法門を説く中に於て、特に顯教の法門を交雜して説く、即ち理趣分等の如き、是れなり。又理趣品と理趣分とに就いて更に私案あり、下に至つて委悉に陳すべし。

十六大菩薩生

十六大菩薩生一轉、而加之以金剛薩埵。以成金剛界十七尊。評して曰はく、理趣會の十七尊とは、慾觸愛慢の定慧の八尊と、春夏秋冬の四季の菩薩と、色聲香味の四塵の菩薩とを以て伴とし、金剛薩埵を主と爲し、主伴相合して十七とす。十六大菩薩とは、金剛界曼荼羅四方四佛の四親近の衆なり。故に、法門羯磨彼此不同なり。然るを十六大生に金剛薩埵を加へて理趣會の十七尊と爲すと云ふは、師心の妄解なり。

胎金兩宗之本原

古來我邦密家、憑據大日經疏、以蓮華喻胎藏、漫荼羅義、呼云妙法蓮華漫荼羅。又以毘盧本地身爲妙蓮華最深祕處。金剛頂義訣、以梵網爲金剛頂經之淺畧者、謂胎藏之本在法華。金剛頂之本在華嚴、梵網。見其未中肯綮焉。

評して曰はく、我が邦密宗の先德、法華を以て、大日經の淺略と爲し、華嚴を以て、金剛頂の淺略と爲すは、經の精髓に依る。金剛界は、修生顯得の智曼荼羅を本とす。故に月輪を以て、標幟と爲す。華嚴經は、緣起因分に約して、佛智不思議の作用を説くを宗とす。然りと雖も、五相三密の觀行を説かざる故に、金剛頂の淺略と判ず。無畏三藏、華嚴十地品の深祕の十地を釋するに、金剛頂の十六大菩薩生を以てす、甚だ謂れありと云べし。胎藏法は、本有本覺の理曼荼羅なる故に、蓮華を以て標幟とす。法華經は、實相印を説くを以て旨とす。然るに、五輪成身法界體性觀等を説かざる故に、大日經の淺略と釋す。無畏三藏、大日經を釋して妙法蓮華最深祕處と云ふ。能く其の旨を得たりと云ふべし。經の精髓を究めずして、唯經の説相の酷似する

を見て、斷案を爲すは、却つて未中肯綮也。

烏茶國灌頂師

龜多小乘師、而爲國王灌頂師。當知烏茶國既有灌頂法、而印度密教、由來唯是事相、非必大乘也。

評して曰はく、印度國王、卽位の時、小乗の師灌頂師と爲つて、灌頂を行ずるは、印呪加持の作法にあらず。故に密教に非ず。彼れ亦秘密と云はず。小乗は戒法を以て秘密と稱す。彼の觀法授戒等の儀則作法、悉く教理あり。何ぞ唯是れ事相と云はん耶。

阿地瞿多譯經傳法

阿地瞿多、中印度人、精練五明、妙通三藏、志弘像教、踰雪嶺、涉沙河、永徽三年正月、廣將梵本、至長安、勅置慈門寺、沙門大乘琮等十六人、請瞿多於城西懷德坊慧日寺浮圖院、以三月上旬、建普集會壇、英國公李勣、鄂國公尉遲敬德等十二人、助成緣壇、所須並皆

供辦、以受灌頂、法成之日、屢降靈異、京中道俗、咸歎希逢、是卽雜密都部造壇灌頂受法之嚆矢也。先智通所受、則觀音獨部法耳。沙門玄楷等、固請譯其法本、乃以四年三月十四日、起首於慧日寺、從金剛大道場經中撮要鈔譯、集成十二卷、以四月十五日、畢陀羅尼集經是也。于時、中印度大菩提寺僧阿難律木、又師迦葉師等、於經行寺譯功德天法、乃編入集經、後般刺蜜帝所譯大佛頂首楞嚴經原本、亦稱那爛陀金剛大道場經、當知集經原本、金剛大道場經、元於那爛陀寺成、而大菩提寺亦傳其法、乃謂雜密教法、主於中天竺摩揭陀國發達、蓋無不可也。今通覽集經、先有佛頂法、則大神力陀羅尼經之鈔譯、初說淨室中安置佛頂像、其右作觀音、左作金剛藏、佛光上作首陀會天散華形、水壇安帝殊羅施、又置爐燒火供養、又說佛頂三昧曼荼羅法、積屎塗壇、四方四門、唯開西門、壇上置五寶瓶、呪師於西門禮拜誦呪、請釋迦佛中心坐、請釋迦心佛東門、金剛藏爲南門侍者、十一面觀音爲北門侍者、至心供養釋迦文佛、觀世音菩薩、金剛藏菩薩、并各其眷屬、次說金輪佛頂像法、取白疊若絹布、先畫世尊、座下作寶池、池四邊作鬱金華、四天王各隨方立其下、左邊畫文殊、右邊作普賢、師子白象間、畫般若菩薩、空中作五色雲蓋、其左右有淨居天、雨七寶華、次有佛頂八吋壇法、說治地埋寶、并繩點位、五色界道、四方

四門極詳。壇三重院。唯開西門。列諸尊座位。供養燈明。飲食香華香水等。其類胎藏曼荼羅。一見而可辨。西門安爐。燒火供養。有三十二印。二十五呪。其屬於行者作法者。即護身結界奉請蓮華捧足。座大三昧耶。勅語結界禮拜數珠懺悔縛鬼神等。是此中蓮華捧足印呪者。兩部大法及十八道法。竝取用之。即華座印明是也。如大三昧耶。亦兩部大法共用之。故雖斥集經謂雜密。純密兩部之原。則却在于茲矣。護身有內外二義。內護謂持戒及起四無量心。乃見事相稍帶教相。印呪之屬于所請諸尊者。曼荼羅座位所列之外。有轉輪放白光明。白光明智輪。智頂滅罪。佛印。佛輪。一字佛頂等。他年及變遷發達。往往亦各成一尊法。佛頂者。元出於崇佛之頂相。立以爲別尊。更分化而生諸佛頂。所謂擬人法。其所由來。不在外道焉。然光聚梵言帝殊羅施。亦取溼縛之一名。此經所說。卽爲金輪光聚二佛頂法之初出。又爲餘諸佛頂及佛眼等法之濫觴。次說一切佛頂像法。佛頂左右各有一菩薩。其上各有須陀會天。在五色雲上散華。二菩薩後各有四菩薩。其上又各有二菩薩。下各有一菩薩。像後畫雙樹。樹上畫凌霄華。又造四肘水壇。其中心安火爐。燒火供養。說二十六印。二十四呪。其中有佛眼。佛毫相。佛牙。佛跣。折囉。佛棒。佛刀。及阿闍連華德。無憂。德旃。檀。毘。婆。尸。相。德。藥師等諸佛頂。其佛眼。佛毫。佛牙等。竝亦出於如來身

分之擬人法。後皆爲胎藏法中一尊。附藥師印呪。而說藥師法。造藥師像。然燈供養。以呪索呪病障。又造七重院壇。布置千燈。中心座上安像。以軍荼利法結界。供養誦呪。比于前出藥師經。見事相頗進。阿彌陀法者。阿彌陀佛大思惟經之鈔譯。其畫像法。彌陀之右作十一面觀音。左作勢至菩薩。說寶殿莊嚴極詳。又有壇法。中心安彌陀像。其面向西。佛前著火爐。呪師向東。誦呪供養。有七呪。十四印。梁譯鼓音聲陀羅尼之後。阿彌陀法而有事相者。是爲初出。次有大輪金剛陀羅尼。金剛界法取之。卽大金剛輪明是。又有作數珠法。作金剛杵法。後者或非佛部之攝。當屬金剛部歟。次出般若波羅蜜多。大心經。蓋全譯而非鈔出。其序分之次。先說般若菩薩像法。以般若爲一尊。乃亦擬人法。而始出。于是經由來佛教諸菩薩。大抵以法擬人而建立焉。文殊之於智。普賢之於行。觀自在之於救濟。皆是。至如虛空藏。除蓋障等。則直可得依其名而知其本。大集寶積般若等所出諸菩薩。亦咸無不然。固非如龍樹提婆馬鳴。無著世親等。實有其人也。般若像法。菩薩之右畫梵天。左畫帝釋天。菩薩光上左右各作須陀會天。散華像。座下畫香爐。供養具。其左右各布置八神王。其下畫呪師。其壇法。四肘方壇。中心安釋迦佛向西。其東安般若菩薩。北安梵天。南安帝釋。中心佛前及壇四角。各置香爐水罐。又一壇法。三重四門。內院作一圓月。中安

般若菩薩向西第二院。南安帝釋。北安梵天。東安使者。外院四方各列四神王像。或造水壇。安像若香爐。護身結界。向東誦呪供養。總有二十一印十七呪。其中屬軍荼利結界法者。有加持白芥子辟除毘那夜迦結地界。結四方界。結虛空界。大結界。普供養。搯珠等印。呪。結地。結四方。結虛空界三印。呪。即爲兩部大法及十八道法之所共用。此法中又始說結界用四概可見。結界法漸精。且印呪名相次序。大有近似於後代通法者。而此經雖不明般若菩薩部屬。其聰明陀羅尼一名十方一切諸佛母呪。又佛言曰。如是神呪是諸佛母。乃以般若菩薩爲佛部母也。所謂部母者。蓋始於是。其屬于佛部。復奚疑耶。十一面觀世音神呪經亦如非鈔譯。比于前出十一面法。發達甚顯著。其七日七夜都大道場供養法壇者。即觀音部大曼羅灌頂法也。今略說之。第一日。以軍荼利法行辟除結界。治地。第二第三日泥地。第四日牛糞香泥塗地。埋五寶。五穀。行大結界。第五日更用牛糞塗地。以手旋磨。第六日拚繩點位。壇四角豎竿。以呪索繞繫。懸幡莊嚴。西門外穿作火爐。請聖衆。喚弟子與護身。泮香水。令向東列坐。投華。又嚼楊枝投之。以下吉凶。供養聖衆。供養竟出外。阿闍梨自布置諸尊於內院。第七日敷置外院。即十一面觀音大曼茶羅也。然後阿闍梨行護身。遠壇地結界。以水罐十三口。安各院四角及中心。四方八門各置香爐。諸尊前

各著飲食燈盞。乃喚弟子與護身。香水洗手。以帛裹其眼。阿闍梨引之入壇。令散華。告其華所著尊名。於西門外灌頂壇。乃與灌頂。教以華所著尊印。燒火供養聖衆。又到西門禮謝。而後發遣聖衆。執炬火。示弟子以諸尊位。然後以泥塗却壇上。莫見日出。可謂其事相摩胎藏大法之壘矣。稱密教爰完成。殆似無不可焉。根本陀羅尼之外。有二十八呪五十印。其屬呪師所作者。有三味華座。護身搯珠。君馳。散華。禮拜等。其屬于聖尊者。有身。大心。小心。髮長。隨心。策杖。甘露。勝著。鹿皮。施波羅蜜。輪華。鬘。稍。鉤。繩。索。螺。光。篋。十一面。頭。載。觀音母。寶杖。君馳。蓮華。金剛。拳。數。珠。彌。陀。佛。眼。地。天。等。附于印呪。說四肘壇。中心安十一面觀音。東安彌陀。北安勢至。南安馬頭觀音。西安摩醯首羅天。莊嚴供養。猶上來諸壇。與於婦人欲得兒者。以灌頂。又有火爐。水壇。一肘圓水壇等。以廣說諸成就法。十一面像各面相貌。同宇文周譯經。千轉觀音法。加智通譯。以二呪及受持壇法。次觀音母法。有身心二呪。觀音母者。即白衣觀音。以是爲觀音部諸尊之母也。是爲觀音母白衣之初出。隨心觀音法。如不過智通譯經之異本。而其鈔出極略者。千轉隨心二法。尙止於印呪法。遂不至以成尊法。但於先佛頂十一面二曼茶羅中。列爲一尊而已。次有十二臂觀音印呪。觀音不空。繩索印呪。及畫一切觀音像法。不空。繩索尙是印呪之名。而未至爲別尊。然先十一

面曼荼羅中。既有不空罽索尊。所謂十二臂觀音。蓋亦不空罽索也。其畫一切觀音像法。觀音坐華座。左右各有一使者菩薩。侍者後左右各有三菩薩。光上左右各有二須陀會天。一奏音樂。一散華香。又畫頻伽。鸚鵡。孔雀。白鶴各二。座下左右又有二菩薩。像兩邊有菩提樹。畫凌霄華。次說毘俱知觀音法。是爲此觀音初出。梵言毘俱知。具云毘嚩俱知。鬘眉額皺之義也。此菩薩元從觀音額皺生。是蓋出於暗毘迦忿怒額皺中生。迦理之話說。亦爲變化觀音之一。其法有二十一印。四十四呪。其屬于呪師作法者。有香爐。香水護身。地界。四方界。上方界。師子座。歡喜。供養。施食。華供。養滅罪。萬里結界。泥壇。供養。摺珠。捻灰。發遣等。毘俱知降魔印。呪中有甲弩。射箭。輪杵。三眼等。蓋亦出於突迦之器仗。又有使者印。呪。次說七日作法救病法壇及畫像法。先畫釋迦佛。左畫金剛。右畫觀音。觀音左手下畫天女形。次畫呪師。胡跪執香爐。其餘又說諸成就法。馬頭觀音法。亦以此經爲初出。說八印。十六呪。中有口。牙。二法。其像取瓦瓶染作青色。於其瓶上畫馬頭觀音。立在寶蓮華上。又一法。頂上面作碧馬頭。左脾及膀上著虎皮。其受法壇。中心安馬頭觀音。東門安十一面。北門安八臂觀音。南門作八大龍王。馬頭梵言何耶揭哩婆。乃突迦天神之一異名。此變化觀音。蓋亦出於溼縛之鉢乞底。佛頂壇及十一面壇。列位諸尊中。有一璣三跋底。

迦觀音者。其名卽所願成就之義。而集經之外。不見此觀音復出。蓋其信仰未興而止耳。文殊法。一印。一呪。其畫像法。先作文殊。坐華座。左畫觀音。右畫普賢。空中畫首陀會天。手執華鬘。文殊像下畫持呪者。右膝著地。手執香爐。其下畫池水。菩薩兩邊畫山峰。又說安文殊像於佛塔東面。向西。像前以瞿摩夷塗地。及燒火誦呪。比于前出種種雜呪。唯說六字呪。文殊六字法事相之發達。見極顯著。彌勒菩薩法。前出下生。上生二經。共非密經。其餘八名普密經。僅出一呪。至茲乃有二印。一呪。地藏法。以是經爲初出。而同有二印。一呪。見顯教菩薩次第皆入密教。普賢法。有一印。四呪。且說壇場莊嚴供養。向東誦呪。比于梁譯普賢陀羅尼經。見作法備虛空藏法。有一印。二呪。雖說不忘之功力。作法竟不及。隋譯善巧呪經。蓋或其鈔譯歟。是偶於密教發達史上。似以異例。可見者。然而概之。顯教中菩薩之入密教者。其法多不發達。獨有大日如來爲兩部大法本尊耳。於是寧取於外道。以新所建立。變化觀音。金剛明王及天部諸尊。却遂至占密教要部也。惟夫佛菩薩者。雖其德可仰。其慈可親。則不宜於求世間雜小諸願成就。是以其過於崇貴也。便如變化觀音。金剛天部等。其格位較卑。而其威力可畏者。適能得爲求願之本尊耳。亦可以足察知密教之所由來。及所以其豎立者。果孰在焉。金剛部法之淵原甚古。而其徵又甚多。上來

既屢述之。密迹經金剛力士。觀佛三昧經金剛神。大陀羅尼呪金剛藏菩薩。陀羅尼雜集。金剛軍菩薩。牟梨曼陀羅經十二臂金剛。寶金剛等皆是也。然未曾有居然爲一部主尊者。其後於變化觀音而久不發達。寧可謂奇矣。蓋其將興而未興者。因不得恰好藍本耳。既而及變化觀音取範於鑠乞底頻出。始覺溼縛之性格。相貌主摧破者。最適於退治怨家。苦敵降伏煩惱魔障。又證得佛性不壞。於是乃頓致金剛部諸尊鬱然勃興。此經即是也。金剛藏菩薩乃爲其上首。經中先出眷屬十四部名。蘇摩訶蘇囉私地迦囉蘇婆呼迦尼矩噓駄。阿蜜哩多軍荼利。烏葛沙摩。吒訶婆摩。摩鷄噓。多木企。商迦羅。悉俱尸。母瑟低。施迦羅。尼藍婆羅達囉卽是。要之。皆金剛藏變化身也。其名冠以跋折囉。此中數尊。既列于先佛頂壇及十一面壇。後又入胎藏金剛部院。蘇摩訶。蓋出於溼縛一名蘇摩訶蘇婆那。蘇婆呼者。訖栗瑟擊及持國天之子有其名。藥叉及羅刹。亦有名。蘇婆呼者。溼縛一名云摩訶矩噓駄。迦尼矩噓駄金剛。或出於是。歟。阿蜜哩多與軍荼利。竝亦爲溼縛之一名。今乃連二名。爲一金剛之名。商迦羅者。爲溼縛諸名中最著者之一。縛折羅母瑟低者。溼縛眷屬中有其名。尼藍婆羅者。青衣之義。羅刹有其名。又爲婆羅摩之一名。何諸金剛之名。與外道諸神相似之甚哉。殊見取於溼縛者尤居多。乃其所本可知也。軍荼利。烏

葛沙摩二尊。後來發達。爲所謂明王。但方此經述作之時。未有明王者。尙且稱菩薩。經中金剛藏菩薩言曰。我今上佛難思議深祕密法藏。可貴教法。蓋祕密之思想。主於是部醜醜焉。金剛藏法。先說畫像法。菩薩坐華座上。左右各有一侍者菩薩。金剛藏左近。髀側有一菩薩。左右廂各有四菩薩。皆坐而作威儀。助金剛藏降伏一切。上方兩邊。畫須陀會天以華鬘供養。兩側有貝多樹及山形等。座下作寶池。又有一小童子。持華鬘來助供養。像法之外。有十呪十八印。又說水壇火壇。成就法中。說以灰點于七處。是卽溼縛派之風。所以大自在天。外道一呼塗灰外道。其點法有種種。所謂底擺迦是也。金剛部諸尊。出於溼縛派之徵。豈只其名而已哉。金剛藏眷屬諸法中。摩麼難法。一名金剛母法。是以摩麼難爲金剛部母也。金剛部母者。於是始有焉。胎藏法乃依之。母瑟低法。一名金剛兒法。亦說水壇火壇。商迦羅法。一名金剛藏大女法。蓋以商迦羅爲女性。然則爲突迦。其受法壇四肘。中心安商迦羅像。或於地上畫亦得。或作印請喚商迦羅亦得。東方畫金剛杵形。北方畫鐵鎖形。南方畫可吒誘伽印形。是卽三摩耶曼荼羅之濫觴也。西方安呪師座。壇上置燈盞水罐。供養飲食。西門南安火壇。燒火誦呪。又壇西作水壇。令坐受法人。以與灌頂。次有央俱施法。一名金剛藏小女法。又有金剛隨心法。及金剛藏受法壇法。其壇法。概似商

迦羅法。次阿耨哩多軍荼利諸成就法中。以結界爲首。其作法印呪。卽香爐香水護身辟除毘那夜迦降魔結地界結四方界結虛空界是也。凡作道場法壇。乃皆用之。卽爲結界之通法。擇地治地。豎柱。布置尊位。將燈入壇。安置供養資具。請喚諸尊。各一遍行之。是香爐香水二印呪。爲胎藏法五供養中燒香塗香印明護身印呪。爲後所謂被甲護身印明。兩部及十八道法。皆共用之。結地界結四方界結虛空界三印呪。亦皆行於純密法中。受法壇。先畫軍荼利像。左下畫一鬼王。塗壇向東誦呪燒火灌頂。如前說諸法。又說救病壇。成就法中。有遠怨家法。泥作人形以呪之。可謂調伏法之濫觴。次有大笑金剛諸成就法。烏樞沙摩法。又說畫像法。其像青色四臂。兩臂各有二龍王纏絡。頭上左畫阿闍佛。右畫阿彌陀。其上畫諸天散華。像下海中有蓮華。華上著金剛。海中畫八阿修羅王。左右禮拜。右下邊畫呪師。手執香爐。胡跪供養。其壇法。中心安烏樞沙摩像。東門安施可囉。南門安彌嚕室嚩伽。北門安漢陀釋吉智。西門安杜地。西門外置呪師座。四角安四天。又說火頭金剛降魔器仗。次青面金剛法中。說畫五藥又像法。先畫一藥。又脚下各有一鬼。兩邊各畫一青衣童子。左右又各畫二藥。又卽金剛藥。又也。次戴天部諸法。其中摩利支天法。增備殆十倍於梁譯經。始有隱形印。又始說作像受法壇。水壇毘那夜迦壇燒火法等。其

成就法甚繁多。像似天女形。左手把天扇。扇面有卍字。扇上作餘光。右手垂下。左右各有一侍者。亦作天女形。其受法壇。中心座上安摩利支天。三方安三使者。東婆多羅室唎夜。南摩彌北計室彌是。西門置呪師座。莊嚴灌頂燒火等。畧如餘法。毘那夜迦壇法。以泥作一百鬼像。鬼王毘那夜迦。作白象頭。其餘諸鬼。各別作諸禽獸形。手足則如人。置之於壇中心及四面。一種奇法。不聞復行于後世。功德天卽吉祥天也。雖其像入佛教最古。而其名出于金光明經。未有功德天法者。其有之。此經爲初出。有三呪十二印。其畫像法。天身端正。其左邊畫梵天。右邊畫帝釋天。背後各畫一七寶金山。天女像上作五色雲。雲上安六牙白象。鼻絞馬腦瓶。傾出種種寶物。灌於功德天頂上。像背畫百寶華林。頭上畫千葉寶蓋。上作諸天伎樂散華供養。像下右邊畫呪師形。手把香爐。胡跪供養。此像法中。白象灌寶物於女天者。卽本於先乳海涌出話說明矣。但見其恒河水變爲寶物耳。水壇法。燒火法。略似前出諸法。諸成就法中。有令怨家病法。畫作怨人形像。呪之。斯種惡法。亦見漸入密教。後竟致有調伏法。乃效西子之擷者耳。其餘有梵天帝釋天。摩醯首羅天。四天王。日天。月天。星宿天。地天。火天。閻羅王。龍王。那羅延天。乾闥婆。緊那羅。摩呼囉伽。孔雀王。師子王。伽嚕茶。辯天。跋摩天。水天。風天。阿修羅王。遮文茶。毘那夜迦藥。又羅刹諸法。多止說。

印呪。無事相可見者。日月火風四天。竝出于吠陀。日天者。神母阿邇底所生。十二阿邇底也之一。而以太陽擬人者。先於帝釋天。最古爲阿黎耶人所崇拜。車駕七赤馬。乘之以行。天云。後世。西南方守護神。其像赤色黃衣。手執紅蓮。或作三眼四臂。月天者。初出於蘇摩酒之擬人。後爲太陰之神。至補羅拏。則爲東北方。護世天。其像白色白衣。車駕十白馬。或乘白驢羊。以旛爲標幟。火天者。即火之擬人。吠陀諸天中。於民家尊崇最重。與帝釋天。日天。爲太古之三尊。而火天居其首。故讚誦吠陀中。次帝釋天。頌歌最多。以天界虛空地。上三火爲體。其妃與三子。四十五孫。合表四十九火云。護摩者。元爲以所燃火擬火天。當體而崇拜之。又燒酪酥。供養其臭。以祭之。而與。故謂火天有七舌。而能食酪酥。後降爲東南護世天。其像赤色紫衣。三脚七臂。火從其口出。以青羊爲乘御。風天者。即風之擬人。後爲西北護世天。其像作白色青衣。車駕紫馬。或乘白驢羊。其馬時或百。或千。蓋謂風烈也。乾闥婆者。其數甚衆。呪術吠陀。爲有六千三百三十三人。住于虛空。而掌諸神所欲蘇摩。所餐藥餌。又正星座。在帝釋之天。則奏歌舞音樂云。緊那羅者。人身馬首之神物。住于俱毘羅之國。爲其歌者伶人。摩呼囉伽者。即大蛇也。伽嚕茶者。半人半鷲。白面赤翼。金身之怪鳥。而常食蛇。訖栗瑟拏。嘗訪帝釋天。奪其園中所植波利質多樹。乃乘此鳥而遁去。

故一稱毘紐羅多。阿修羅者。非神之義。其族頗滋。時有修苦行而得大勢力者。令諸神陷困阨。還每爲其所退治。神界有鬪戰者。皆爲之也。羅刹者。依羅摩衍。其形不一。其貌其衣。或美或醜。或惡相可畏。或唯隻眼扁耳。有象首者。有馬首者。有蛇首者。其體或瘦或肥。或如侏儒。或甚長身。或其臂極修。有雙脚如常。有三脚四脚者。蓋印度原住諸種蠻民。而古昔爲阿黎耶人所征服者之謂也。遮文茶者。突迦伐旃陀。文茶二阿修羅時。從其額上所化生。手執劍與索。以屍爲鬘。身著象皮。血眼張口。叫喚奮迅。忽斬旃陀。文茶之首。致之於突迦。突迦乃取二阿修羅之名。以命之云。皆是外道所談神物。雖有多少變化。今見竝入密教焉。摩醯首羅天。求馬古名字法。以泥作天像。安中央。又作閻夜毘闍夜。阿自多。阿波羅。自多。四泥像。安四邊。皆如天像。取頭髮爪甲。於爐中燒之。如此護摩。用人間身分。固是外道之法耳。閻夜毘闍夜。突共。突迦之異名。阿自多。阿波羅。自多。竝爲溼縛之一名。四天王。此經始有像法。天衣殿飾。各執器仗。其持誦向北爲異。龍王法中。說祈雨壇。其壇泥龍。粗同大雲經請雨品。但中心安一首龍王。五龍王前。各置瓦瓶。瓶上各畫四箇須菩提。是爲異。又說轉大雲經孔雀王經。大雲輪經。可知此經原本述作。正在是等三經之後。水天像法。似天女形。而有三眼。兩手棒。如意寶珠。毘那夜迦像。刻作夫婦二身。令相抱立。竝作。

象頭灌以煖油。用酒及歡喜團蘿蔔根而供養。竝此經始所出。以上諸尊法。何遽致如此繁多也。其發達隆興之勢。亦爲可以驚焉。而察其諸尊性質。或有純然屬佛教者。或有從婆羅門教鑠乞底派而來者。或有出於其溼縛派者。於是乎部族自分矣。其屬於佛教者爲佛部。從鑠乞底而來者爲觀音部。後又稱蓮華部。蓋出於突迦一名云鉢頭摩藍遮那。及鉢頭暮瑟捉灑。其出於溼縛派者爲金剛部。此名蓋本于溼縛摧破之性格。而觀音金剛以外諸菩薩。此經乃別爲一部。然以其所由來考之。則應攝于佛部也。無論矣。諸天部者。不特屬于婆羅門教中某派。當時所有諸派。乃至俗間通途所禮拜小神。所謂天龍八部之屬耳。後胎藏法呼之云外金剛部。夫諸尊之分部族已如斯。各部又有自爲其上首者。於是後所謂部主者生焉。此經雖未立部主之名。於佛部則光聚釋迦佛頂。於觀音部則十一面。於金剛部則金剛藏是。而各部又有部母者。蓋仿婆羅門教諸派主神。皆有鑠乞底而立之歟。般若之於佛部。白衣之於觀音部。摩麼難之於金剛部。即是。而諸天部獨無主母者。其衆類不至成一族故闕之耳。先所說佛頂壇者。即佛部都會。十一面壇者。即觀音部都會。竝爲一部大曼荼羅。但金剛部者。其所由來。比于觀音部不舊。諸尊分化之數。尙未周備。纔依持物。強立尊名。以是金剛藏受法壇。則未足稱一部大曼荼羅。先有牟

梨曼陀羅經畫像。爲是部吐氣而已。方佛頂若十一面爲道場主。而造壇東方爲上。列佛部諸尊。其右即北方列觀音部諸尊。左即南方列金剛部諸尊者。其意乃在以佛部爲最尊。觀音部次之。而置金剛部於劣位。蓋是因印度之俗。以東爲前。以右爲尊。又東向而治。故以東爲初方。南爲右方。西爲後方。北爲勝方也。以是後來胎藏法尊位之布列。則亦從之。今按其次第。亦如有自示婆羅門教諸神入密教之先後輕重者。蓋其初鑠乞底先入密教。溼縛派次之。毘紐派遂不入而止焉。想是於隋唐之際。諸派派勢之所致耳。此經所說諸畫像。皆令巧畫師。受戒持齋而作之。隨其所索。乃與之。不得還價。所以密教美術能致崇高偉大也。此經又說了四部諸尊法之後。更說諸部大都會道場法壇。謂十一面觀音在佛說法會座。而說此祕密法藏。從前諸法。其意皆在爲成就所願。授其所應持印呪。要之。悉是一種厭勝法而已。然此法獨以度脫一切衆生。令速得成佛。專爲其功德。故此大法灌頂者。即證成作佛之大儀式也。是佛徒所願之最大最高者。惟呪法之意。次第向上。以達于茲。乃却見其循環。與最初陀羅尼門悲分陀利等經所說灌頂。寧一其授。但其所異。在該以事密而已。胎藏大法之意。不復過之。於是密教始得具足爲無上正真道之本義。可謂於其教法發達。劃一大鴻溝矣。其結界造壇。上下莊嚴。灌頂燒火。請諸尊衆供

養發遣行道破壇七日行事等。比諸先觀音一部都會壇。廣說更極詳悉。又載其莊嚴供養具支料度法。而建此普集會壇。若爲帝王。則爲方百二十肘。受法壇。或作十二肘。或作十六肘。布列尊位。前者則九十六座。三重四角地印之外。皆唯畫蓮華座。後者。廣之則二百九座。略則百三十九座。蓮華座上各畫其印及器仗。即三摩耶曼荼羅也。壇五重院。唯開西門。諸部列序。則中央佛部。右觀音部。左金剛部。外院諸天部。竝概如前來諸法。亦爲胎藏曼荼羅。成其藍本焉。然而此曼荼羅列位諸尊中。觀音部有盤陀羅婆母九臂摩訶稅多。阿梨多梨四臂等諸觀音。除其盤陀羅婆悉尼摩訶稅多二尊入胎曼。其餘多不行于後世。如九臂四臂。蓋不空羼索之變像耳。金剛部有懼嘻耶金剛。懼嘻耶。在外典。則爲毘紐之一名。其女性名乃爲突迦之一相。外院所列毘陀耶陀羅。乃胎藏外部持明衆。元爲溼縛眷屬。住于雪山。伊溼伐羅伊沙那。共爲溼縛之一名。地印枳喇枳喇亦然。但全經所說缺觀想之法。又此普集會壇內院中心座上。所安道場主。則或釋迦佛頂。或爾餘諸佛。或般若。或十一面觀音等菩薩。隨造壇施主所樂。而未必一定焉。可謂密教完成之功。九似猶缺一實矣。安然以此經爲雜密之最備者。其見洵妥當。然執著於其原名云。金剛大道場。以爲屬于金剛界法。是不解其教法系統。在胎藏發達之流脈也。阿地瞿多付法。

大乘琮玄措等之後。此經法傳統不明。後有國清寺惟象。明州開元寺靈光。及鄞縣檀那行者某。傳我邦最澄。以其大佛頂軍荼利普集會三壇法。評して曰はく。陀羅尼集經全部に通じて。大綱を提げ要領を示すは盡せり。陀羅尼集經を讀まん人。此段の志に依つて。之れを讀まば差はざるに庶幾らん。然れども亦瑕疵なきには非ざるなり。

以法擬人

乃亦擬人法。而始出于經。由來佛教諸菩薩。大抵以法擬人而建立焉。文殊之於智。普賢之於行。觀自在之於救濟。皆是。至如虛空藏除蓋障等。則直可得依其名而知其本。大集寶積般若等所出諸菩薩。亦咸無不然。固非如龍樹提婆馬鳴無著世親等實有其人也。

評して曰はく。未だ密教の人法一致の眞理を解せざる故に。文殊觀音等を以て斷じて擬人と爲す。皆是れ遮那隨機應現の等流法身なり。何ぞ一概に擬人と云はん耶。若し佛在世に出現する。觀音文殊等を以て擬人と爲さば。釋迦眷屬五百執金剛神も

擬人歟。梵釋龍神も亦擬人歟。豈夫れ然らん耶。

縛折羅之名

何諸金剛之名。與外道諸神相似之甚哉。

評して曰はく、相似の甚しきは、大に理由あり、何となれば彼の外道の諸神を會し取つて、以て密教の諸金剛神と爲すは、彼の外道を誘引して、此の正道に攝入するの方便なり、是れ密教の特色にあらずや。

惡法入密教

斯種惡法。亦見漸入密教。後竟致有調伏法。

評して曰はく、彼れに、既に、對治怨家等の種々の惡法あり。此の密教に於て、理として無かる可らず。大日經住心品に、乃至說生摩厭羅伽法と説く、以て知るべし。然るに、外道は、私憤嗔恚を以て、之れを行ず、眞言行者は、大悲方便を以て、之れを行ず、教觀俱に雲泥の差あり。

本尊不定

又此普集會壇內院中心座上所安道場主。則或釋迦佛頂。或爾餘諸佛。或般若。或十一面觀音等菩薩。隨造壇施主所樂。而未必一定焉。可謂密教完成之功。九似猶缺一實矣。評して曰はく、內院の中心の座上に安ずる所の壇主は、施主の意樂に隨ふは、兩部曼荼羅亦然なり。兩部大經の教主は、唯毗盧遮那法身と雖も、曼荼羅主は、其の所修の法の本尊を以て主と爲す。故に、曼荼羅に對して、觀音供を修する時は、中臺遮那を轉じて觀音の座處に移し、觀音を以て中胎に安じ、或は、大日をして、東方寶幢佛の座處に合せ置く。是れ即ち十界輪圓の眞髓を顯すものなり。何ぞ九似猶缺一實と云はん耶。但し觀想の法を缺くは、遙かに兩部大經に及ばざる所なり。

雜密屬胎藏系統

安然以此經爲雜密之最備者。其見洵妥當。然執着於其原名云、金剛大道場。以爲屬于金剛界法。是不解其教法系統。在胎藏發達之流脈也。

評して曰はく、陀羅尼集經を熟讀するに、法相兩部に通じて、其の部屬を判ずる甚だ以て難しとす。若し經中所列の菩薩天等の名相、並に色法の次第に依らば、志主の説の如く、甚だ胎藏に近し。然るに、此の經を判じて、金剛界と爲すは、安然の獨斷に非ず。即ち傳教大師、國清寺惟象に従つて、相承する雜曼荼羅の傳なり。又經中の諸眞言初後に、唵、莎、縛訶を安ずる最も多し、是一。第二佛心印呪。第三に金剛拳を説きて以て拳とす、是二。第十一功德天法の末に、金剛界阿閼等の四佛を説く、是三。是の故に、金剛界に屬すと云ふ、謂れなきにあらず。傳教大師著灌頂七日行事鈔の啓白を見るべし。

無行傳大日經

無行亦荊州江陵人。梵名般若提婆。少而聰學。弱冠博通九經百氏。既而就大福田寺慧英法師出家。後遍訪名匠。九江三越衡岳金陵嵩華少室。無不飛錫。與王玄策姪智弘同契。欲遊西天。至交州。住一夏。冬末附舶。南至佛逝。受國王厚禮。乘王船。經十五日。達末羅瑜洲。又十五日到羯荼國。冬末轉舶西行。經三十日至那伽鉢亶那。從此泛海二日。到師

子洲。觀禮佛牙。復向東北航海。經一月到訶利雞羅國。距那爛陀百驛。即東天竺東界也。停住一年。漸之東印度。恒與智弘相隨。既而入大覺寺。蒙國安置。後至那爛陀寺。聽瑜伽習中觀。研味俱舍。探求律典。復往祇羅茶寺。義淨嘗與無行共遊鷲嶺。有詩云。龍宮祕典海中探。石室眞言山處仰。蓋指無行。義淨之辭。那爛陀也。無行送別東行六驛。時垂拱元年。無行年五十六。後欲還故國。至北天竺。不幸而卒。所將梵本。有勅迎還。在西京華嚴寺收掌。開元十三年。善無畏所譯大毘盧遮那成佛神變加持經。即其一也。是爲胎藏大法之本經。無行嘗從天竺寄書於唐。曰。近者新有眞言教法。舉國崇仰。我圓仁寫是書而將來。故其入唐新求聖教目錄中。載南荊州沙門無行在天竺國。致於唐國。書一卷。惜此書佚。似不傳于今。然安然曾一見而引諸其教時義。然而所以撰述密教發達志之初念。實亦發其端於見無行一語矣。應知。呪法漸發達。先成三部都會曼荼羅灌頂法。遂出胎藏大法。以完成眞言密教。其正在初唐之際。恐不上於永徽顯慶已前矣。無行在垂拱前後。而云近者新有。若貞觀中既有之。則胡爲玄奘如毫不聞知。而西域記等無一言及之乎。阿地瞿多以永徽三年來。而未傳胎藏。是固然。但雖大日經既成。無行無畏之外。終無傳其法者。由是考之。蓋未廣行于印度。以故阿彌眞那菩提流志實又難陀等。所將來翻譯

之諸經。皆如未知有胎藏法而作之者。乃相前後而成耳。無畏於那爛陀傳此法。無行得此經。亦恐在那爛陀胎藏法教成于那爛陀寺明矣。評して曰はく、無行寄唐の書に、近者新有真言教法。舉國崇敬と云ふは、從來、印度に密教なきに非ずと雖も、機縁未熟を以て、傳法の閹梨之れを胸襟に秘して、猥りに授法せざる故に、世上多く之れを知らず。然るに時機熟して盛に邦家に行はれ、上下崇敬を爲す故に、密教の面目、從來の如くに非ず、日々に新なるを以て新有と云ふ歟。既に竺律炎より以降、漸次に雜部の密教、支那に入り來れり。之れを以て印度を觀ずるに、無行以前に於て、既に已に印度に密教あるは、其の理瞭然たり。無行豈之れを知らざらん耶。是を以て、新有真言と云ふは、從來、印度に密教あるに非ず、無行渡天の近時に於て、真言密教なるもの新に生ずと云ふ意には非ざるべし。若貞觀中既有之則胡爲玄奘如毫不知、而西域記等無一言及之乎と云ふと雖も、西域記慈恩傳等に於て一言せざるものは、概して印度絶無と斷ずるを得ん耶。自己の屈執に拘泥して、早計すること勿れ。又志主の引證する所の無行寄唐の書に、舉國崇仰と云ふ、是れ盛に、印度に行はるゝこと明瞭なり。然るに無行、無畏之外、終無傳其法者。

由是考之。蓋未廣行于印度と云ふは如何。新有真言教法。即陀羅尼集經等雜部密教とは、志主の憶説、誰か之れを信ぜん。達磨掬多、無畏三藏、印度に於て、灌頂の輪壇を建設し給ふは、舉國崇仰の言に徴して明らかなり。但し、興福寺の玄昉僧正が、無畏の大日經疏を請來するが如く、無行、唯大日經の梵本を請來するのみにして、灌頂受法には非ざるべし。何となれば、志主の引證する所の求法高僧傳に、後至那爛陀寺、聽瑜伽習中觀、研味俱舍、探求律典と云ふと雖も、密教傳授を記せざる故に、無行得此經、亦恐在那爛陀と云ふは憶説なり、誰か之れを信ぜん。

密教矯救邪弊

如是外道苦行。其愚固不可及。其弊豈勝言哉。密教之要。蓋在矯其弊。救其愚矣。(中略)由來密教所行諸作法。與所禮諸神物。多皆出於外道。如既屢所說。若夫所標幟之意義。非以佛教釋之。則內證亦遂非佛教。何有所簡於外道乎。所以其爲正法。又爲佛教。唯在其三摩耶如何而已。評して曰はく、能く真言教の意を得たりと稱すべし。

毘盧遮那爲曼荼羅主

既以毘盧遮那爲曼荼羅主。出世解脫曼荼羅最上方畫。毘盧遮那。又經中有毘盧遮那如來法身大悲生藏曼荼羅之名。酷與大悲胎藏生曼荼羅似。思方此經之成。以華嚴梵網般若理趣分等所說毘盧遮那佛爲法身之極致。自擬諸佛部最上首。延以至爲通三部及都部曼荼羅之主。則胎金兩部大曼荼羅之出。蓋亦如實原本于此者。較諸集經普集會曼荼羅無定主。非無百尺竿頭進一步之觀也。

評して曰はく、毗盧遮那を以て、曼荼羅主と爲すと、無定主と、前述の如く敢て相違に非ず。遮那を主と爲すは、十界の中に於て、且らく佛界の曼荼羅を示す。定主なきは、十界に悉く曼荼羅ある義を示す。故に、此の二者意自ら融會す。然るを永く二別を認むるは、密教の教理に疎なる所以なり。

使呪法經

使呪法經以下、竝爲可疑、九日天法殊然、蓋僞撰耳。

評して曰はく、真言經を以て、悉く人師の作經と爲さば、佛説の經に對して、皆僞經なるべし。然るに爲可疑と云ひ、蓋疑撰耳と云ふ、其の意如何。僞中に更に眞疑ある乎。

流志譯南天密經特色

後金剛智從南天來。而傳金剛頂宗。其觀法之精。頗勝於大日經宗。

評して曰はく、兩部の三密行併ら阿字本不生の教相を出でざる故に、優劣あることなし。然るに其觀法之精。勝於大日經宗と云ふは如何。密教の教觀は、大日經に依らざる可らず、何を勝劣を云はん。又其の勝劣の相如何。

金剛頂自是成南天密教精髓者。而與胎藏法之成于中天。其根基全殊而不一焉。

評して曰はく、兩部曼荼羅の法體は、生佛平等の眞淨の菩提心なる故に、不二無差別と雖も、隨緣の日の前には、根基同じからず、金剛界は、正しく迂迴の機に對するを本と爲す、五相成身觀以て知るべし。胎藏法は、正しく直往の機を攝するを以て旨とす、五輪成身觀以て知るべし。志主、全殊不一と云ふ意如何。悉く要を提げて之れ

を誨示せよ、聽かんと欲す。

第三篇 盛 唐

善無畏譯經傳法

至盛唐之世。斯教始完成。兩部純密。一時備足矣。善無畏從中天至。經北路而傳大日經法。金剛智自南印來。泛南海以資金剛頂宗。曼荼羅與觀行。粲然可觀焉。善無畏梵名戍婆揭羅僧訶。善無畏者其義翻也。刹帝利種。爲釋尊季父甘露飯王之後。其先在中天竺摩揭陀國。因國難去。王子烏荼。父云佛手王。無畏生有神姿。十歲統戎。十三嗣位。得軍民之情。諸兄嫉其能。舉兵構亂。無畏伐之。流矢及身。掉輪傷頂。諸兄暴狀。固不可容。然無畏忍而曲赦。拭淚告母及群臣。遂分與傳國寶珠於兄。自避位而入道。南至海濱。得殊勝招提。修法華三昧。聚沙爲塔一萬。又寄身商船。往遊諸國。密修禪誦。口放白光。無風三日。舟行萬里。會商人遇盜。身命殆危。無畏恤之。默諷真言。七俱胝尊。全現身相。群盜果爲他寇所殲。寇乃歸依。指蹤夷險。尋越窮荒。又度毒水。至中天竺。無畏乃謁其王。王夫人者無畏之女兒。因語以捨位之由。無畏風儀爽俊。聰叡超群。該究五乘。道解三學。總持禪觀。妙達

其源。藝術伎能。亦悉精練。是以名震五天。詣那爛陀寺。捨所齎傳國寶珠。瑩之于大像之額。寺有達摩掬多者。掌定門祕鑰。佩如來密印。玄奘曾見之。云無畏乃投身接足。奉爲本師焉。一日侍食之次。旁有一僧。震旦人也。無畏見其鉢中油餌。粟飯尙溫。愕而歎曰。東國去此十萬餘里。是朝熟而返也。掬多曰。汝能不言。真可學焉。後乃授以總持尊教也。龍神圍遶。森在目前。無量印契。一時頓受。即日灌頂。爲人天師。稱曰三藏。既而徧禮聖迹。不憚艱險。入雞足山。爲迦葉剃髮。受觀音摩頂。嘗結夏於靈鷲。猛獸前導。深入山洞。洞明如晝。中見牟尼像。左右侍者如生。時中印度大旱。請無畏求雨。俄見觀音在日輪中。手執軍持。注水於地。衆欣欣歎未曾有。無畏又鍛金如貝葉。寫大般若經。鎔銀爲窣覩波。等佛身相。以無畏遊方日久。母謂其已沒。且夕泣淚竟喪明。洎無畏附信問安。朗然復如故。云五天之境。外道極盛。無畏隨其所執。皆破析之。掬多曰。汝有緣于震旦。今可行矣。無畏乃辭而上途。至迦濕彌羅國。夜次過河。河無舟梁。乃浮空以濟。一日應於長者請。俄有羅漢降曰。我小乘之人。大德是登地菩薩。乃讓席推尊。無畏施以衣。昇空而去。無畏又至烏菴國。有白鼠馴逸。日獻金錢。進至突厥。講毘盧於可汗之庭。可敦請法。乃安禪樹下。法爲金字。列在空中。時突厥宮人。以手按乳。乳爲三道。飛注無畏之口。無畏乃合掌端容曰。我生前之母

也。又途中遭寇。舉刃三斫。而肢體無傷。揮劍者唯聞銅聲而已。登雪山。至大池。而病。掬多自空而至。慰問。乃愈。路出吐蕃。與商旅同次。胡人貪貨。率衆合圍。無畏密運心印。蕃豪乃請罪。漸至大唐西境。夜有神人曰。此東非弟子界。文殊師利實護神州。禮足而滅。猶迦毘羅神送連眉也。以駝負經。至西州。而渡河。龍陷駝足。沒于泉下。無畏亦入泉。止住龍宮三日。宣揚法化。及牽駝出岸。經無沾濕焉。初無畏過北印度境。而聲譽既達于唐。睿宗乃詔西僧若那。及將軍史獻。出玉門塞。以候來儀。開元四年。至于長安。勅安置于興福寺南塔院。初玄宗夢與真僧相見。姿狀非常。及無畏至。夢果符矣。帝悅有緣。禮爲國師。令住西明寺。問勞重疊。錫貺甚渥。飾內道場。尊爲大毘盧遮那曼荼羅灌頂大阿闍梨。寧王薛王已下。皆跪席捧器焉。實大士於天宮。接梵筵於帝座。巍巍法門。於斯爲盛。實支那胎藏大法灌頂之權輿也。時有術士。握鬼神之契。參變化之功。承詔御前。角其神異。無畏恬然不動。而術者手足無所施焉。五年奉詔譯經於西明寺菩提院。出虛空藏菩薩能滿諸願最勝心陀羅尼。求聞持法經。沙門悉達度。語無著筆受。繕寫以進。內帝深加賞歎。有勅。無畏所寶梵本。並令進上。無畏乃與沙門一行。覓無行將來經本於華嚴寺。選得數本。並總持妙門。先所未曾譯也。十二日。隨駕入洛。住于福先寺。十三年復奉詔。譯大毘盧遮那成佛神

變加持經於聖善寺。又撰其供養念誦法。沙門寶月譯語。一行筆受。十四年。又出蘇婆呼童子請問經。蘇悉地羯羅經。無畏性愛恬簡。靜慮怡神。時開禪觀。獎勵初學。奉儀形者。蓮華敷於眼界。稟言說者。甘露潤於心田。法侶請謁。實思惟之外。皆行門人之禮焉。一行禪師者。帝王宗重。時賢所歸。定慧之餘。陰陽之妙。有所未決。乃咨稟而後行。無畏嘗於本院。鑄銅爲塔。手成模範。妙出人天。寺衆以庭除深隘。爰方鎖冶。風至火熾。則災延寶坊。無畏笑曰。無苦。自當知也。鼓鑄之日。果大雪蔽空。靈塔出爐。瑞花飄席。衆皆稱歎焉。又屬暑天亢旱。帝遣中官高力士。詔無畏祈雨。無畏曰。今旱數當然也。若苦召龍致雨。必暴。適有所損。不可爲也。帝強之。不獲辭。有司爲陳請雨具。幡幢螺鈸備焉。無畏笑曰。斯不足以致雨。急撤之。乃取鉢盛水。以小刀攪之。梵言數百呪之。須臾有物如龍。其大如指。赤色。矯首瞰水面。復潛于鉢底。無畏且攪且呪。頃之。有白氣自鉢而興。逕上數尺。無畏謂力士曰。亟去。雨至矣。力士馳去。迴顧見白氣疾旋。自講堂而西。若一匹素翻空而上。既而昏霧。大風震電。力士纒及天津橋。風雨隨馬而驟。街中大樹多仆。力士復奏。而其衣盡濡濕矣。帝稽首迎。無畏再三致謝。二十年。求還西域。優詔不許。二十三年十一月七日。右脇果足奄然而化。享齡九十九。僧臘八十。玄宗哀悼。贈鴻臚卿。遣鴻臚丞李峴。與威儀帥定寶律師。監護

喪事。二十八年十月三日。葬於龍門西山。定慧所熏。全身不壞。付法弟子。有實思禪師。明思禪師等。乾元元年。郭子儀奏。塔院爲廣化寺。二禪師刻偈。諸信士營龕。弟子舍于旁。有同孔墓之戀。貞元十一年四月十七日。建碑。俗弟子李華撰其文。至趙宋初。遺形雖稍縮小。黑皮隱隱。骨尙露焉。開寶八年三月。太祖臨幸。開塔瞻敬。果朝早湧。皆就祈請。徵驗隨生。且多檀施。錦繡巾帔覆之。宛如偃息。每年一出龕。置于低榻。香汁浴之。洛中豪右。爭施禪帔。淨巾。澡豆。以資浴事。太宗禳禱。多遣使臣。行加供施。必稱心願云。大中祥符四年三月。真宗亦幸廣化寺。瞻無畏塔。製讀刻石。置之塔所。今據行狀。碑文宋高僧傳及佛祖統記而錄之。然古來密家。多不讀行狀。碑文僧傳。專依開元錄及貞元錄。所載小傳。如空海付法傳。猶然。願以空海不遊于洛陽。未見塔銘。且其所重在金剛頂宗。相承恐不知。無畏詳傳而止。末流但據付法傳。而不廣檢他。漫然因襲。以及于今。故以供養法金字炳現爲。於乾陀羅國金粟王所建塔邊之事。且謂空中有聲。告文殊所造。無畏乃寫得之。是無畏弟子不可思議。供養次第法疏中所記。而我圓仁所傳供養法。則云三藏於烏底那國作之。又崔牧大日經序。乃以大日經梵本。爲出於北天竺小國勃嚕羅城北大山石窟。謂每年七月。衆聖集于此窟。猿猴曬經。偶暴風吹落一夾。樵人得之。以獻于國王。國王寫之以

付于太子。而後終傳諸無畏。無畏乃與諸聖者。簡繁摭要。集爲二千五百頌云。不啻是傳聞之謬。則假以神怪其事耳。行狀碑文等。以無畏講經。金字炳現。爲在突厥可汗之庭。卽尤足信憑焉。無行得此經於那爛陀寺。無畏受是法於同寺達摩掬多。胎藏法經之成于那爛陀。洵不容疑。無畏胡爲至勃嚕羅。而始獲大日經本耶。又有以胎藏曼荼羅爲金粟王塔邊所現之說。然無其出據可信。俗說不足取焉。密以此經與金剛頂經同爲南天鐵塔內相承。是強欲合于其兩部從初一具流傳之見者耳。

評して曰はく、善無畏の密教相承に就いて、新唐書開元錄・貞元錄・靈巖寺圓行請來の大日經の序其説同じからず。志主の評論は正しく新唐書に依つて開元貞元の兩錄及び大日經の序を否定すと雖も、其の理由薄弱にして而も明了ならず。新唐書の説を成立せんと欲せば、他を否定するの理由立證的確ならざる可らず。然るに確證を缺く、何ぞ他説を否定するの力用あらん。志主、我が高祖の高斷を破せんと欲するに急にして、自己の脚下を照顧するの暇なきの爲す所ならん歟。夫れ密教の傳授相承は、唯一人の阿闍梨に限るに非ず。四方に師を尋ね、縁に隨つて以て傳燈受法すべし。是の故に無畏三藏南天に往きては、龍智に隨つて兩部の秘璽を相

承し、又那爛陀寺に來つては、達磨掬多に投じて特に胎藏法を受けたり。一説を固執して概判す可らず。又傳法の聖者、金剛手に從つて大日經を傳ひ誦出するの十萬頌の廣本の一本を以て、未來の機縁を待たんが爲に、彼の石窟に藏ひる歟。是の故に概論す可らず。法身如來の神力加持、傳法の聖者の善巧方便、猥りに凡情を以て測度す可きに非ざるなり。宗叡請來の大毘盧遮那廣大軌の末に、其の脉譜を示して、此法從摩訶毗盧遮那、付屬金剛手、金剛手、次付屬那爛陀寺達磨掬多阿闍梨と云と雖も、何れの處に於て、何の式を以て、金剛手より密教を相承せしや甚だ分明ならず。案ずるに、圓行請來の經序に云はく、近有中天大瑜伽阿闍梨、遠涉山河、尋求秘寶、時王親闍梨有異、欣然傳授此經と。其中天大瑜伽阿闍梨は、若くは達磨掬多に非ざるなき歟。又經の序に有中天竺三藏、厥號善無畏と云ふを以て之れを見れば、前の中天大瑜伽阿闍梨は善無畏に非ざること火を見るが如し。然るに、志主、中天大瑜伽阿闍梨を以て善無畏と云ふは非なり。又志主は、李華の撰する無畏三藏の碑文に依ると雖も、發達志第一に、然檢金剛智及其弟子不空所親筆錄、未曾有見之と論じて、不空の俗弟子趙遷等の説を否定するに准ずれば、今も無畏及び其の弟子一行の親し

く筆録する所を検するに、未だ曾て之れを見ることあらずと破斥すべしと雖も、余は斯の惡論を爲すを好まざる也。又供養次第法の金字炳現に至つては、新唐書に依れば、烏菴にありと雖も、果して是供養法なるか明了ならず。假令供養法と爲すとも俗士傳説なり、依用の限りにあらず。不思議法師は、無畏三藏面授の法資たり。同師疏に云はく、小僧不思議多幸面諸和上、所聞法要隨分抄記と。之れを以て信ずるに足らずと爲さば、又何をか信ぜん。安然の八家秘録菩提心義は、新唐書に依ると雖も、依用するに足らず。志主、其親しきを捨て其疎きを取るは、抑も何の意ぞ耶。

大日經梗概

今舉大日經梗概。其住心品、說三句十緣生句六十心相及種種往心。密教教相以是爲要。具緣品則此經正宗分。廣說胎藏大法。即擇地、警覺地神、治地、塗壇、香水灑淨、白檀塗畫漫茶羅、結護弟子、令弟子嚼齒木、結線繫弟子臂、爲弟子占夢、取水、緋線點位、畫作大悲胎藏生漫茶羅、思惟真言字義、供養聖尊、授印、覆弟子首、引入弟子、投華護摩、令弟子嚙施、作灌頂壇、灌頂、供養弟子、授金篋、明鏡法螺是也。又說大力大護明妃以下諸真言。

息障品、說造壇時除障難之法。真言藏品、說諸尊真言一百十九首。世間成就品、說四種念誦。悉地出現品、說悉地成就相。無所不至真言。三月念誦虛空藏轉明妃、加持藥物降魔。一切智智真言。五輪五字觀等。成就悉地品、說心內悉地相。亦有字觀、轉字輪、漫茶羅行品、說轉阿字成一切字、彩畫漫茶羅諸尊印器仗種子及其灌頂法、密印品、說諸尊一百三十九印明字輪品。說一切字輪攝于三部四處輪、行者住之。秘密漫茶羅品、說自體四輪內外護摩。三種灌頂。五種三昧耶。及秘密漫茶羅以心灌頂之法。其所謂秘密漫茶羅者、最初正等覺如來、觀自在、金剛佛、菩薩母、諸菩薩、施願、金剛、釋迦、師子、除蓋障、地藏、虛空藏、不動、降三世等、即是。謂能解之者、即入一切法教、諸壇得自在。入秘密漫茶羅品。說身分布字十二支句。入秘密漫茶羅位品。說內心自證秘密漫茶羅中臺八葉四佛四菩薩。秘密八印品。說中臺八尊印明。以下從持明、禁戒、至嚙果十七品。或布字。或菩薩戒。或阿字涉入。阿字體性。或外道四十九火。出世十二火。内外及息災、增益等護摩法。或本尊字印形像三種身等。種種雜說。供養念誦法。增益守護清淨行品。說九方便入佛三昧耶。法界生金剛薩埵。金剛甲冑。藍字觀。無堪忍大護印明。供養儀式品。說布字四字觀。道場觀。虛空藏轉明妃。及釋迦文殊種子。不動尊召請方便。入佛三昧耶。闍伽如來座。金剛

薩埵降伏魔無能堪忍不動尊種子五供養印明持誦法則品說支分布字觀法二種灌頂及四種護摩真言事業品說闍伽啓白以下印明加持及行法諸事抑此供養法雖稱翻譯實無畏所撰故其末記云阿闍梨所集可以證焉海雲大日經大教相承傳法次第記亦云總集一部教持念次第共成一卷乃爲胎藏大儀軌可稱儀軌者於是始出則傳法阿闍梨製作而非佛菩薩所說焉

評して曰はく三句十緣生句六十心等を以て密教教相以是爲要と云ふは誤れり。何となれば三句十心三劫十地六無畏十喻等は住心品說相の分齊にして而も教相にあらず。阿字本不生を以て教相と爲すは無畏の高斷誰か異求すべけん。大日經具緣品疏に云はく云阿字門一切諸法本不生故即是真言教相と。說相と教相とを混濫すること勿れ。又具緣品則此經正宗分廣說胎藏大法と云ふは有餘師の住心品を以て大日經の序分となすの說に依る歟。通序は論なし。然るに住心品の加持世界三身說法の段は本經說法の起因なるを以て別序と爲すは掌を指すが如し。住心品は一經の總標綱要分にして而も序文に非ず。文に臨んで解すべし。若し唯具緣品のみを以て正宗分と爲さば大日經は唯修行曼荼羅の事作法のみを説

きて教理教相を説くことなき歟。豈夫れ然らん耶。又唯具緣品のみを以て正宗と爲さば息障品以下は如何。別に囑累品ある故に流通分と云ふ可らず。正しく大日經の序正流通の三分を示さば住心品の如是我聞より芽種生起に至る迄を序分とす。中に於て如是我聞より等句法門に至る迄を通序とし。次に時彼菩薩より芽種生起に至る迄を別序とす。爾時執金剛菩薩以下世出世持誦品に至る迄の二十九品餘を正宗分とし第三十一の囑累品を以て流通分と爲すなり。又儀軌を以て則傳法阿闍梨製作而非佛菩薩所說焉と云ふは恐らくは臆說ならん。若し説の如くならば三卷の教王經に於て廣大儀軌品と題するは如何。是の故に樂論す可らざる也。

南天密教與中天密教

然而瑜伽觀之發達南天爲勝故無畏方作供養法有所取於是耳此餘南天密教不多影響於大日經宗一字佛頂千臂千鉢文殊金剛界十六大菩薩四攝八供及愛染王等之不入胎藏曼荼羅亦足以徵焉反之如白傘蓋佛頂雖係陀羅尼集經已後出現而列

于胎藏曼荼羅。蓋爲白傘蓋呪成於中天耳。

評して曰はく、金剛頂所説の觀門と、大日經所説の觀門との勝劣如何、證誠道理を以て委悉に之れを示せ。然らざれば誰か肯服せん。恐らくは是れ志主の未だ兩部大經に練達せざるより起る憶説にあらざるなき歟。何となれば大日經宗と金剛頂宗と、本有を本として、直往の頓機に對すると、修生を旨として迂回の漸機に對するとの異なきに非ずと雖も、併ら淨菩提心觀を明して毫髮も餘すことなし。淨心觀は、即ち阿字本不生の觀なり。金剛頂宗の五相成身觀、入法界體性觀等、大日經宗の五輪成身觀、九重阿字觀等、皆淨菩提心觀を明すの外なし。是に於て、何等の別を認むべきあらん耶。若し強て優劣を求めば、却つて大日經觀門勝るべし。何となれば、明かに淨菩提心正助の二觀、及び諸觀離著、方便の十喻觀、六大法界三昧觀等を明すが故に。善無畏三藏、供養法の卷に於て、金剛界の觀門を取るは、只管融會不二を示すのみ、敢て彼れ勝れたるが故に非ざるなり。又此餘南天密教、不多影響於大日經宗と云ふは、纔かに千鉢、文殊愛染王等の胎藏曼荼羅に入らざるの一隅を見て、三端を顧みざるの謂歟。何となれば、金剛界の外金剛部の二十天は、即ち胎藏曼荼

羅第三重の外金剛部院に列在せり。金剛界の降三世は、即ち胎藏持明院に列在せり。金剛界の香花燈塗の外、四供の天女使は、即ち胎藏五供養の中の四菩薩なり。金界賢劫の十六尊中の彌勒、除一切障、虛空藏、金剛藏、普賢等亦胎藏曼荼羅に列在せり。斯の如くの諸尊、既に胎藏曼荼羅に入る故に、南天の密教、大日經宗に影響すること最も多なりと云ふべし。纔かに三五の胎藏曼荼羅に入らざる尊を擧げて、亦足以徴と云はん耶。其の實、兩部相互に影響すること頗る多し。無畏の大日經住心品の疏に云はく、心王毗盧遮那、成自然覺時、恒沙數入金剛界と。又同品の十地を釋して、若解金剛頂十六大菩薩生、自當證知也と。以て兩部相互の影響最も多きを知るべし。

惟印度密教源流、素有中天、南天兩派、前者乃爲大日經宗、後者則成金剛頂法。夫南北之殊土、人情亦不同、北方尙質實、南人富空理、東西所一揆、仲尼生于陬邑、老聃出於苦縣、所道各異、至如商鞅、李斯、屈原、宋玉輩、亦可見秦楚相反之甚也、而六朝清談、獨專行于江南、若夫中天密教、以曼荼羅爲勝、南天密教、見長於瑜伽觀、殆亦不逸斯理者歟、胎藏大法之發達、與其過程之脈絡、大凡如上述、自東晉呪經初出、至於初唐、實四百年也。

其間幾多人師。凝思潛慮。研鑽工夫。積聚邁進。遂以致此大成。三國之世。以龍猛一人。一朝豈能出之乎哉。然而至此經。諸成就法似厭勝者。始殆絕迹。唯說即身證成作佛法式。此經又始爲法身毘盧遮那佛所說。所謂純密經。以是爲嚆矢。從前諸經。則皆釋尊若觀音。文殊等菩薩說之。而其受法持誦功德。專在世間諸願成就。故溫古序于大日經義釋曰。持明藏宗分條流傳譯久矣。世之學者。多存有相。罕契中道。其瑜伽行法。隱而未明。蓋非隱而未現。是法未成也。自智通譯千眼千臂。般若理趣分。集經大都會壇法等。說速得成佛以來。其意次第增上。旋歸前所述大乘陀羅尼門得道之願。至于茲。乃全脫卸世間諸願成就。雜小功用。專以即身成佛大菩提願爲教法旨歸。古來我國密家。多謂所以其殊於雜密者。爲在非釋迦劣應所演。而毘盧法身所說。然其毘盧者。元不過於唐代印度作經家之假託。何由是尙之乎。純密之所以尊者。其唯存于成佛之大用。但前來習氣未祛。盡尙非無未醇乎全醇者。如悉地出現品中所說。加持藥物。卽是譬猶新篋帶其殘籜耳。又此經作者。有欲自厚受利養。且令後代傳是法。阿闍梨亦復爾之意。故經中說弟子應懺施金銀衆珍寶。象馬及車乘。牛羊上衣。服等。又隨力辦肴膳。以施僧衆。是與金剛頂宗授弟子金剛名。以欲固其宗徒結束。正同巧異曲之作意也。但其欲重法之意。乃亦可見耳。

今且以所上述熟思考慮之。永徵之初。阿地瞿多東來時。未有此經。上元儀鳳之際。道琳論明呪唯言乘龍役神利生之功。義淨入壇亦少受明呪。可知二師所受法。乃唯在雜密。然則同時無行所謂眞言教法。舉國崇仰者。蓋亦雜密而已。想集經初稿。夙成于北周代。三部曼荼羅。唐初已有焉。爾來嗣後增廣。至永徵顯慶以降。密風急煽。三部及其合成都會壇灌頂。當時盛行。是以事相教相。頓成長足進步。終乃出大日經。垂拱之際。無行早獲其經本。以是推之。大日經述作。應在高宗末年。其說諸尊名相行法諸事。殆似就通途普知之事而語之者。是其述作時。爲三部諸法已廣行于世耳。而撰之者。其或達摩掬多歟。然以是經爲大日如來所說者。果如何耶。夫大日者。法身如來也。已無其父母。又不聞其誕生年代及國土。與釋尊父淨飯王。母摩耶夫人。常姬周世。而降誕于劫比羅伐窣堵。八十歲而緣盡入滅。非同日之談。然而法華釋迦。專談久遠。豈無壽量華嚴舍那。主說廣大。橫絕處界。今經毘盧遮那。則不然。已貫三世。又遍十方。法身極致。措是而將何求耶。由來法身之爲物。其在也。遍一切處。其現也。遍一切時。故謂之毘盧遮那。豈昔於印度。以梵語一說。大日經金剛頂經。而後杳無所聞哉。應是常住不滅。於一切時處。莫不說法。惟其說法也。無相無聲。不限列衆。不假方言。故要聞之者。必於三摩地境。換語言之。大日如來者。

信者三摩地境之外、非可存在矣。人若真信法身如來實在而深入其三摩地、則得眼見大日相好耳聞大日言音、洵不容疑、聞之而記之、則其人所述、即非如來說法而何哉。況住入我我入妙觀、至如來與己身同體而無異別、乃其所心思手錄、與如來直說、果有何所簡哉。掬多作大日經、寶覺出金剛頂經、正皆如是也。謂之大日如來所說、亦決非有矛盾之義矣。若謂以大日如來所說故尊之、以掬多寶覺所作故卑之、是即耳食之徒、空著假名而不悟實相者耳。或強以大日爲釋尊法身異名、而謂兩部大經釋尊說之耶。其戾於史傳事實、如先既辯之。加持身說法說之所由來、亦蓋出於欲會斯矛盾、何知苟篤信念、能達觀法、則雖非金剛薩埵、如今尙可得於三昧裡鐵塔中親謁大日、以聞其說法、而傳諸他人。古來明法阿闍梨、乃皆能之。所以於密教相承、經說與儀軌異、則據儀軌、儀軌與師決異、則從師決。於經軌講傳、說者住大日如來三昧、受者住金剛薩埵三昧、乃在茲焉。評して曰はく、志主の中天派と云ふ、善無畏相承の密教は、甚だ南方に近し。何となれば、無畏大日經を譯するや、譯語多くは、智度、中、百等の空教に依り、教理の説明亦之れを應用し、大日經宗を以て一法界と爲し、本不生を以て教相と爲すを以てなり。志主の南天派と云ふ、金智不空の相承は、頗る中天に近し。譯語の多くは、瑜伽唯識

等の中道教に依り、教理の説明も亦之れを應用し、多法界を以て宗と爲す。之れを以て觀ずれば、則無畏相承南天派、金智の相承中天派と謂ふを得べき歟。又、中天密教、以曼荼羅爲勝、南天密教、見長於瑜伽觀と云ふは、其勝長する所如何、委曲に之れを提示せよ。又、然其毗盧者、元不過於唐代印度作經家之假託、何由之尙之乎と。抑も毗盧遮那佛は、實在とや爲ん、將た假立歟。若し假立ならば、其在也、遍一切處、其現也、遍一切時と云ふべからず。若し實在ならば、法身の菩薩に對して、實相圓明の日に於て、遍一切處の身を以て、自證三菩提の法を説くに、何の問かありて假託と云ふ耶。志主、既に三摩地中所現の身説を以て、謂之大日如來所說、亦決非有矛盾之義と釋す。果して然らば、大日法身を以て密教の教主と爲すと論ずるに、何の不合理かあらん。又、世間小々の諸願成就を以て要とすると、成佛得脫を本とするとの差別を以て、雜密純密の別を釋して、古説の能説の佛身の法身、應化の別を以て、其勝劣を論ずるを破すは、未だ佛教の本意を解すること能はざるなり、何となれば、雜密の經に於て、多くは世間の所願成就の法を説くと雖も、皆之れ有相の劣機を誘引して、佛道に攝入せんが爲の不可已の方便にして、其歸する所成佛得脫にあり。然らざれ

ば外道の教と敢て簡ぶ所なし。何ぞ佛教と稱せん。兩部大經も亦世間悉地の法を説く故に、是に於て純雜の別あるに非ず。其差別を爲すは、古來の説の如く、教主にあるべし。兩部大經の教主、假令三摩地所説の身なりと雖も、法身如來所説の法門と、劣應身所説の法と、豈同日に於て論ずるを得んや。故に古説得と云ふべし。又毗盧遮那法身の説法は、志主の説の如く、常住三世にして一切時處に於て説法せざるなし。又其説法たるや、無相無聲にして、敢て方言を假らずと雖も、離相の相を以て、微妙莊嚴の身を現じ、無聲の聲を以て三平等の法門を説く。能説主既に然り。能聽衆も亦法身の居士にして、等覺以還の衆に非ず。然るに、兩部大經の原本印度語なるは、前所述の如く、傳法の聖人、印度に於て結集する故に、其方言を用ゆる、敢て怪むに足らざる也。又三摩地の境の外に、遮那の本質あり耶、將た之れなき耶。若し三摩地の境の外に、法身如來の實在の本質あらば、何ぞ三摩地境之外、非可存在と云はん耶。若し之れなくば、法身如來、豈唯從見の獨影境の相分ならん耶。三摩地所現の境は、眞言行者が加持世界に於て、能令三業同於本尊の觀行成就する時の所現の海會現前の相にして、行者の心變眞妄俱分の相分なり。即事而眞と云ふと

雖も、十喩の觀を以て、遮遣すべき法にして、遍計所執に同じ。何ぞ之れを以て、宇宙の元則、諸法根源たる法身如來の實在と云はん耶。又、掬多、大日經を作り、寶覺、金剛頂經を作る。併て三摩地中に於て、大日の身説を見聞することを得て、以て之れを記する故に、其人所述即大日の説法也とは、志主の意なり。然るに其遮那の相好音聲を見聞することを得る三摩地法門は、極最初に誰が之れを教授する乎。掬多寶覺誰に從つて之れを傳受するや。極位遮那の説法、緣に隨つて閻浮に流傳するに非ざれば如何してか之れを得ん。加持世界海會現前の影像相分の身説を以て、極位の身説に混濫すること勿れ。又、本經と儀軌と其説異れば、則ち儀軌の説を取つて經説を捨て、軌説と師口と異なれば、則ち儀軌を捨て、師口を取るは、師口を以て本と爲す小野流の傳なり。廣澤及び台密は之れに反す。志主何ぞ一概に小野の傳に黨する耶。又大日を以て釋尊の法身と爲すは、胎藏曼荼羅の此義を標するに非ず乎。普賢觀經の釋迦牟尼名毗盧遮那亦其の證なり。敢て未學の強爲に非ず。又本を攝して迹に從ふて、兩部大經を釋迦の説と云ふも、何の妨難かあらん。新義所立の加持身説法の由來する所、志主の云ふが如く、矛盾を會せんと欲して起るにあ

らず。義門に約して神變加持の説法を成立せんが爲也。

印度學風

願一世碩學戒賢論師。玄奘歸後。未幾而化。義淨至時。既不在世。至永徽末。外護大檀越戒日王亦殂。爾來那爛陀學風漸一變。大乘論師。接護法。戒賢之踵者。竟不再出。先是。當劉宋時。數論勝論等外道頗致盛。既而有吠檀多之勃興。隋唐之際。與大乘爭其衝。祕密佛教者。畢竟爲該攝之而起。是以婆羅門教耽阻。羅補羅等。與密部諸經軌。率同時而成。蓋修觀誦呪。不論內外。當時印度宗教爲一般世風。佛教非必學外道。如晚興毘紐派。則却欲包容佛教。敢以佛陀爲毘紐十大化生之一。乃兩者互相影響者。畢竟同一鼻孔出氣耳。

評して曰はく、印度學風の變遷を論ずるに於て、瑜伽系統の護法戒賢を擧げて、清辨智光を云はざるは、抑も何の意ある乎。

善無畏與無行

無畏豈能諳記十萬偈哉。若能諳誦之。則何待無行將來本而後始譯之耶。五百多羅尊。千二百頌三昧耶釋等。不足必信憑。是特不須言耳。蓋仿華嚴以術教法曠嚴而已。評して曰はく、無畏三藏は、得瑜伽の阿闍梨なること、史傳等に依つて明了なり、何ぞ能く十萬頌を暗記して之れを誦出することを得ざらん耶。又無畏、無行請來の本に依つて、翻譯を爲すは、無行の功を標彰せんが爲なるのみ。敢て自ら大日經の梵略本を請來せざるには非ざるなり。

大日經所說曼荼羅有十數種

此經所說曼荼羅。有十數種。然以大悲胎藏生漫荼羅。爲正式灌頂曼荼羅。白檀圓妙漫荼羅。爲其前方便。概定各部主要諸尊座位而已。轉字輪漫荼羅。示以印器仗種子字換形像之法。祕密漫荼羅。開都部嘉會而爲十三壇。多用三摩耶形。以示曼荼羅分合錯綜變化自在之妙。十三壇外。又有火天閻摩天。涅槃底王。嚩嚩摩。天帝釋。日月天等別壇。我台密安然大日經供養持誦不同。及覺超東曼荼羅抄。共具圖之。都部陀羅尼目云。小曼荼羅極微妙委曲。餘部所不代。乃謂是也。然要皆攝在胎藏大曼荼羅中。自法身至上

極致大日如來。而至報應二身變化等流諸類。開提鬼畜。凡覆載間所有內外兩道信仰對象。一切含靈。統該森羅。靡不竭而罄焉。信爲宇宙之一大縮圖矣。苟菩提心爲因。大悲爲根本者。真能觀是而通曉之。則得一切知智。方便究竟。而現前橫超十地。剎那徑歷三劫。卽身速成正覺。復何難有之乎哉。是則大日經宗之本竟。奚復要更籍金剛界曼荼羅。以做屋上更架屋耶。其無邊功用。乃爲毘盧尊所說。與爲作經者假託。固無些軒輊。密教發達之極。遂至案出斯至上至妙之理法。後學誰爲不敬仰之耶。是曼荼羅。依本經具緣品及入祕密漫荼羅位品所說以圖之。則最簡約。惟收經序云。三藏和上。躬親粉繪。乎起聖衆極圖一卷。兼地契及手印圖一卷。都集漫荼羅圖一鋪。大日經傳法次第記。附于大日經義釋云。有大毘盧遮那形像圖樣壇儀一卷。幪幪壇儀法一卷。我圓珍在長安。寫胎藏圖像。自分爲二卷。首題大毘盧遮那成佛神變加持經中譯出大悲胎藏生祕密曼荼羅主畫像圖。卷末記云。中天竺國那蘭陀寺三藏法師善無畏。於東都河南府大聖善寺譯出。是蓋崔牧所謂都集漫荼羅圖。海雲所謂形像圖樣壇儀。而無畏翻譯之旁。親依經以畫之者。今依是圖之。則頗異於本經曼荼羅。圓珍又在越州開元寺。寫得一本。題胎藏舊圖樣。附記云。今不依之。其圖更異。一行大日經疏。別載阿闍梨所傳漫荼羅圖位。安然

對受記云。之天竺曼荼羅。阿闍梨之爲善無畏。固無論也。今依是圖之。則尊數頗多。如來相好持物等擬人。列于遍知印左右。又人化觀音持物。一一爲諸尊。以列于蓮華部。更加十方佛及其菩薩。聲聞。挾侍於外院。如諸地神。尊名極繁。無畏又撰攝大毘盧遮那成佛神變加持經入蓮葉胎藏海會悲生曼荼羅廣大念誦儀軌。及大毘盧遮那經廣大儀軌。後者蓋不過前者之異傳本。開元錄及貞元錄。並不載此兩軌。想師資相傳之本。未曾廣示于世者。乃加于供養法。以造漫荼羅法。依是以圖胎藏曼荼羅。亦復各有小異。如是由一經而生種種異圖者。畢竟以本經所說未盡委曲。頗有變化餘地也。故從傳法阿闍梨意樂。不免往往生異。同隨緣隨宜以建立之。大都叶法。則廣略不必一定而可矣。然而等諸本曼荼羅。皆不行于後世。現行流布本胎藏曼荼羅。則空海所傳十二院圖而已。後常敍之。上記諸圖中。除胎藏舊圖樣及胎藏圖像。其餘四圖。皆中臺之外。以三重院成之。若以祕密壇之名言之。則如來觀音金剛佛母菩薩不動降三世在第一院。文殊除蓋障地藏虛空藏在第二院。釋迦與世天在外院。然胎藏圖像。獨有四大護。依其圖位。應置第一二院之間。舊圖樣則以釋迦置于第二院。更作外院。於是釋迦院與外院。多世天重出者。其不行于後世。乃爲之歟。願本經釋迦置于第二院。文殊等爲第三院。然一行疏。錄善

無畏口訣云。阿闍梨言。此中第二。是隱密語耳。若從中向外。當以釋迦牟尼眷屬爲第三院。今則以毘盧遮那法門眷屬爲第一。釋迦牟尼生身眷屬爲第二。諸菩薩在悲智之間。上求下化。故爲第三。所以如此互文者。此是如來密藏。爲防諸慢法人。不從師受者。變亂經文。故須口傳相付也。又云。中胎藏毘盧遮那。第二院觀音。金剛手。次院文殊等四菩薩。外院釋迦牟尼及所奉本尊等。乃諸圖皆依是。舊圖樣獨從經文而已。其更外院圖。世天者。蓋依餘諸曼荼羅之例。歟。要之。中臺外三重院者。大日經之本義。而又善無畏之正傳也。慧果以後。變爲十二院耳。三院又各有名。大日經傳法次第記云。中曼荼羅外。又有三種曼荼羅。一切如來曼荼羅。二釋迦牟尼曼荼羅。三文殊曼荼羅。總名爲大悲胎藏曼荼羅。於胎藏舊圖樣。乃第三院謂文殊師利會。又其次於九佛。有馬頭院者。指第一院中諸觀音耳。於胎藏圖像。乃第一院北方云蓮華部眷屬。其南西二方及四大護。云金剛部眷屬。指文殊除蓋障。地藏。虛空藏。謂曼殊室利種族。而胎藏圖像所列尊位。最似阿闍梨所傳圖位。是無乃爲圖像素成於無畏之手。圖位則出於無畏之口乎。經疏所說。及上記諸曼荼羅。中臺蓮華界白色。本尊大日。悉爲髮髻冠。但胎藏圖像尊容。頗似如來形耳。白蓮以幪。大悲髮髻以示菩薩現身成佛之深意。未曾有如空海請來圖。赤色寶冠者也。

蓋慧果以後。及兩部一具流布。爲使對金剛界。叶理智因果相待之義。而改之而已。夫密教本意。不啻以傳於比丘爲主。併以授法俗士。故前來所舉諸經中。說梳髮結髻印呪者不少。是卽胎藏大日髮髻冠之所由來。疏云。此是首陀會天成最正覺之幪幟也。其意蓋亦相同。圓珍曰。大日尊爲菩薩形。既是俗體。若爾。俗士學法。作阿惹梨得否。答此疑問。須云。正然耳。

評して曰はく、此の段委曲に諸種の曼荼羅を述べて毫も漏す所なし。能く其の意を得たり。曼荼羅海會の指鍼と稱すべし。圓珍些些疑文の間に答へて正然と云ふは大に得たりと云ふべし。

大樂不空金剛

猶惠果以後。此處置金剛頂理趣會大樂不空眞實菩薩。以紊兩部之別也。評して曰はく、説の如くならば、從來の胎曼降三世を以て持明院に安ず。亦兩部の別を紊すに非ず耶。夫れ胎藏曼荼羅は、本有を表し、金剛界は、修生を示す。是の故に、表面は別あるに似たりと雖も、全性起修の故に、内實は冥然として不二なり。其不

二を表示せんが爲に、金界の尊胎曼に入り、胎藏の佛、金界に入る。秩序を紊すに非ざるを知るべし。

宗教之藝術化

抑密教者、宗教之藝術化也。素主事相而尙幟幟。又重圖畫者如此。不啻爾。見其灌頂儀式。除覆帛而開眼。始謁曼荼羅海會聖尊。一滴冷水。點頂門時。肅氣徹骨。靈感遍身。聽戒飭而斷業。受勸獎以發念。坐正覺壇。著寶冠鬘。把金剛杵。供香華燈。唄讚滿耳。法悅動心。以令作現身爲大日如來之想。乃非一齣劇而何哉。雖然。外相不背。則內證必熟。豈絕事而理獨存乎。深信以行之。修觀以證之。儀式卽爲實際焉。天地之間。固是一大戲場也。古今東西之人物事蹟。皆其脚色耳。列祖妙案。先德祕構。至融會宗教與藝術。幾沒其差別。亦何怪哉。

評して曰はく、此の段頗る趣味あり、學密の人、高く著眼すべし。

蘇悉地經梗概

蘇悉地經者、依三部之別、而廣說持誦法則。諸曼荼羅、及種種成就法。經名蘇悉地羯羅。

作妙成就之義也。先以三部真言配于三法。爲佛部息災。觀音部增益。金剛部降伏法。三部各有主母。明王及大忿怒部。主卽佛部佛。蓮華部觀音。金剛部執金剛。部母則佛部佛眼。蓮華部白衣。金剛部忙莽雞。明王卽佛部最勝佛頂。蓮華部馬頭。金剛部蘇嚩。忿怒卽佛部無能勝。蓮華部施婆嚩訶。金剛部軍荼利是也。又三部各有辦事。通三部辦事。爲蘇悉地羯羅明王。以是等配于三法。則爲部母息災。明王增益。忿怒降伏。又佛菩薩聲聞緣覺等聖者所說真言。用于息災法。而得上品成就。淨居乃至三十三等諸天所說真言。用于增益法。而得中品成就。夜叉羅刹阿修羅。龍迦樓羅乾闥婆緊那羅摩睺羅部多卑舍遮鳩槃荼等。地居天所說真言。用于降伏法。而得下品成就。供養諸尊。佛部用白花有香。蓮華部用水中所生白花。金剛部用種種香花。又依三法各有三品。三等花。真言中有扇底句嚩莎悉底句嚩闍莽鉢囉闍莽烏波闍莽莎訶等字者。屬于息災法。有補瑟置迦字者。屬于增益法。有句嚩字者。屬于降伏法。又起於唵止於莎訶者。爲息災真言。始於訶終於拈吒若囉普者。爲降伏真言。無如是諸字者。爲增益真言。其餘塗香燒香燃燈獻食等。三部亦各有別。成就相有三種。光焰爲上。烟氣爲中。熅煖爲下。三種悉地。上者得乘空自在。中者得藏形隱跡。下者成就世間諸事。又於佛部得悉地爲上。蓮華部爲中。金剛部爲

下作法次序。行洗浴用水土辟諸毘那夜迦沐浴灌頂結頂髮三部結髮三部嗽口飲水灑淨三部獻水而後念誦各有真言結護法有九種。辟除諸難結地界結虛空界結漫茶羅界結方界所結金剛將結金剛鉤欄護物護身是也。所謂十八道蓋本于是。經中又詳說阿闍梨持誦同伴諸相擇處法持真言法等真言法中說不應授真言手印功能及普行法於未曾經入曼荼羅者不應詰難大乘正義不應與外道及旃荼羅同住作呼摩時手持拔折羅護身用珠索結線奉請品中說本尊觀想供養品中說運心供養字輪觀及作法印明其餘諸品廣說悉地時分擇地淨地線纏四概埋寶七日供養作壇等諸法障難諸相供養諸器資物護摩及諸成就法等高麗藏本別有息災增益降伏三品以詳說三種法。經中所說諸曼荼羅凡有十種成就佛部蓮華部金剛部成就諸物通三部祕密盜物却徵成辦諸事灌頂光物是也。唐初智通譯千眼千臂經及隨心呪經所謂三曼荼羅者即非此經所說三部若通三部曼荼羅而何哉。前二經亦云未經入曼荼羅者不得見其法門呪印其語意全同此經由是觀之此經述作蓋為不下於唐初翻願陀羅尼集經既有部主部母然未有各部明王忿怒辦事且未有論三部三法三品之類別配當及關係如此經所說者如念誦結護諸法亦較蕪雜而未說觀想以是推之此經之出後於

集經初稿也明矣。其殆成于隋代歟。蓋集經原本金剛大道場經者欲該羅集成所有諸尊法而編之。大日經者欲作最高最大曼荼羅以統攝諸尊曼荼羅立即身成佛之法。乃捨世間諸願成就而撰之。至此經則不然。其述作之意主在所有行法之整理統一。以故所說頗有秩序。且經中以三部經王自任焉。故我圓仁撰此經疏曰。結惣真言之祕旨。該貫大經之要妙。且通諸部而成階位。圓珍乃謂是兩界大法之羽翼。宜登阿闍梨位而後方始授之。安然亦言之。是以台密為兩部不二大法而行。蘇悉地灌頂。因別有其印信。按大日經傳法次第記。新羅沙門玄超受大日經大教及蘇悉地教於無畏。傳之於青龍寺慧果。蓋於唐既有蘇悉地教傳法也。然後世以胎藏兩部合行。專為蘇悉地。此經所說灌頂曼荼羅乃遂不行焉。安然以此經立三部為胎藏大法之悉地成就法。更以十八道為紀綱。故謂少異於兩部。却以陀羅尼集經屬于蘇悉地法。或有以此經為胎藏中金剛部法者。然是猶為未中肯綮。何以言之。此經立三部并其曼荼羅以東為上者。固頗似胎藏。然唯是可謂屬于胎藏漸成之系統而已。軍荼利請問而執金剛說之。元非毘盧所說。持誦規則縱令頗廣繁。要皆不出於世間諸願成就之法。但佛部上品悉地相中。僅言成滿辟支佛位菩薩十地。乃至成佛。又表白中。唯願同昇妙果。速成佛道而已。全然為統一雜

密行法之經。與集經殆同味。而教相不太高。不應視以爲純密經也。是畢竟爲其作經年代較古。而密教尙未發達耳。然密家漫舉之。爲三部五部祕經之一。以伍于兩部大經。其果爲當耶。未。知其可也。空海因其說。阿闍梨相等。三學錄中。以此經共蘇婆呼經。編入律部。恐亦未妥而已矣。蘇悉地羯羅供養法。亦無其所出。是儀軌而非經。雖云翻譯。開元貞元二錄不載之。蓋依本經之意。無畏自撰之。以授弟子。作法印明。益近于十八道。道場觀法亦漸精焉。

評して曰はく、初に略して經所説の法要を標して曼荼羅の圖様を示す。大に稱讚すべし。台家所傳の蘇悉地灌頂を以て、蘇悉地經の灌頂と爲し、又台密の合灌を以て専ら蘇悉地と爲すと云ふは誤解なり。何となれば、台密の妙成就灌頂は、兩部而二の灌頂に對して、不二の故に妙成就と名くと雖も、蘇悉地經の灌頂にあらず。都法の祕録を拜見せば思半を過ぐべし。謂はく胎藏の四重と、金界の四重とを以て、蘇悉地の密印の祕明と爲すを以てなり。是の故に兩部の祕印明の外に、蘇悉地の印明あるに非ずと雖も、綜合して不二と爲して妙成就と名く。是を以て蘇悉地經に於て關係なし。又台密合灌に付て、二説あり。一説に云はく、受者資縁豐富なら

ば、兩部各壇の灌頂を行ずべし。若し受者資縁の乏少ならば合壇灌頂を行ずべし。此の二灌に於て淺深あるなしと。一説に云はく、合壇は不二にして、阿闍梨の灌頂なりと。是を以て、台密の合壇灌頂は、蘇悉地經の灌頂にあらずることを解すべし。合灌若し蘇悉地經の灌頂ならば何ぞ彼の經所説の曼荼羅を用ひずして、而も兩部曼荼羅を用ゆる乎。台密は兩部を以て而二と爲し、別に不二の灌頂を傳ふるを以て規模とする故に、殊に蘇悉地灌頂を傳ふと云ふと雖も、蘇悉地灌頂の式文あることなし。又慈覺大師以來未だ蘇悉地の作法灌頂を行ずることを聞かず。之れを以て觀れば、印法灌頂に依つて唯印明を相承する耳ならん歟。東密亦蘇悉地の印明を相承すと雖も、蘇悉地經に關係なし。以て蘇悉地灌頂と稱するは、彼の經の灌頂に非ざることを知るべし。蘇悉地經は、阿闍梨が灌頂を行じて弟子を攝取し、又眞言行者が三密の行を修するに就いて、持誦の律儀を明すを以て其大綱と爲す。自性法界宮の曼荼羅會中に於て、軍荼利使者請問を爲し、金剛手之れを答ふ。經の首に通序なし。大日經會中に於て問答を爲すを以てなり。軍荼利は通諸部の辨事明王なる故、此の請問を爲す。金剛手は、他受用身にして、眞言行者の爲に起立壇場。

莊嚴供養等の所有の事業を司る故に答説を爲すなり。毘盧の眞説に非ずと雖も、金剛手加被を蒙つて之れを説く。以て純密に攝するに何の不當あらん。皆不出於世間成就法と云ふは何ぞや。世間法の成就に即して出世間の妙悉地を授くるは、即事而眞の大日經宗の深旨なり。又佛蓮金三品の悉地は、成佛の法にあらずして何ぞや。故に經に云はく爲依阿闍梨故。不久而得無上正等菩提と。又云はく依經畫妙曼荼羅應須念念發大菩提心乃至並皆堅固發菩提心決定正見と。又云はく並皆懺悔起至誠心盡形皈命佛法僧寶涅槃正路乃至發菩提心求於勝上解脫甘露悉地佛果と。何ぞ教相不太高と云はん耶。故に蘇悉地經を以て兩部大經に伍するに何の不可あらん。高祖大師三學錄中に此の經を以て密宗所學の律部に列し玉ふは、眞言行人起壇の法式進退等の律法を明すを以てなり。然るを未妥と云ふは其の理由如何。

蘇婆呼經梗概

蘇婆呼經極似蘇悉地經。說三昧耶戒律處所除障作金剛杵藥驗成就悉地看事遮難。

成就八法等。亦是持誦通則。而作經之旨。向在行法統整。故有其分類頗可見者。然與蘇悉地經立三部不同。此經則立五部。其一。世尊說三俱胝五落又眞言。名曰持明藏。即佛部眞言。其二。觀自在說同數眞言。其主爲馬頭。其部曼荼羅。名曰彌毘耶。又有十二臂六臂。上髻滿如意願。四面不空羂索。二臂七眞言主。並是馬頭曼荼羅所管。復有目睛妙白。居白觀世。獨髻金顏。名利稱悉唎俱胝八明妃。是即蓮華部。其三。金剛藥。又將說七俱胝眞言及曼荼羅。名曰廣大跋折囉部。此部有十使者。七明妃。六十四續。及軍荼利等無量忿怒。最勝明等無量眞言王。即爲金剛部。所謂七明妃。蓋出於前所說外道七神母。六十四續。蓋出於其六十四瑜祇尼。其四。般支迦大神說二萬眞言。其神妃彌佉羅說一萬眞言。名曰般支迦部。其五。摩尼跋陀羅大神說十萬眞言。多聞天王說三萬眞言。名曰摩尼部。其餘魔醯首羅天那羅延天梵天日天伽路茶魔醯首羅大妃火神摩登伽龍王羅刹四天王阿修羅切利天等。各說三千乃至十俱胝眞言。分攝于五部。又有非部所管者。欲持誦之。初歸三寶。次歸部主。然後乃應念誦其眞言云。其意蓋在攝外道所有明呪。初加歸依三寶句及歸依部主句。以欲籠羅于佛教中。諸經眞言實然者不少。而是經五部分類。頗似三十卷羂索經及一字佛頂經所談。其重摩尼跋陀羅亦同。且諸變化觀音之名。

多符于三十卷羅索經。因想蘇悉地經成于中天。此經或出於南天。行法統一之意。乃雖兩者相同。至其統一之法則稍異。又此經既有明妃。明妃者蘇悉地之所未立。而大日經乃有之。由是考之。此經述作。蓋在蘇悉地之後。粗與菩提流志譯諸經同年代歟。又此經頗見毘那夜迦致大願婆羅門教中。與耽咀羅派相前後。而譏娜鉢底派興。譏娜鉢底者即毘那夜迦也。其發達。蓋與是派共其傾向無疑。在密教則亦爲南天之風。其見於金剛界曼荼羅外院。有四毘那夜迦。輒正有思過半矣。此經毘那夜迦有四類。一摧壞部。部主名曰八將。持四天王所說真言者受其障。二野干部。部主名曰象頭。持魔醯首羅天所說真言者受其障。三一牙部。部主名曰嚴髻。持梵釋日天那羅延風天所說真言者受其障。四龍象部。部主名曰頂行。持釋教所說深妙真言者受其障。又呵利帝兒。名曰愛子。持般支迦所說真言者受其障。摩尼賢將兒。名曰滿賢。持摩尼部真言者受其障。乃至廣說諸類。毘那夜迦作障之相。經中又謂。餘外諸宗真言成就法。或三。或四。或五。六。八十。所說不一。此釋教具二種法則成就。一者行人。二者真言。是可知。當時內外兩道。成就諸法。區區亂雜。無所統一。蘇悉地及此經之出。蓋非偶然也。此經又始說護摩爐。方圓三角之外。有蓮華形。蘇婆呼童子請問。而金剛藥叉將說之。其爲雜密經。不須復言矣。後趙宋法天所

譯。有妙臂菩薩所問經。即爲此經之修訂本也。

評して曰はく。經に云はく於大會中有一童子と。即色究竟天金剛頂經の説會を以て大會中と云ふ歟。彼の曼荼羅大會の中に於て妙解童子が金剛手に對して。未來の眞言行人の爲に請問を爲し。金剛手答説す。純密に屬して何の問かあらん。然るを雜密と判ずる其の意如何。東密所傳の雜密に別あり。顯密雜部と。兩部雜部となり。伽耶成道の釋迦顯教を説く中間に於て。機縁に投じて密教を説くを顯密雜と云ふ。顯中に於て秘密を雜ひ説くの意なり。又金胎兩部の觀門。契明等を雜ひ説くを兩部雜と云ふ。法華觀智軌等の如し。然るに。今志主蘇婆呼經を以て雜部と云ふ。其の義如何。大日經中。既に普賢地藏等各々の三昧に住して自の眞言を説くあり。遮那の直説にあらざるを以て。槩して純密に非ずと云ふことを得んや。若し志主の説の如くならば。大日經は純密に通ずと云ふべきにあらず耶。如何。

求聞持法

虛空藏求聞持法。題下注記。云出金剛頂經成就一切義品。然求之於唐譯金剛頂經中。

無所謂成就一切義品者在。乃試就趙宋施護譯三十卷金剛頂經而檢之。其虛空藏菩薩能滿諸願法者。主在得伏藏財寶。至求聞持法。則亦無所見。且不說今軌所出最勝心陀羅尼。若夫以唐譯金剛頂經所載之品。與宋譯相對照。其原本固不同。乃無畏所見之本。獨有求聞持法。而抄出之歟。無畏之至唐。其所實梵本皆進內。而以其翌年譯此法。不知無畏果得其原本於何處也。是時金剛智未來。無畏其或先至那爛陀。而得諸南天海濱者耶。或係無行之所得於師子國者耶。或又菩提流志所傳者耶。開元貞元二錄。共明記其譯年。且開元六年。我國沙門道慈。早受是法於無畏而歸。然而金剛智之至唐。乃在開元八年。可知金剛頂經之傳于唐。不必待金剛智也。而無畏又不曾知龍智。其爲以達摩掬多與龍智同一人之說。亦不足取耳。然則龍智金剛智。獨傳鐵塔相承金剛頂經之說業已不須論。而自破矣。但想無畏雖未傳其全部。亦且得成就一切義品一分。以譯之而已。虛空藏菩薩法。夙發源於姚秦佛陀耶舍譯虛空藏菩薩經。從初說聞持之功用。至茲。南天密教取以成此求聞持法也。此法所說畫像法。月輪內畫菩薩。其實冠有五佛。又說金色滿月字輪觀法。稍有廣敘。其爲金剛頂部法。由是明矣。是爲此部初譯。此法又始說木曼荼羅。

評して曰はく、無畏三藏の金剛頂部の相承を論じて、無畏果得其原本於何處也と云ひ、又其先至那爛陀。而得諸南天海濱者耶等と云ふ、何ぞ夫れ相承に於て正確を缺く乎。龍智を否定せんと欲して、無畏の金剛頂相承に於て所據なからしむ、何ぞ偏見の甚しき耶。又亦且得成就一切義品一分、以譯之而已と云ふは如何。無畏三藏師授なくして猥りに之れを持す可からず。其の相承如何、無畏又不曾知龍智と、金剛頂の法門龍智に依らずして誰に依つてか之れを得る耶。虛心無執にして以て論ずべき也。

理智二法界

胎藏基于雜密。故自主理。金剛頂以心地觀法勝。故自主智。然各非有待他而始全之義。理中有事。事中有理。其一互融他。

評して曰はく、胎藏法は、雜密を以て基とすと云ふは、輒く信ずる能はずと雖も、胎金次の如く、理智及び一多法界に配し、又各非有待他而始全之義。乃至一互融他と釋するは、能く兩部の達意を得たり。古來の密徒の皮相の見を以て、金界一法界胎藏多

法界と論ずるに黨せざるは卓見と稱すべし。然るに胎藏を以て事法界とし、金界を以て理法界と爲すは誤れり。何となれば、兩部は事理互融し、相即無礙すと雖も、強て分つて事に配すれば金界を事法界と爲し、胎藏を理法界に配すべし。何となれば金は多法界を宗とし、胎は一法界を旨とするを以てなり。

胎金兩部會融

凡以之化人胎藏之機、須授胎藏一法、金剛頂之機、須授金剛頂一法而已。若強爲不可不兼受兩部灌頂、則猶與一病者以二種異藥耳。故圓珍些些疑文云、凡一法已足、何設金剛胎藏兩部。若不獲已、必合有者、何故西天三藏大師等、本得一法、是兩部一具流傳後、當必起之疑問耳。其兩者既成而並存也。忽生斯相對會融之見解、強同視異方異名三佛、後至我空海、終以一具流傳爲必教法之行于世。流動變遷而不少停、以致其發達無窮、實如斯矣。如謂龍猛以後數百年、一系相承以至金剛智、則固不足發一笑也。評して曰はく、機根萬差なれば、兩部一雙に授くべき普門の大機に對しては、一具に之れを授けざる可らず。機根豈一片に限らん耶。兩病併發者には、兩藥を與へざ

る可らざるが如し。何ぞ怪むに足らん。些些疑文に、凡一法已足等と云と雖も、圓珍和尚は、法全闍梨に從つて、兩部一具に之れを受け、亦圓珍三井に於て灌頂を行ずる時、兩部一具に之れを授けたるに非ず耶。夫れ之れを如何。又我が高祖大師は、惠果和尚に從つて、兩部一具に之れを受け給ふと雖も、大師の眞意、機根の何たるを問はず、悉く一具に之れを授くべしと云ふにはあらず。但し、末資の爲に兩部一具に之れを授くるは、已むを得ざる巧の方便耳。

空海不重無畏

則應知無畏之志、在合胎金兩部爲一。乃非爲空海之先蹤者而何哉。然空海却不重無畏。是爲可怪焉耳。

評して曰はく、高祖大師以來、東密灌頂内庫の兩邊に八祖の影像を奉安し、六種の供具を辨備して、供養を捧ぐ。中に於て無畏一行の兩祖あり。何ぞ無畏を重ぜざと云ふ耶。志主は、東密灌頂内庫の消息に味くして、自ら傳法阿闍梨と稱す。固より一笑を發するに足らざるなり。不重無畏の攻難は、台密に對向すべし。東密は敢

て關せざるなり。又高祖の十住心論及び寶鑰の第八、第九の住心に於て、無畏大日經疏を引證して、住心を成立し玉ふ。若し不重無畏ならば何ぞ之れを引證し給はんや。無畏一行は傳法相承の祖師に非ざるを以て血脈には列せずと雖も、高祖大師密教傳持の八祖を創定して、末資をして朝夕に無畏一行を供養せしめ給ふ。然るに何の故を以て不重と云ふ耶。

空海血脈

至空海血脈則以兩部從初一流傳爲規模。而不合于史實。故今輒不取焉。評して曰はく、史傳は多く傳聞傳説に依る。親たり其の人に接して聽取する所は甚だ尠しとなす。故に史傳必しも誤謬なきにあらず。是を以て一概に信じ難し。然るに、我が高祖相承の血脈は、金剛智は不空に授け、不空は惠果に授け、惠果は高祖大師に授く。眼眼相對して面授面の血脈なり。然るに、志主斯の如き師資面授の血脈を捨て、傳聞傳説に依つて記録する疎遠の史傳を取るは、其の意如何。

大日經疏釋

獨空海所請來疏有二十卷。蓋係其自所治定。評して曰はく、我が高祖請來二十卷疏は、一行草稿のまゝにして、一句を訂せず、一字を加せず。然るを其自所治定と云ふは、其の證如何。八家秘録に依るは、太だ非なり。

龍智

若夫龍智實有其人。且果爲龍猛之資。則其出世正可在晋代。豈能得爲盛唐時金剛智之師哉。若果爲金剛智之師。則縱令長壽異常。能保百歲。其生應在隋末。何以得云親受法於三國時之龍猛乎。

評して曰はく、相宗は、增壽變易生死を談じ、性宗は、別盡別生の變易生死を論ず。三乘教既に然り、況んや、密教加持の法力、數百歳の長壽に保持せん、何の怪事かあらん。然るを荒唐無稽、不足信憑と云ふは、佛教の教理に暗き所以なり。自ら鈴を振り、金剛杖を輪轉し、修して以て法力の虚しからざるを實驗すべし。

達摩掬多

掬多素非龍猛弟子。住在那爛陀寺。金剛智之受法於其人。何爲敢去那爛陀寺。往南天而住七年乎。

評して曰はく、余は掬多の傳法を疑ふと與に、亦其の存在を疑ふこと、志主の龍智を疑ふと異らざるなり。又假令掬多を實在の人と爲すとも、彼は唯胎藏の一法を傳へて金剛界を得ざる故に、菩提去つて南天に往き、一多法界の雙璧を傳ふ、敢て怪むに足らざるなり。

本師寶覺

或想龍智蓋出於寶覺之誤傳。龍智梵言那伽菩提。寶覺梵言囉怛那菩提。孰能保其必不訛謬耶。曼殊千臂千鉢經序云。天寶一年二月十九日。金剛三藏將此經梵本及五天竺阿闍梨書。並總分付與梵僧目叉難陀婆伽。令送此經梵本并書。將與五印南天竺師子國本師寶覺阿闍梨。是實無二徵證也。此經或雖誤爲不空譯。實金剛智所譯。故續貞

元釋教目錄云。千臂千鉢曼殊室利經。大弘教三藏金剛智開元二十八年。於長安薦福寺譯。其經首序記分明。貞元錄中遺漏不載。以是考之。序文所謂金剛三藏者。卽金剛智而非不空金剛。但文中云天寶一年。乃爲開元二十九年之誤。此經翻譯起于開元二十八年五月五日。訖于同年十二月十五日。而翌二十九年八月十五日。金剛智示寂。其十二月。不空再向南天竺而發。則云天寶元年返。其梵本於天竺者。豈有其理哉。其翻譯筆受者慧超。新羅人。曾周歷五天。歸唐之後。師事于金剛智九年。序記亦係其所作。文雖甚樸拙。其所記最足厝信焉。所謂本師寶覺。乃定爲金剛智受灌之阿闍梨。其事明瞭的確。莫可復疑而已。是時寶覺在師子國。師子與摩賴耶。一衣帶水耳。其或游行以在王寺。亦不容疑。智之受法於南天竺。乃如所傳。其所受五部灌頂者。既金剛頂法。而其曼荼羅爲金剛界。固莫論也。然而趙遷殿郢。呂向等爲僞。後人皆承其謬。遂無復檢千鉢經序。以考覈之者。又未曾聞有唱寶覺卽龍智之說者。迄今傳金剛頂法者。竟不曉根本先師。有寶覺阿闍梨者。是豈得不慨乎。

評して曰はく、千鉢經の序及び本文に就いて、虚心以て熟讀を爲さば、序は慧超の所撰に非ず、經は金智の譯にあらず。唐代以後、支那僞作の經なること、掌文を見るが

如し。序文は慧超の作にあらず。何となれば、慧超は親たり金剛智の巾瓶に侍して、開元二十一年より同二十九年に至る三藏臨末の病褥に湯藥看護の勞を執りしは論なし。假令老耄すと雖も、恩師入寂の年月を忘却すべけんや。然るに其年月を誤つて、天寶二年尙存命と爲す。此れ其の第一理由なり。菩提三藏歿して後、不空三藏に従つて法を受け、其生命とする所の千鉢經に於て、更に重ねて謬啓し、法門を決擇す。法乳の恩頗る重し。又不空三藏上足の一人なり。豈入滅の年月を忘却する不孝の兒なる可けん乎。然るを誤つて、唐大曆九年十月云々と云ふ。此れ其第二理由なり。慧超は金智の法資亦不空の上足なり。知るべし、學識卓絶、文章優秀なることを。然るに、序の文章拙劣且つ鄙俗なり。識者誰か慧超の眞作と信ぜん。此れ其第三理由なり。又寶覺阿闍梨は、金剛智不空等の諸傳記に、其名を掲げず。新舊唐書開元貞元等の諸錄に、其人を錄せず又志主の近其實と云ふて、信用する所の海雲、造玄の兩部傳法次第記、及び其他の傳燈血脈諸書にも記せず。唯千鉢經の序に出でたるのみ。是を以て其實在を疑はざるを得ざるなり。又此經は唐末の僞作にして、印度傳來の經にあらず。菩提三藏の譯にあらず。委しくは下

に述ぶるが如し。然るに現行の大唐貞元續開元釋經錄及び貞元新定釋教目錄等に千鉢經を列擧するを以て、僞經に非ずと云ふ人ありと雖も、有人(小野玄妙師)論じて曰はく、苟くも活眼ある者は、誰か後世の竄入を知らざらん。何となれば續開元錄卷下に云はく、千鉢千鉢曼殊室利經十卷、大唐贈開府儀同三司諡大弘教三藏金剛智、於長安薦福寺譯と。一往之れを見れば最初より千鉢經を編入するに似たりと雖も、續開元錄は、貞元十一年西明寺圓照、開元十九年以後の翻譯並に製作の經論等、三百四十二卷集録して上表す。若し此の經目錄總集の最初より現存を爲さば、卷頭第一に於て、略出經等と與に一具に並列すべし。然るに、不空、般若三藏等の所譯の經を登録して、後に更に此經を録するは如何。朝廷上奏の目錄に、斯の如く其秩序を失することあるべきにあらず。又其上表經目の總數に此經を加へざる、是れ後人竄入加筆の確證なり。其一例を示さば、此錄は、貞元十一年撰錄上進に拘はらず、新譯大方廣佛華嚴經四十卷、厨賓三藏般若奉詔譯右一部四十卷、四帙六百二十二紙貞元十二年譯十四年上不在此收と。是れ後時竄入の文字なること明白なり。千鉢經例して之れを知るべし。又貞元錄卷第一總錄中特承恩旨錄卷二十七、別錄

中補闕拾遺錄及び卷第二十九入藏錄等に此經を掲ぐと雖も、尤以て肝要たる卷第十四總集群經錄中金剛智條下に經目を列するなきは何ぞ乎。是れ亦後人竄入を證するに足ると。又同師千鉢經に就いて傳承の不明を論じて曰はく、續貞元錄に貞元錄漏此經と云ふは、此の經の偽作を看破せざるを以て、此評を爲す、其實は翻譯せざる故に入藏を爲さず。又貞元錄に經目を録せざるなり。若し實に菩提三藏、玄宗帝の詔勅を奉けて翻譯を爲さば、入藏せざるの理由なし。立會の僧侶翻譯官等之れを知らざるの理由なし。同門間に於て流行せざるの理由なし。之れを以て此れを見れば、千鉢經翻譯は事實無根と云ふべきなり。又此經卷は最澄、空海等の密教傳承の入唐八家、之れを請來せず。蓋し開元以後の新譯の經本は、八家の阿闍梨に由つて遺漏なく請來傳承せり。然るに唯此經のみ請來せられざるは、金智の譯に非ず。又入藏せられざるを以てなり。長安洛陽の金智、不空門下の諸師も、傳承を爲さず。智證大師、後に風かに此經の存在を聞き、陽成天皇元慶六年、弟子三慧をして、大唐に派遣して、大興善寺の智慧輪三藏に上書して、本經及び曼荼羅を乞求すと雖も、遂に得る能はず。後二百年程を過ぎて三井寺の衆徒成尋阿闍梨が

印度に於て買取せり。遊方傳叢書第三參天台五臺山記第八云く、

依路次寄印經院買取千鉢文殊經一部十卷、寶法要義論一部十卷、菩提離相論一卷、廣釋菩提心論一部四卷、圓集要義論四卷、祥符法寶錄二十一卷、正元錄二卷、與錢一貫五百文了。

と知るべし、成尋師の此經本を得たるは、入唐八家の諸阿闍梨の傳授請來に同じからず。成尋阿闍梨、他の諸書と與に共に買收して日本に傳ふるものなり。後約五十餘年を過ぎて、遼の保大丙午歲編錄する續貞元釋教錄に云はく、千鉢千鉢曼殊室利經十卷一百六十紙、右一部十卷、亦是大弘教三藏金剛智、開元二十八年、於長安薦福寺譯其經首序記分明、但恒安昨者遊禮五臺山、週闕右已來、尋訪抄寫得所將到貞元錄藏經文之時、於彼方藏內甚見其經爲貞元錄中遺漏不載、云於金剛智廣行記中具述爲訪行記不獲、遂不寫到、今大唐保大三年冬、伏蒙天恩、於闕下昇元寺寫錄所將到貞元經文編錄入藏、流行於昇元寺西藏院、又見此經本、遂乞編入貞元藏內云々。具さに事由を伸べて始めて入藏を爲す。是れ恒安氏偽序の言を信じて、金智譯と認めて上奏して編入す。宋、元兩藏此經を收入せず。麗藏中に收藏する所は、高麗の高宗の朝に、

海印寺現在の大藏經板彫刻の際、遼本を得て勘校をなせり。之れに由つて自然に此經を收入す。麗藏は金智譯となすこと、續貞元錄に同じ。然るに獨り明藏のみ不空譯となすは未だ由來を詳かにせず。已上の事實を綜合して之れを考ふれば、金智が京洛に到着せし開元八年より、智證大師が智慧輪に乞請せし元慶六年に至るまで、一百六十餘年間傳來明了ならざりしが、爾後約二百年を過ぎて、成尋闍梨傳承にあらずして買取を爲せり。而して又天台寺門、此經を傳承せず。之れを以て之れを見れば、此經は、正統密教の聖經に非ざる爲に、度外視せられたる事實は明了なり。故に遼の保大年間の入藏は、毫も此經の價值をして増大ならしむる理由には非ざるなりと。奪つて論ずれば斯の如くなりと雖も、且らく與へて序は慧超の眞作、經は正しく金剛智譯として、之れを論ずるに、有人加藤精神師云はく、密教發達志五卷、通じて種々の新説ありと雖も、先輩に指導も受けず、少暗示をも受くることなく、自心を師として、祕密儀軌を濫讀し、其間に於て發見せられたる新説は、恐らくは實覺論ならん。大村氏が千鉢經の序を讀破せられたる時は、恰も讎仇の首を取りしが如き感ありしならん。氏が龍智は實在の人にあらざして、金智の師は實覺なり、

實覺金剛頂經を作ると云ふが如き大膽なる新説も、悉く千鉢經の序に由來するならん。實覺は發達志の核心にして亦重要なり。此序は文章稍拙く亦事實に間違あり。其一は至天寶一年二月十九日、金剛智三藏、將此經梵本、乃至將與五印度南天竺師子國本師實覺阿闍梨と云ふ。然るに金剛智は其前年即開元二十九年八月十五日入寂せり。大村氏云はく開元二十九年の誤なりと、或は然らん。其二は後於唐太曆九年十月於大興善寺大師大廣智三藏和尚邊更重諮啓と云ふ。然るに不空は、太曆九年六月十五日を以て入滅せり。何ぞ諮啓することを得ん。何が故に右の如き間違あるやと云ふに、慧超は新羅人にして青年五天を漫遊し、支那に廻つて後金剛智に親灸して開元二十一年正月一日漸く千鉢經の傳授を受けたり。慧超は何年頃に飯國せしやと云ふに、同師著の往五天竺國傳三卷ありと雖も、佚して傳はらず。近年法國人伯希和氏が、支那北方燬煌の石窟より發掘せし論疏等の中に、往五天竺傳の殘片あり。之れに依つて見れば開元十五年十一月上旬支那安西に飯着せり。而して其開元十五年より、千鉢經の序文を作する建中元年迄、其間五十四年を経たり。之れを以て案ずれば、印度より飯國の年齢大凡そ三十歳前後と爲

すも、建中元年は八十歳以上九十歳に近き高齢ならざるを得ず。故に多少毫碌せし乎も知るべからず。故に、大村氏の説の如く、天寶一年は開元二十九年の誤、太暦九年は、八年の誤なるやも知るべからず。然り、此序文に、與寶覺阿闍梨と云ふ文、此れ發達志の根本の誤解なるを以て、委悉に之れを辨ずべし。寶覺闍梨を以て、金剛智三藏の本師とすれば、三箇の疑問あり。夫れ金剛智三藏密教を傳授せしは、南天竺摩賴耶國にして、即ち印度大陸なり。寶覺は師子國、即ち錫蘭嶋なり。此れ第一の疑點なり。大村氏は師子國與摩賴耶一衣帶水耳。或遊行以在王寺、亦不容疑と會通すと雖も、憶説信を措くに足らず。又金剛智三藏、摩賴耶に於て、密教傳授せしは、三十一歳より三十七歳に至るの間にあり。開元二十九年迄殆んど四十年を経たり。而して開元二十九年は入滅の年なるを以て、老衰は無論なり。寶覺は、師の故に、大凡そ二十年程の年長者と見ざるを得ず。開元二十九年金智は、七十一歳の故に、推するに、寶覺は九十歳前後ならん。金智自ら古稀以上の高齢を以て、九十歳程の本師寶覺に對して、交通不便の時代、殊に遠國に經本を送るに、其還附を請求するが如き常識を逸するものに非ずして何ぞ乎。既に經今不廻と云ふ、還附を請求せしこ

と明かなり。此れ第二の疑點なり。又金智三藏が、法資不空等に傳授せられたる最貴重の經典は、金剛頂經なり。然るに此梵本を還送せずして、唯千鉢經のみ還送する理由如何。又此經は、入唐八家の請來にあらず。翻譯以來、不空三藏を始め、弘法大師以後にも、我が密徒は此經を以て特に所依の經と爲さず。随つて此經我等密徒に對して何等の與ふる所なく、亦權威なし。然るに多數の梵本中より、唯此千鉢經のみを選びて還附するは何の故なる乎。此れ第三の疑點なり。今常識を以て考ふるに、慧超印度に遊んで師子國に往き、寶覺闍梨を拜して本師と爲して、秘密の法を受け、併せて千鉢經を傳へ、支那に皈つて後此經の翻譯を得て、大支那國に流傳せんと欲すと雖も、翻譯は詔勅を奉くるに非ざれば不可能なるを以て、是に於て慧超は、密教の阿闍梨にして陛下の皈依し給ふ三藏を物色すること約六年間、遂に開元二十一年金剛智に謁することを得て、薦福寺の内道場に於て、千鉢經の傳授を受けて初て法資となれり。是れ實に開元二十一年正月一日辰時なり。爾後金剛智に奉事すること八箇年、以て千鉢經翻譯の時機到來を期待せり。開元二十八年四月十五日、偶々玄宗帝薦福寺に臨御參拜あり。慧超は此機逸す可らずとして千

鉢經の翻譯を上奏す。三藏も亦助奏し給ふならん。勅許を得て、二十九年五月五日卯刻翻譯を起首し、三藏梵本を演べ、慧超筆授す。慧超筆授の經は、唯此の一經あるのみ。是れ慧超の發願に依つて翻譯するを以て筆授の任にあらしめたるなり。此の經の梵本は慧超が寶覺の付囑を受けしより、五天周遊の間も、常に奉持して片時も不離身なる寶典にして、慧超の生命とも稱すべき法冊なり。此の經は本寶覺開梨に受けたるを以て、其翻譯の記號ある梵本を以て、本師寶覺に送りて一見に供したるなり。(雷斧附加して云はく、千鉢經翻譯成りて大支那に流傳するを得たるを報告するの意もあるべし。)故に、寶覺は慧超の本師にして、金剛智の本師にはあらざるなり。斯の如く解釋すれば、前の三疑、直に氷解して痕なしと。(亦附加して云はく、慧超は金剛智の内示に依つて、本師寶覺に送經せしなるべし。又及五天竺阿闍梨書とは、慧超が五天漫遊中に得たる書なるは無論なり。)更に有人勘考して曰はく、大村氏の説の如く、假りに送經の年度を開元二十九年と爲さば、金智入滅の年にして同年内に不空渡天して南印度師子國に往けり。而して送經の本人は、金智又慧超何れと爲すも直接不空に託すべし。然るを何ぞ難陀

婆伽を煩はすの必要あらん。之れに由て想像するに、二十九年は金智入滅の年にして、百事多忙の故に、不空渡天發錫の際には、其準備未だ整はざるを以て托送する能はず。翌天寶一年、漸く準備完成せしを以て、難陀婆伽に托して送經せしなるべし。故に大村氏の説の如く二十九年の誤にはあらざるべし。序文に金剛三藏云々と記せしは、三藏入滅後と雖も、生存中此の事に關し助力あるを以て、金剛智名義の下に、千鉢經の梵本等を難陀婆伽に與へて、慧超の本師寶覺阿闍梨に送りしことを叙するなり。慧超再生し來るとも、我言を變ぜずと固く信じて疑はざる也と、取意。雷斧曰はく、我が眞言密教は、日本曹洞宗の一師印證なるが如くに非ず。緣に隨つて衆多の阿闍梨を拜投して傳法相承を爲すことを得。即ち不空三藏は、金剛智に隨つて兩部の灌頂を受くと雖も、金智入滅後、金智の遺命に従つて渡天して龍智に投じて法を受けしが如し。傳法の師、何ぞ一人に限らん。故に菩提三藏、龍智を拜して正しく兩部の秘種を傳ふと雖も、亦寶覺の名を聞き、摩賴耶と師子國は一衣帶水の故に、師子國に往き、寶覺に隨つて千鉢經を受けしならん。然るに此の經雜密にして、又以て傍傳なり。故に慧超に授くと雖も、正嫡の不空に授けず。不空

亦以て惠果に授けず。入唐八家請來せず。台東兩密共に傳授せざるなり。然るに千鉢經の序の本師寶覺の言を固執して、諸傳記等の説を抹殺して、金剛智の師は龍智に非ずと斷じて、龍智の實在を疑ふは屈見と云ふべし。又大村氏、龍智菩薩の實在を否定するに就いて、有人加藤精神師評して曰はく、大村君が寶覺と云ふ珍らしき人を發見してより、龍智の實在を否定して、歴史より削除せんと企つと雖も、否定し得べからず。何となれば、金剛智三藏が龍智菩薩を以て傳法の師と爲すことは、既に趙遷の不空三藏行狀記、嚴郢の同三藏の影讚及び碑銘序文、逸人混倫翁の金剛智の塔銘、呂向の同三藏行狀記等に記せり。大村氏は此等の書に對して、檢金剛智及其弟子不空之所親筆錄、未曾有見之と、評して、信ずるに足らずと云ふと雖も、之れ等の文章は、不空三藏勢力旺盛時代の選なり。若し架空の妄誕なりせば、不空三藏豈默すべけん耶。行狀記、碑文等は、不空三藏の承認を得しは明かなり。故に門人等の筆記と雖も、三藏の親録に敢て異なる事なし。故に龍智の實在を否定し得べからず。又金剛智三藏の遺弟等が、師の眞實の恩師たる寶覺を隱匿して、強て龍智の名を捏造する必要は何れの處にある歟。然るに金剛智三

藏の遺弟等が特に龍智の僞人名を虚構して、我が師の塔銘に之れを刻し、其行狀記を録するが如きは愚の至りと云ふべし。常識を以て斷案を爲さば、斯の如きの事あるべからざるなり。故に余は、金剛智受灌の師は龍智と確信する者なりと。私に云はく、大村氏は千鉢經及び序文の僞作なることを看破すること能はざる故に、斯の誤解を爲すなり。

若し寶覺閣梨が實在の人にして、眞實に金剛智三藏の本師ならば、不空三藏は其血脈を相承せられたるは無論なり。然るは順曉阿闍梨が傳教大師に授けられたる血脈に由つて考ふるに、何が故に不空三藏は順曉阿闍梨に授くる血脈に、寶覺を記せずして、龍智菩薩を録せられたる乎。又入唐八家相承血脈、何故に龍智を記して、寶覺を擧示せざる乎。海雲造玄の血脈も亦然り。是の故に、寶覺の存在は實に疑ふべきなり。彼の千鉢經の序文、後人の妄作にあらざれば、慧超は既に金剛智不空入寂の年月を忘却する程迄に老耄せしなれば、耄六して龍智を忘了して寶覺と記せしやも知るべからず、呵々。

空海付法傳荒唐無稽

空海付法傳云。龍智阿闍梨耶。卽龍猛菩薩付法之上足也。位登聖地。神力難思。德被五天。名薰十方。上天入地。無碍自在。或住南天竺。弘法利人。或遊師子國。勸接有緣。又云。貞元二十二年。於長安醴泉寺。開般若三藏。及牟尼室利三藏。南天婆羅門等說。是龍智阿闍梨。今見在南天竺國。傳授祕密法等。付法傳更引慈恩傳云。磔迦國老婆羅門。自稱龍猛弟子。年既七百。以爲其證。且據曰。玄奘就之停一月。以學百論。遂云。玄奘三藏亦是龍智菩薩之弟子也。如是諸說。皆荒唐無稽。固不足信憑。其誇張年齡。以銜神異。蓋亦印度之惡風耳。若夫龍智實有其人。且果爲龍猛之資。則其出世正可在晉代。豈能得爲盛唐時金剛智之師哉。若果爲金剛智之師。則縱令長壽異常。能保百歲。其生應在隋末。何以得云親受法於三國之龍猛乎。至若磔迦者。北天一小國。與南天駱那羯磔迦國。宛如秦越。空海不曉地理。而混同之耶。或有所爲而曲會耶。其老婆羅門者。已非比丘。且若果爲龍智。則所謂德被五天。名薰十方者。玄奘何有不記其名乎。評して曰はく、慈恩傳の説、貞元録の龍猛弟子龍智年七百歳と云ふに、其年齡同じき

故に之れを引證して龍智と爲すに何の問かあらん。但し南北磔迦國の異に至つては、慈恩傳敢て誤謬なきの書に非ず。或は南方磔迦を誤つて、北方と爲せしやも知るべからず。又南方磔迦の龍智も、北方磔迦に往來することなきに非ざるべし。故に敢て地理を曉らずして之れを混同するに非ず。又曲會にあらざるなり。老婆羅門と云ふは、龍智の姓婆羅門歟。其の名を記せざるは、龍猛弟子七百歳と云へば自ら龍智なることを知るを得るを以てなり。其の國の南北相違と、不記名とを以て、慈恩傳の老婆羅門は、龍智に非ずと爲すは、理由頗る薄弱なるもの歟。

金善互授

金剛智來唐後。與善無畏互授受其法。大日經傳法次第記云。無畏三藏和尚復將此大毘盧遮那大教王。付南天竺國金剛智三藏。金剛智復將金剛界大教王。授三藏善無畏。互爲阿闍梨。遞相傳授。又金剛界傳法次第記云。金剛智知中天竺無畏三藏。解大毘盧遮那教。歎言。此法甚深。難逢難遇。昔於南天竺國。聞有大毘盧遮那胎藏名。遂遊五天訪求。都無解者。今至大唐。喜遇此法。遂請無畏三藏。求授大毘盧遮那大教。互爲師資。傳授

二本大教。蓋胎藏法。以掬多化寂。無畏東來。遂不宜于五天。而無畏之後。不聞有復傳之者。却依無畏東來。獨行于唐。所謂金善互授之大事。即兩部一具流傳之濫觴也。雖東密不取之。血脈則以金剛智以下爲傳兩部。蓋海雲必有所據。豈妄意記之耶。故圓珍亦曰。至于薦福。互相授之。無畏在印度。不傳金剛頂宗者。由其無金剛名明矣。雖金剛智遊于那爛陀寺。不傳胎藏法。由其傳記可以徵之。而謂學毘盧遮那總持陀羅尼門於南天者。是非必付大日經。以金剛頂亦爲毘盧遮那所說也。智撰大日經念誦法。蓋在互授之後。較諸無畏所出供養法。殆全相同。亦猶無畏所傳五部心觀。依智所譯略出經耳。若徵金善互授事。則不空亦應守其師籙。傳金剛頂一法而已。兩部由來各別。元非以相關之理作之者。各以其法。獨爲唯一速證成佛道。如前既所述。然而兩部兼傳者。則實於支那啓其端矣。

評して曰はく、金善互授の事、金智は不空に語らず、不空は惠果に示さず、惠果は高祖大師に説かざる故に、付法傳等に於て之れを説かざるなり。高祖唐元和元年、飯朝後二十九年を経て、文宗帝大和八年十月、淨住寺海雲の撰する所の兩部傳法次第記に於て、始て之れを掲ぐと雖も、無畏、金智兩三藏の傳並に行狀記、碑文等に會て未だ

見ざる所なり。海雲妄推憶説更に依憑なし。然るに蓋海雲必有所據。豈妄意記之耶。と云ふは何ぞ乎。若し所據あらば、明に之を舉示せよ。海雲の兩部傳法次第記は、誤失頗る多し。今其二三を示さば、一は無畏三藏來唐年記の誤失なり。海雲胎藏次第記に云はく、無畏七年從西國、將大毗盧遮那梵因經等來至此國と。然るに開元錄第九、貞元錄第十四、高僧傳第二等、皆同じく無畏三藏開元四年來唐云々。二は、大日經翻譯年紀の誤失なり。同次第記に云はく、開元七年釋迦沙門三藏善無畏奉詔譯沙門一行筆授と。然るに開元、貞元兩錄、及び高僧傳等亦同じく開元十二年入洛後大毗盧遮那經を翻譯す。即ち十三年正しく譯經の年なり。故に開元七年と云ふは大なる誤失なり。三は、金剛智の種姓の誤失なり。海雲金剛界次第記に云はく、金剛智三藏乃至南天竺國王第三子と貞元錄第十四等本志の説の如し。無畏三藏入寂後、開元二十三年より大和八年に至つて、九十八年を過ぎ、金剛智三藏入滅後、開元二十九年より大和八年に至つて九十二年を経たり。其間に於て展轉傳聞の誤謬自らなかるべきに非ず。海雲之れを看破するの識見なく、加ふるに憶談を以てす、信ずるに足らざるなり。若し志主の論録に倣つて之れを破さば、金善互授

の事、兩三藏の親しく筆録する所に見ること有るに非ざる故に信を措くに足らざるなり。求開持法は、金剛頂部に屬す。然るに無畏三藏は、金剛智來唐以前に於て、之れを譯す。是れ善無畏既に印度に在りて、金剛頂部を相承するの確證なり。大村氏は、無畏其或先至那爛陀、而得諸南天海濱者耶と云ふと雖も、密教は傳承に非ざれば翻譯不可能なるを如何。又菩提三藏、印度に於て兩部傳承は、貞元錄第十四を以て其證と爲すべし。毗盧遮那惣持陀羅尼法門と云ふは、大日經を指すに非ずして何ぞ耶。然るに志主會通に窮して、是非必斥大日經、以金剛頂亦爲毗盧遮那所説也、と云ふと雖も、及の字の起盡、金剛頂部と相違の法門なることを顯すこと分明なり。假令支那に於て互授の事ありと爲すも、末徒の疑問を散ぜんが爲の一時の善巧の方便なる耳。虛心にして書を読むべし。故に所謂金善互授之大事、即兩部一具流傳之濫觴也、とは誤解と云ふべし。又胎藏大日經は、直往頓悟の機の爲に説き、金剛頂經は從顯入密、迂廻漸悟機の爲に説く。故に表面に約すれば、兩部各自建立にして、由來各別なるは、志主の説の如し。然りと雖も、其裏面に於ては自然に相關するの理あり。何となれば、胎藏法は、理曼荼羅の故に、蓮華を以て標幟となす。金剛界

は、智曼荼羅の故に、月輪を以て標幟となす。此所證の理と、彼の能證の智と、自然に融會し、此能證の智と、所證の理と、法爾に融涉して、圓融無碍なるを以て、相關の理あるは掌文を見るが如し。故に大日經には、八心三劫十地の智相を説き、金剛頂經には、三十七尊本有の理相を説く。然るを若し永く相關するの理なしと云はゞ、三乘權教に落在して、却つて佛華法華に降ること數等なり。佛教の眞髓たる密教豈此理あらん耶。又善無畏、金剛名號を稱ぜざるを以て、無畏印度に於て金剛頂を傳へざるの理由と爲すと雖も、有人(加藤精神師)駁して曰はく、大村君の遍照無礙金剛や、弘法大師の遍照金剛や、大廣智三藏の不空金剛の如く、盛に金剛名號を振り回す人もありますが、又一向に金剛名號を呼ばない一行禪師の如き人もありますから、無畏三藏が之れを呼ばぬと云ふことだけを以て、直に印度にて金剛界を受けぬと云ふ證據にはならぬと。

金剛智譯經傳法

金剛智所譯經軌。上記之外尙頗多。然貞元錄及續錄皆不載。蓋或可疑焉。金剛頂略出

經。謂就其大經本抄譯。間似有以譯者之意所補綴。如初分所說金剛頂宗持誦通則。及處處標記論曰二字者。則非智之所自述。而何哉。故云。我今於百千頌中略說。經首說入金剛界大壇場者。不應簡擇器非器。入外道諸天神廟。惡趣壇場者。亦堪入。次舉起。行住語。洗面。嚼楊枝。洗淨入廁等語。印明。說如來金剛寶蓮華羯磨五部種子。四種法。誦呪四方。四種坐。四種眼。降伏密語。加句。入三摩地法。觀想法。又說其曼荼羅觀。有五部主。五方五種座。五部主外。有十六大菩薩。四波羅蜜。內外四供養。四攝守門菩薩。三十六尊皆從大日如來身中而出現。各想滿月形中坐蓮華座。以上殆是譯者所述。次金剛界如來始說經。十六大菩薩以下諸尊出生。金剛名及密語。至茲乃得曉知。五部眷屬各有四菩薩。內四供養。即喜愛密寶鬘。歌詠舞菩薩。外四供養。即香華燈光明塗香菩薩。四受教者。即鈎。絹索。鈎鎖。攝入菩薩。是次說月輪相。即爲所謂五相成身觀。壇場四肘。以八柱莊嚴大圓輪。縱橫三分爲五月輪。五月輪內。畫五佛及其眷屬。大日及四波羅蜜菩薩在中輪。四面月輪內。畫四佛及十六大菩薩。大圓輪四隅。畫內四供養菩薩。外壇四角線道中。置外四供養菩薩。四面置四攝守門者。彩繪五色。以配五種如來智。又有畫印法。外壇門間。畫千菩薩。或十六尊。更外壇畫諸天。或唯畫印。或唯書名。是即金剛界大曼荼羅。如是布置。

已。先住波折羅。吽迦羅。瑜伽。次結誦開門請會。諸尊諸尊三摩耶。十六大供養。九供養。六波羅蜜。獻食。施諸天鬼神等印明。即是金剛界法所作。終說灌頂法。其事相。先令弟子禮師。懺悔。歸依三寶。發菩提心。繫線索於其左臂。加塗香於其掌中。授華。以香爐熏雙手。與燈。令視之。以華供養諸尊。嚼齒木。擲之以卜部。占夢。服牛五種味。與袈裟著之。以赤帛掩其眼。掛針印以華鬘。而引入壇場。告已入。如來眷屬部中。不應向未入壇。入說此法事。若說則其頭應破裂。授印明。而告以其不久當證得諸佛真實智慧。令擲所掛鬘於壇中。依其所著處。念誦其部密語。遍示壇中諸部事相。次於別壇與灌頂。其水瓶。取鬘所著部。次與五股金剛杵。於弟子本名上。加金剛字以呼之。若是餘部。則或加寶珠蓮華等。更執小金剛杵。加持弟子之眼。收取所與五股杵。更與法螺。告應轉法輪。引起至大壇前。爲說三摩耶。復與五股杵。說偈獎勸之。次爲除弟子災行護摩。經中密語。皆起于唵字。多結以種子字。上無歸命佛陀之句。下無娑縛訶之語。此經乃爲金剛頂部本經初出。其說之者爲毘盧遮那佛。所教爲即身成佛之作法。亦是純密之一宗也。金剛智之譯出此經。與立壇灌頂相待。而金剛頂法始備于唐土。先有善無畏胎藏法。於是兩部具足矣。然此經所說曼荼羅。猶是一會耳。未具餘五會。即後所謂成身會也。其變化則唯說字印二曼荼羅。蓋

爲金剛頂經初稿。此經亦復稱有百千頌。廣本經中所云。既出于上。所謂鐵塔中有無量頌大經本。龍猛書寫爲百千頌之說。已辯其妄。故今不復贅焉。金剛頂經義訣中。錄金剛智之言云。我從西國發來。度於南國。其有大船三十餘隻。一一皆有五六百人。一時同過大海。行至海中。逢於大風。諸船及人。竝皆漂沒。我所附船。亦欲將沒。爾時兩本經夾。常近於身。受持供養。其時船主見船欲沒。船上諸物。皆擲海中。當時怖懼。忘收經夾。其百千頌亦擲海中。唯存略本。是事亦不足取耳。金剛智既發師子國。僅經一月而至佛逝。其間竟無風浪難。自發佛逝後。不幸多難。三年而始達廣府。是時不空既從佛逝。隨智共泛海。若果爲有經夾漂沒之難。則不空亦同其厄者。然而未曾自語之何也。義訣固非不空之撰。依其首文。瞭然。蓋智之徒所作。浪錄此荒唐之談。猶不空之徒所作三十七尊出生義之類耳。但不空所錄陀羅尼門諸部要目。云。瑜伽本經都十萬偈。海雲金剛界傳法次第記云。此經梵本十萬偈。略本四萬偈。廣本則有無量百千俱。祇那度多微塵數偈。且襲用義訣談。以爲十萬偈本。漂沒四萬偈本。獨傳于唐土。然金剛智所費本。決非抄略十萬頌。以爲斯四卷經原本。何以言之。所謂十萬頌本者。即稱有十八會。若平分之。則一會可約五千五百頌。故十八會指歸云。金剛頂瑜伽經。有十萬偈十八會。又云。瑜伽教十八會。或四

千頌。或五千頌。或七千頌。都成十萬頌。其金剛智及不空所譯出者。乃初會四大品中之金剛界一品而已。若以五千五百頌。平分于各品。則可凡一千四百頌。縱令此一會爲七千頌。亦一品不滿於二千頌。以是推之。所略極少。或殆無所省。却似有所補綴焉。且換語言之。則非抄譯略本。而一品全譯也。所謂大本。廣本者。元非可有而真無之也。今依指歸而列。舉十八會。則初會一切如來真實攝大乘現證大教王。第二一切如來祕密主瑜伽第三一切如來教集瑜伽。第四降三世金剛瑜伽。第五世間出世間金剛瑜伽。第六大安樂不空三昧耶真實瑜伽。第七普賢瑜伽。第八勝初瑜伽。第九一切佛集會擊吉尼戒網瑜伽。第十大三昧耶瑜伽。第十一大乘現證瑜伽。第十二三昧耶最勝瑜伽。第十三大三昧耶真實瑜伽。第十四如來三昧耶真實瑜伽。第十五祕密集會瑜伽。第十六無二平等瑜伽。第十七如虛空瑜伽。第十八金剛寶冠瑜伽。是也。而大日經疏所引分別積品者。終不知在何會。所謂初會四品。金剛界品外。有降三世。徧調伏一切義成就三品。金剛界品說大陀羅尼微細金剛供養羯磨。四印。一印六曼茶羅。然金剛智譯本。唯說大曼茶羅及印字二曼茶羅。頗類於雜密及胎藏曼茶羅法。是所以其爲初稿。指歸蓋係不空譯大教王經原本作後之撰。故具六曼變化如是耳。指歸更謂降三世品亦有六曼茶羅。說降伏

摩醯首羅及五類天。又爲外金剛部衆。說四種教勅曼荼羅。徧調伏品。三十七尊。皆爲蓮華部觀音之變化。一切義成就品。說寶部諸法。其諸尊爲虛空藏變化。二品亦各有六曼荼羅。尙餘諸會。各有數品。皆說種種曼荼羅。各具三十七尊。而互相涉入如帝網云。夫金剛頂經。果有如是浩瀚者耶。我密家就空海請來九會金剛界曼荼羅。及諸經軌等。談十八會相攝。輒以爲其傳譯不備。然不空再求法於南天。新齊經譯之。而遂不及於出降三世品以下。般若所得於烏茶國。而譯亦爲然。趙宋新譯。亦復止初會四品。至餘十七會。則經軌中終不有緊符于指歸所說者。由是思之。蓋指歸者。卽不過豫定編述目錄而已。初會初品。先成于武周。乃至盛唐初。金剛智乃贊其初稿。不空乃傳其再稿。般若乃得其三稿。更至宋初。四品漸備。以成施護譯三十卷經。至第二會以下。普賢勝初般若理趣諸經軌中。區區畫片鱗隻甲。未成蛟龍全身而止耳。縱令見全部結集。所說徒多重複。率如指歸所示。四曼六曼。粗同變化之趣。若夫數百曼荼羅。紛淆繁雜。於理果有何所益耶。畢竟金剛頂經者。唯一金剛界品而足矣。故以金剛智不空般若等諸先德譯之。不敢及於他耳。且金剛界曼荼羅者。亦唯一成身會而足矣。故以我圓仁傳一會曼荼羅。台密于今依用之。獨三昧流與寺門派。側不然耳。寬平法皇南室所懸。亦爲一會曼荼羅。但圓仁所傳。

五部諸尊皆有乘御。乃本略出經。寬平法皇所用。蓋與此不同。則空海所傳本。想是依不空譯大教王經者歟。至餘諸會。則以一會之變化敷衍視之。亦不妨也。金剛智所譯。雖此經初稿。既說結金剛愛欲契。自身染著金剛妻。斯思想入理趣釋。則爲那囉那哩娛樂比喻。說二根交會。五塵成大佛事。入瑜祇經。則爲五秘密瑜伽觀。如第十五會。蓋專說之。縱令要隱說密示。何爲必假世間貪染相應語乎。其遂至生西藏喇嘛教。及我理趣末釋邪義。竝立川玄旨。歸命等邪流。以擬求道於行淫裡。其陋弊汚風。可謂亦甚矣。欲不慨豈其得乎哉。但金剛頂經中斯種會品。未多成于唐時。或雖梵本既成。未多傳譯。故我八家相承。概無邪法。後來宋譯。有經而不傳法。我密家皆束諸高閣。弊害所及。纔止於立川等。是爲日本密教可慶也。西藏喇嘛。分佛教爲九乘。小者三。曰聲聞。緣覺。菩薩乘。中者三。曰作修瑜伽祕經。大者亦三。曰生無量心。成就大成就祕經。卽無上瑜伽是也。蓋其所謂小者。卽是顯教。作修二經。當此方雜密及蘇悉地。瑜伽固爲金剛頂宗。無上瑜伽者。乃喇嘛邪教也。金剛頂經出之後。教風墮落。遂以產此邪教耳。抑金剛頂法者。蓋成于南天烏茶摩賴耶師子等國。想實覺阿闍梨成其先聲。與大日經成于中天摩揭陀國那爛陀寺不同。其事教兩相。所以大異於胎藏法。實在乎茲。今以是對視前出諸經。其所由來之系統。專

在南天所出心地觀。及菩提流志譯諸經。其道場觀。夙發萌芽於心地觀經。至三十卷羅索經而大發達。瑜伽觀法之名。出于如意輪經。其向上之極。遂爲五相成身觀。以大日爲中尊者。本于羅索經神變解脫壇。阿闍寶生彌陀世間王四佛。竝其方位。出於同經廣大解脫壇。但世間王之名。此經改爲不空成就耳。胎藏無阿闍寶生不空成就。而立鼓音寶幢開敷華。除彌陀外。方位皆異。蓋彌陀之在西方。夙爲顯教諸契經定說。不可動之。故然。我密家強立旋轉。不旋轉說。欲以會融。同視兩部三佛。是從其必兩部不二而來之弊也。大日經疏。受於無畏。而辯鼓音非阿闍。與瑜伽宗其義別。其奈爲胎法第二祖不磨之說。何。曼荼羅月輪內畫諸尊。未多見之於前出諸經。全爲金剛頂法之新觀。是此宗以最置重於瑜伽。直圖瑜伽中所觀相也。乃爲密教新出一大異部。五佛皆有乘御。亦不同於胎藏。乘御梵言縛訶那。座乃梵言阿婆那。如金剛界五佛之師子象馬孔雀金翅鳥。則似乘御而非座。蓋仿婆羅門教諸神皆有縛訶那也。善無畏五部心觀。及台密一會曼荼羅。五部諸尊皆有乘御者。乃出於此。諸尊部族。胎藏三部外。更立寶羯二部。其寶部出於三十卷羅索經。及蘇婆呼經之摩尼部。首楞嚴經之寶部。至羯磨部。則前出諸經絕無其例。若強求之。則如蘇婆呼經之般支迦部。首楞嚴經之衆族者。是耶衆族者。蓋謂外金剛諸天

部。雜密夙有之。又蘇悉地有辦事。大日經等有使者。乃取於是等意。立奉事作業之一部。名曰羯磨。以不空成就與釋迦同視。因其化他事業。立爲此部主耳。雜密及胎藏三部諸尊。其數甚多。雖稱大日流現。素自有所由來。部別亦因此而起。至金剛界五部則不然。其尊數既極少。且其諸尊皆出於佛教。但爲標幟教理。從大日流出之耳。蓋純依外典伊溼伐羅祇多等。以諸神萬物。盡爲伊溼伐羅化現之意。新立之。然以從前三部意分之。則應攝于佛部也。殆似無特立部別之用。與胎藏先有諸尊。而後以部統之不同。我密家談三部五部開合。以胎藏虛空藏院當于寶部。以釋迦院當于羯磨部。固不免爲兩部相對之附會矣。金剛界所立部主。亦異於雜密蘇悉地胎藏。以五佛直充之。其意蓋以大日爲諸佛上首。乃擬以爲佛部主。阿闍以其名通於金剛之義。不空成就以其名通於事業之義。寶生以其名與寶部相似。彌陀以其侍者觀音。從來爲蓮華部主。故各立以爲其部主。更以五智配五部。以令曼荼羅所詮教理。富瞻且深高。然而胎法之所不談。十六大菩薩中。除普賢虛空藏觀音文殊轉法輪。其餘皆胎法所無。而共四波羅蜜。八供養。竝係此宗新創也。且普賢等五菩薩。常呼以其金剛名。終至遺忘其爲普賢等。賢劫十六尊中。香象智幢無量光辯積四尊。亦未曾入從前諸曼荼羅。諸尊有金剛名。灌頂弟子授金剛名。是

則金剛頂宗特徵。而爲胎藏所無。但三十卷羅索經。說授灌頂名號。此宗金剛名。蓋出於此。亦可以證此法屬南天系統之發達也。曼荼羅方位。中尊向東。故西方爲上。是從來所罕見。正與雜密胎藏相反。授金剛名之外。灌頂作法。率似胎法。但傳授不簡器。而爲向未入壇者。令守祕密戒之甚嚴。與弟子唯以五股金剛杵。而不用金篋明鏡法輪。是乃所異於胎法。殊如以鈎召攝。以索引入。以鎖留住。以鈴鐸歡喜。雖兩部印明固不同。是等思想。全爲胎藏所闕者。降伏自在天。瑜伽亦然。其手指異名。大日經宗用定慧五輪。此宗則用止觀二羽。十波羅蜜。分諸天於五類。亦爲胎藏宗所不談。唯息災等四種法。雖出於三十卷羅索經。偶與胎法相同而已。勅令之思想。在金剛智譯略出經。則未顯著。所以兩部相異如是太甚者。職由南北系統全別而已。不啻爾。胎藏之所由來甚遠。反之。金剛頂法。殆突如勃興。其所以稱鐵塔相承者。蓋在欲假託以古其貌矣。是宗又置重於瑜伽。如所既述。故其經軌名。多附以瑜伽之字。所謂瑜伽。與大乘瑜伽中觀之瑜伽不同。却本於印度教之瑜伽。其瑜伽元出於僧伽。昔波耽惹利仙唱之。入三摩地。以求與伊溼伐羅同化。伊溼伐羅者。卽宇宙最勝最上最大靈體也。爲萬物之本源。伊溼伐羅祇多云。伊溼伐羅曰。我能與汝本性神祕不滅。智人若一得之。則能超生滅之際。夫靈體者。清淨潔白。不爲物

所侵。目亦不可視之。其現相也。乃爲原人。玄化。又爲摩醯首羅及迦羅。宇宙依是以成。又依是以滅。是卽摩耶也。無量萬象。乃摩耶幻化之靈體。不自造之也。靈體之爲性。不爲他所造。非地。非海。非火。非氣。無色。聲。香味。觸。又無手足等。不自動。不受他動。又非直是原人。玄化摩耶之謂也。是以最上靈體。與其所生幻象異。猶心生妄想。水影離物。宇宙萬物。變幻無窮。是皆爲靈體之現象。而其真性。乃一。譬如玻璃餅。插紅花。則其色赤。而透明依然。不染不易。是故。欲得最終至福。則不可不證靈體真性。信仰堅固。思念深厚。以修得真性。輒能脫摩耶之縛。此智唯能救拔世間苦患。人若得之者。卽與靈體等。猶河水注大海。自能達神境。恆絕妄想。能現真性。只其抵是者。獨在僧伽瑜伽之教矣。應知密教大日如來。殆僧伽之伊溼伐羅也。乃以三十六尊。爲皆從大日出生。故大日經疏述其義云。瑜伽中云。毘盧遮那言。我卽是文殊。觀音等。我卽是天。卽是人。卽是鬼神。卽是龍鳥。如是等無。不卽是者。其言語道斷。故。總之。唯以唵一語。瑜伽之法。有七。曰夜摩。曰彌夜摩。曰阿婆那。曰鉢羅捺炎摩。曰鉢羅底也。訶羅。曰禪那。曰三摩地是也。蓋與佛教觀法互相影響。以至於是。溼縛派中。有主行之者。是謂瑜祇。其一派有耽咀利迦者。專歸依溼縛之鑠乞底。而耽咀利迦又有左右二派。左派特崇拜突迦化身神性猛烈者。依耽咀羅以行五摩事。五摩

事者。卽酒肉魚供養。結印及二根交會是也。五事作法各有五支。以次第行之。以一女子擬爲鑠乞底。供養之酒肉魚。行者自爲溼縛化身。誦呪結印。而與其女子交會。深恭敬女根。御法窮猥褻。於行淫中。乃入瑜伽。蓋實證煩惱卽菩提於其間。由以欲與神同化也。以故。此派極秘密其法。溼縛及突迦異名。有瑜伽那陀。瑜伽彌羅耶。瑜祇溼伐羅。瑜伽摩耶。瑜伽彌陀羅。瑜祇尼等之目。乃由其爲瑜伽派主神。而此派所流行。主在南天東部濱海。蓋以烏茶摩賴耶爲其本。烏茶國今所存黑塔。祀日天。其柱壁滿面。彫刻行淫神人。醜不堪見。擲枳陀國亦屬南印度境。其大天祠亦然。並爲耽咀羅派遺物。金剛頂法諸真言。皆以唵字爲起首。異於胎法置歸命一切如來句。守秘密嚴於胎法。往往含淫猥邪義。且其成立在南天。並莫不足徵。與此派有關紐焉。金剛智從摩賴耶來。而出金剛頂經。不空至師子國再傳之。般若往烏茶亦受此法。以譯攝真實經。闍婆密教諸像。作風酷似烏茶。是豈偶然哉。於是。再比照胎金兩部。胎藏者。其曼荼羅。在來佛教所崇之外。網羅當時所有外道各派諸尊。不敢偏一派。又未曾建立從前所無者。反之。金剛界者。除其外部。三十六尊。多係從大日所新出生。而其教法根源。專在瑜伽派。前者乃以包容煦育爲旨。故曼荼羅名胎藏。悲生。綜該宇宙。而不故立界。弘法以引入誘化。後者則以堅固摧破爲主。故

其法名金剛。其曼荼羅云界。是自樹異而設城府者。若有不逞徒。則將教勅之降伏之。所以金剛手拆伏大自在天極殘酷。三輪身之說亦因是出也。蓋或夙蒙同教影響者歟。然而胎法之成。由自然發達。金界之出。本作爲新匠。概之。彼具溫柔敦厚之趣。此含猛利峻峭之氣。後年胎風不振。中天密教。盡化歸金剛頂宗。則一能攝受他。一勢力熾烈之所致耳。但金剛頂得於瑜伽派。而不能擺脫其邪義。終以招腐敗滅絕。是可哀焉耳。抑南北人情之相違。有於印度特甚者。玄奘連記東南諸國人情。與中天不同。乃云三摩咀吒國人性剛烈。耽摩栗底國風俗躁烈。人性剛勇。烏茶國風俗獷烈。恭御陀國風俗勇烈。羯餒伽國風俗躁暴。性多狽獷。憍薩羅國風俗剛猛。人性勇烈。案達羅國風俗猛暴。馱那羯磔迦國人性猛烈。珠利耶國風俗奸兇。人性獷烈。達羅毘茶國風俗勇烈。秣羅矩吒國志性剛烈。僧伽羅國人性獷烈。恭建那補羅國風俗躁烈。情性獷暴。是不啻風土之異使然。由來在南北異。其人種。昔者南人爲阿黎耶人所征服驅逐。其風氣至今尙險惡。不似中天人和熙悠揚。兩者所產密教。乃不得有別異也。以是胎法大日。結髮髻。住定印。以阿字爲種子。傳法祕印。用無所不至。金界大日。著寶冠。結拳印。以鍍字爲種子。傳法祕印。用外縛五結。終延以致令兩部。其東西方圓。理智因果。蓮華月輪。本有修生。三種四種。三部五部。

五輪五相九識五智乃至一法界與多法界從因至果與從果向因皆正相反亦是自然之數耳。而其正反處。即却有宜爲相對者。逮中唐以後。不二一具之見興。其爲無所由乎。評して曰はく。次於別壇の註に。四隅畫金剛杵と云ふは誤り歟。略出經第四云く。次與弟子灌頂。其灌頂壇應在大壇帝釋天方門外。下至二肘。畫粉任作。四方正等。面開一門。於四隅內。畫執仗折囉像。自在天方。名住無戲論。火天方角。名虛空無垢。羅刹方。名清淨眼。風天方。名持種々綺麗衣。又次の畫像壇等の註は。略出經第四の文即正覺壇曼荼羅に大三兩種を明す註なり。又經は法螺の前に明鏡を授け。復五股杵を授く。次に護摩の前に於て。灌頂の秘明密印を授くるあり。志主偶然之れを誤脱する乎。義訣固非不空之撰。依其首文瞭然と云ふ。其首文とは何れの文を指す乎。義訣は不空。金剛智の口説を受け。且つ其實況を見て。之れを記す。敢て自語に異らず。何ぞ未曾自語之と之れを疑はん耶。假令金剛智の徒之れを作るとも。金智不空。之れを見ざるの理なし。又金智歿後の作と爲すとも。不空は必ず之れを見るべし。浪りに荒唐の談を録せば。不空不問に附す可らず。豈之れを許容せん耶。若し自語せざるを以て其人の撰に非ずと云はく。略出經は金智の初稿と云ふ可らず。教王經は不空

の撰と云ふ可らず。自語せざるを以ての故に。此れは自語せざるを以ての故に。其の人の撰に非ず。彼れは自語せずと雖も。其人の撰なりとは。彼此の異因不可得にあらず耶如何。三十七尊出生義に附きては。更に之れを論ずべし。又十萬偈を以て十八會に平分して。初會大教王會を五千頌。或は七千頌として。之れを以て金剛界品等の四品に平分して。其一品が二千頌に満たざるを以て。略出經は抄譯の略本にあらず。而も一品全譯なりと云ふは。推測の憶談。誰れ人か之れを信ぜん。且らく初會の四品に就いて之れを云ふも。頌數豈必ず均等ならん耶。又金剛智三藏略出にあらずるを何ぞ略出と題せん耶。又兩部大經の大本廣本を論じて。然既謂廣本不到此土。無行所傳固非廣本。無畏豈能暗記十萬偈。若能暗誦之。則何待無行將來本。本始譯之耶。五百多羅尊。千二百頌。三昧耶釋等。不足必信憑。是特不須言耳。蓋仿華嚴。以街教法曠殿而已。又所謂大本廣本元非可有。而真無之也。然るに無畏。金智。不空の三師は。得瑜伽の大阿闍梨なり。而して人天の大導師たり。誰か之を疑はん。豈謂れなく人天を訛惑することあらん耶。志主は。無畏三藏の得瑜伽を信ずるや否や。若し之れを信せば。大本廣本の實在を信すべきなり。大日經住心品の疏に云

はく、阿闍梨云。毘盧遮那大本有十萬偈等と。無畏何の必用ありて正嫡の一行を欺かん耶。又貞元錄第十六に云はく、太曆九年示有微疾制使勞問。天降名醫針藥相仍曉夕繼至。疾將未損乃至不空幸過中壽未爲天逝。且以往時越度南海周遊五天尋其未聞集其未解。所得金剛頂瑜伽十萬頌諸部真言及經論等五十餘萬頌。冀總翻譯少答國恩。何夙願之未終。忽生涯之已盡。此不空所以爲恨也。乃至伏願哀愍臨終之一言。乃至臨紙涕泣悲淚交流。永辭聖代不勝戀慕之至。乃至太曆九年六月十五日不空上表と。不空三藏亦何の必用ありて。臨末の際に虛偽の言を以て陛下を欺訛し奉らん耶。又略出經は大印字の三曼茶を説きて、羯四一の三曼を説かざる故に、金剛頂經の初稿と爲し、十八會指歸は、六曼茶を具するを以て、不空大教王經作後の撰と爲すは、密教の教義に暗きを以てなり。何となれば、羯磨は通三の故に、大三法の三曼に於て、既に具足せり。此四曼を綜合すれば、即ち四印會、此四印を以て毘盧遮那に歸入すれば、即ち一印會なり。開合の不同知るべし。足らざるを以て初稿と見るは開合深旨の知らざる誤なり。又志主、大日經者、達磨掬多等所撰、金剛頂經者、寶覺爲緒、金剛智不空作之と。果して然らば、兩部大經は、佛説にあらず、人作の僞經なり。僞經

豈法驗威力あらん耶。志主は、徹底的、密教を破壊せんと欲する欺、謗法の罪怖るべし。十八會指歸を以て、不過豫定編述目錄と、自ら大本の實在を疑ふて、虛妄の憶談を爲す、不空臨末、聖上に對し奉りて尙之れを奏して泣く、之れをも信ず可らずと云はく、亦何をか信ぜん。嗚呼、又至餘十七會、則經軌中、終不有緊符于指歸所說者とは、相承の師口を得ずして濫りに儀軌等を讀む所以なり。十八會の初會の四品中、金剛界品は、五相成身の佛身に於て、六曼茶を説き、降三世品は、教令輪身に於ては、六曼茶を説き、徧調伏品は、觀音の大悲身に於て、六曼茶を説き、一切義成就品は、虛空藏の福德聚身に於て、六曼茶を説く。四品同じく六曼茶を説くと雖も、其旨趣同じからず。況んや十八會所説の法門、各各不同なり。何ぞ畢竟金剛頂經者、唯一金剛界而足矣と云はん耶。金智不空、般若等の譯、敢て他に及ばざるは、唯金剛界品のみにして足る所以にあらず。翻譯の時機を得ざるを以てなり。又成身會は、五相成佛の大曼茶羅を説き、三昧耶會は、其三十七尊內證三摩地の曼茶羅を説き、微細會は、三十七尊各各三平等の眞理に住する曼茶羅を説く、諸佛三股金剛杵中に入住する其相微細なれば、微細會と云ふ。羯磨會は、三十七尊廣大供養の事業を説き、四印會は、前

四會融會不二の曼荼羅を説き、一印會は、四種曼荼惣じて一大法界身に歸するを説く。六曼の説相、同じと雖も、教理各殊なり。何ぞ亦唯一成身會而足矣と云はん耶。又九會と、一會との曼荼は、元來融會無碍なるを以て、故に掛け曼荼羅は、阿闍梨の意樂に随つて九會一會應に随つて之れを用ゆと雖も、壇上布置の曼荼羅は、台東兩密唯一會を用ゆるを以て前例と爲す。之れに就いて、大曼を用ゆるあり。又法曼、三曼を用ゆるあり。流に随つて一准ならず。圓仁亦九會を請來せり。案ずるに、一會の曼荼は、壇上布置の所用なるべし。九會を掛け、一會を敷きて、一、九不二の深旨を示すなり。亦一會は、投華に便なるを以てなり。此旨を知らずして、空海、圓仁、一會の曼荼を傳ふるを以て、唯成身一會而足と云ふは、誤解の甚しきなり。又密教は、四曼本有法爾實在を以て教理と爲す。是れ顯の兩一乘に勝る、所以なり。故に餘諸會不離無碍と云ふべし。成身會の變化敷衍とは云ふ可らず。是れ阿字諸法本不生の教相を理解せざるの誤なり。又略出經第三に、金剛愛菩薩の印契の功能を説きて云はく、由結金剛愛欲契故、設是金剛妻自身亦能染著と。又理趣釋に、那囉那哩娛樂の喩を取り、男女交會等と釋するは、且く世間男女娛樂の語を假るのみ。

略出經第三に云はく、是諸衆生多愛染色、諸佛復爲利益衆生故、隨彼染愛、以誠言願と。是則隨順隨轉對治門の意なり。一概に何爲必假等と云ふ可らず。更に本有門に就いて、嚴しく之れを論ずれば、則ち異性の染愛、悉く是れ本具の性徳にあらざるなし。暗に此深旨を示して、特に世間貪染相應の語を假る歟。胎藏法に、如來馬陰藏の印、眞言、虛空藏轉明妃印、眞言を説き、金剛頂蓮華部心軌に、大愆大樂不空身の印明を説く、其意解すべし。妄想す可らず。又兩部大經の事相、教相を論じて、大別異と爲すは、教相と説相と教理との差別を學習せざる故に、誤つて教相大別と認め、契明等の法體の不二を傳習せざる故に、名字の差別に拘泥して、事相大異と誤解せしなり。夫れ兩部大教は、併ら阿字本不生を以て教相と爲す。故に教相異なるにあらず、共に凡身即佛即身成佛の理を明す。故に教理亦同じ。但し其の説相は、大日經住心品には、八心三劫十地六無畏等の、行者心續生進修の相を説き、具緣品以下は、本志無畏傳の下に述ぶるが如く、灌頂の作法、各種の曼荼羅、六月念誦、五字嚴身、護摩等の觀行を説く。金剛頂經は、成三微供の四曼、三十七尊流現、五相成身、百八名讚造曼荼羅法、灌頂行事等を説く。故に説相は、異あり、同あり。又事相の觀門に至ては、

同じく淨菩提心正助の二觀を説く。故に敢て別異にあらず、契明に不同ありと雖も、法體同なるあり。如來鈎と、金剛鈎との如し。又塗香華鬘燒香燈明と、香華燈塗と等の如し。亦灌頂作法等、大に同じき故に、事相亦大別なるにあらず。自ら傳燈大阿闍梨位無障遍照金剛と稱する大村氏、徒に文字名相に拘泥して、不二の眞理を誤失する勿れ。又略出經所説の五佛の座の師子象等は、經に既に座と説く。何ぞ乘御に似たりと云はん耶。座は、非情にして、木等を以て造作する所、宜臺等の如し。乘御は、則ち有情にして、世の乘馬等の如し、混ずること勿れ。又兩部曼荼の差別を論じて、金剛界立五部雖統諸尊、以胎藏三部意分之、應攝佛部以新立佛菩薩、而大日所現故、似無特立部別之用、與胎藏先有諸尊而後立三部統之不同と。是れ恐らくは穩當を失するならん。何とならば、曼荼羅とは、輪圓具足の義なるは異論なし。若し金剛界曼荼羅にして、先來所有の宇宙間の一切を統攝せざれば、曼荼羅と名くるを得ん乎。曼荼羅は舉一全收を義とす。畫曼荼羅の尊數の多少を以て差別を論ずべきに非ざるなり。反問す、汝が執する胎藏曼荼の諸尊は權類とやせん、實類歟。大日經に依るに、胎藏曼荼の諸尊は、遮那の所流現なるを以て、總該して佛部に攝す

べし。豈特に三部を立つるの必用あらんや。若し遮那の所現と雖も、三部を立て之れを統攝するの必用ありと云はゞ、例するに、金剛界大日の所現と雖も、亦五部を立て之れを統攝するに何の問かあらん。若し胎藏曼荼の諸尊は先有の故に實類なりと云はゞ、大日經に於て、大日所現と説くを奈何。情々惟れば、胎藏曼荼は、因曼理曼の故に、諸佛菩薩、金剛天等、總じて先有の名字を以て之れを列し、金剛界會は、果曼智曼の故に、心王如來成正覺の時、塵沙の心數皆金剛界會に入つて等正覺を成じ、遮那の差別智印と成るの相を示すを以て、先來の名字を列せず。金剛某と名け嚴かに區劃を示す。胎藏大日は、因相を顯はす。故に髮髻冠を以てす。是れ此本有遮那に於て、修生顯得して佛果を成ずるの相は、金剛界大日の故に、五佛の寶冠を戴けり。本有の功德は、堅固にして、金剛の如くなるを表して、胎大日を金色と爲し、修生顯得の成佛尙凡身を改めざる義を示して、金大日を白色と爲すなり。是を以て、胎金の大日は、表面本有修生、因果を異にすと雖も、其法體は不二なり。四佛は、胎金の同體なること知るべし。普文、觀彌の四菩薩と、金界の四波と亦同體なり。胎の觀音院の諸尊を、金の西方の四親近の菩薩に攝し、胎の金剛手院の尊を、金の東方の

四親近に攝し、虛空藏院、地藏院を金の南方の四親近に攝し、遍知院、般若院を金の四波に攝し、除蓋院は、悲力同を以て西方の四親近に攝し、文殊院は、西方の利菩薩に之れを攝し、釋迦院悉地院は、北方の四親近に攝し、胎の外金剛部院を金の外金剛部二十天に攝す。又胎藏外三重の諸佛、菩薩を、金の賢劫千佛に於て之れを攝することを得べし。亦以て其同體なることを知るべし。斯の如く無礙に理解する者を傳燈大阿闍梨と稱すべきなり。又略出經に云はく於此大壇場、應入者、不應揀擇器非器と。是れ結緣灌頂を説きて傳法受明を説くにあらず。不空譯の大教王經亦爾り。然るを總じて一切の灌頂を説くと云ふは誤解なり。經文を披閱して知るべし。大日經具緣品に爲度無餘衆生界故、應當攝受無量衆生、作菩提種子因緣と、説くは器と非器とを揀ばざるの意にあらずして何ぞ耶。故に之れを以て、二經の別を辨ず可きに非ず。經に供養受者畢つて説きて云はく、應執小金剛杵子如治眼法と、次復執鏡令其觀照と、師應授以商法と、是れ次の如く金篋、明鏡法螺を説く。然るを而不用金篋、明鏡、法輪と云ふは偶然の誤りならん乎。又經に特に法輪を説かずと雖も、自今已後諸佛法輪應轉之と説くを以て之れを見れば文に於て之れを略すと

雖も、必ず法輪を授くることあるべきなり。又四攝の有無を以て胎金の不同と爲すと雖も、既に胎藏に如來鈎、如來索、金剛鎖の印明あり。又鈴鐸の印を説く。故に胎藏に鈎索鎖鈴なきに非ず、手指の名は、畢竟符號に過ぎず。兩部の別を辨ずるに足らず、又概論すべからず。手指の名は、畢竟符號に過ぎず。兩部の別を辨ずるに足らず、又胎藏之所由來甚遠、舊譯雜部密教等多以有類胎藏云爾と云はん乎。果して然らば舊來翻譯の雜部密教中に亦頗る金剛界に近きあり。何ぞ一概に、金剛界突如勃興と云はん耶。云ふべし胎藏法は、大悲中に於て智を論じ、金剛界は、大智中に於て悲を説くを差別とすと、引入誘化と、摧破堅固とを以て片々に之れを論ずるは兩部大經の眞意を得ざるなり。胎藏も亦、金剛界の如く、界を立てたり。具緣品に云はく、第二安立界と、已説初界域諸尊方位等と、次往第二院と、次至第三院と、又正中四方四隅を分つて遮那等の諸尊を配置す。是れ其分界を示すに非ずして何ぞ耶。先徳金剛界に准じて、胎藏界と稱す、亦宜なる乎。阿闍梨と、弟子と、修多羅を持して東方を首として南西北方に廻轉して界道を拏定す。是れ則ち故らに界を立てるに非ずや。然るを胎曼不故立界と云ふは如何。胎藏法の成る、若し自然發達ならば、何

を建立曼荼羅七日作壇の作法を要せん。若し金剛界曼荼羅は、作爲新匠ならば何ぞ作爲の法を説かざる。惟れば夫れ兩部曼荼羅は、自然發達の宇宙の一切法の上に於て、輪回具足、融會不二を開示するなり。中に於て、胎藏は理を以て本とし、金界は智を以て旨とす。是れ其差別なり。住心品に三十外道を降伏し、六十心を摧斷することを説き、具緣品に何耶揭利、婆忙、葬難、月壓怒、不動勝三世等の自の身命を顧みざる尊を説く。故に胎藏亦猛利峻峭の氣を含めり。略出經に云はく、十六大供養、普供養一切衆生と。又云はく、復應觀察盡生死中一切衆生苦惱所纏、深生哀感、我今爲救護故、發菩提心、是故若未度者、我當令度、未安慰者當令安慰、未涅槃者令得涅槃、及兩種々法隨彼所求皆令滿足と知るべし。金剛界亦溫柔敦厚の趣を具せり。然るを彼具溫柔敦厚之趣等と云ふは、唯是れ一片の感情にして敢て論ずるに足らざるなり。又金剛頂宗を評して、本於印度外道瑜伽と云ふは、本の字語弊あるに似たりと雖も、隨緣顯現の前には其義なきにあらず。何となれば佛の曼荼羅を説くは、印度外道の教を迷信する衆生に對して、隨順隨轉の方便を以て誘化して佛道に引入せんが爲なるを以てなり。大日經住心品に云はく、乃至說生摩臘羅佛法と、以て知

知るべし。然り而して兩部大經は、南印度に起ると雖も、大日經は無畏三藏に依つて中天に流傳し、金剛頂は金剛智に依つて盛に南天に行はる、是れ則ち彼の瑜伽に准じて以て曼荼羅を建立する、敢て怪むに足らざるなり。又而其正反處乃至爲無所由乎と云ふは、阿闍梨の本分を忘了せざれば好々。

金剛頂經義訣

金剛頂經大瑜伽祕密心地法門義訣。元有三卷、今存其上卷耳。圓珍請來、亦止於一卷。珍歸朝後、嘗寄書於智慧輪三藏、求其中下兩卷、蓋遂不能得也。其既佚於唐時耶。此書不詳撰者、依首文按之、受金剛智口授而述者、其體製全具唐代疏家之風、而此書空海不將來、又恐非不空之作也。書中釋略出經、自其經首以至卷第一過半、阿闍眷屬四菩薩出生而止。然其所揭經文、往往與今本略出經不合。假如手指、義訣引文乃云、左右手、大指、頭指、中指等、異於今經云、觀羽禪智進力忍願等。今經或不空譯三卷經出之後、得無非經改訂者耶。

評して曰はく、義訣は不空の作に非ずと云ふは、前に既に駁するが如し。高祖大師

御請來目錄に云はく、金剛頂瑜伽秘密心地法門義訣一卷と。又一本に云はく、金剛頂乃至法門義訣智藏と。安然和尚の八家秘録に云はく、金剛頂經大瑜伽秘密心地法門義訣と。然るを何を以て此書空海不將來と云ふ耶。又義訣は、六卷の略出經を釋す。故に所牒の文四卷に異なるあり。然るに之れを知らずして或不空譯三卷經出之後、得無非經改訂者耶と云ふは非なり。

金剛頂三摩地法

金剛智既譯異出經、直非可以行金剛界法。故別撰儀軌、以便行法。金剛頂經瑜伽修習毘盧遮那三摩地法是也。猶善無畏供養法之於大日經焉。乃列舉四十二印明、以示作法次序。然比後出金剛界大法、不啻其曼荼羅爲一會而已。行法尙頗爲簡素。蓋嗣後發達大成、以至于今、其功仍不得不推不空焉。此法元立五部。然作法印明、有三部三昧耶、而無餘二部三昧耶。圓珍疑文亦未斥之、而古今無人敢言之何也。是大可怪。若三部已有三昧耶之用、則餘二部果爲無其用乎。思三部雜密以來頗有先蹤。至寶羯二部則不然。其立之、只依理而不據實。已少所屬諸尊。所觀三昧耶、素難的確。故且於曼荼羅立之。

而作法乃缺之耳。略出經及三摩地法之外、稱依金剛頂經而譯出者有六。其一、金剛頂瑜伽理趣般若經。是改竄菩提流志譯實相般若經者。欲編入金剛頂經中、以爲其第六會之一經。而冠以金剛頂名也。比諸流志譯經。雖大要殆同。改實相爲理趣、列會菩薩、增虛空庫、金剛拳等、改十六生爲十六大菩薩生、隱然以合于金剛界有十六大菩薩。新加疾證無上正等菩提之句。改如來普光明相爲毘盧遮那如來之相。換于依怙以加持。經末增加二十五首密語。更說持誦之。則不久當得一切如來大執金剛法性之身。可見出經愈新。而密教色彩愈濃焉。若強以金剛頂宗、必爲鐵塔相承。謂金剛智外無傳之者。其將奈菩提流志譯實相般若經。既殆爲金剛頂宗耶。貞元錄不記此經翻譯。而經首譯名下。記於中天譯。甚可疑。

評して曰はく、三摩地法に云はく、即想虛空諸如來。持虛空寶灌我頂。定慧和合金剛縛。進力禪智如寶形。以印額上加持已。五佛智冠在其頂。便分智拳頂後繞。當知已繫離垢縉。真言曰。唵。麼。折。囉。羅。恒。娜。と。是れ寶部の加持なり。道場觀に於て、次應以成所作智三摩地想と説くは、即大羯磨の印を示す。是れ羯磨部の加持なり。是を以て然作法印明。有三部三昧耶。而無餘二部三昧耶。乃至其立之。只依理而不據實。已少所屬諸尊。所觀三

昧耶。素難的確。故且於曼荼羅立之。而作法乃缺之耳と云ふは太だ誤れり。既に作法あり。灌頂と供養とは、寶部三昧耶なり。上求下化の事業は、羯磨部の三昧耶なり。何ぞ素難的確と云はん耶。尊數の屬を論ずるに、金剛界成身會の曼荼羅に於て、大日と四波は佛部所屬、阿闍と薩王愛喜は金剛部の所屬、寶生と寶光幢笑は寶部の所屬、阿彌陀と法利因語は蓮花部の所屬、不空成就と業護牙拳は羯磨部の所屬なり。内の四供を以て、四供の所變とすれば、嬉鬘歌舞次の如く、金寶連羯に屬すべし。外の四供を以て、大日の所變とすれば、能變に隨つて佛部に屬し、或は方位に隨つて餘の四部に屬すべし。又は供養は、供養の事業を爲す故に、亦羯磨部に屬することを得べし。或は寶部に屬するも亦可なり。四攝智は、能變に隨つて佛部に屬し、亦方位に隨つて餘の四部に屬することを得べし。外金剛部は、外護守衛なれば、羯磨部に屬す。故に寶羯二部に於て、敢て所屬の尊少きに非ざるなり。又金剛智譯金剛頂瑜伽理趣般若經は、支那作の偽經なる故に、今は論評せず。但し此經に、十三清淨句を説きて十七にあらず。經末の眞言未だ詳かならず。志主可疑と評する太好。又理趣般若經を論じて、改十六生爲十六大菩薩生、隱然以合于金剛界有十六大菩薩と云はん耶。

と云ふと雖も、本志第四卷に云はく、大般若理趣分一改稿成實相般若、再改稿爲理趣般若經、三改稿爲般若理趣品、四變而爲理趣釋と。然るに既に大般若理趣分に、當經十六大菩薩生と説く、何ぞ爲合于金剛界有十六大菩薩、改十六生爲十六大菩薩生と云はん耶。

曼殊千臂千鉢經梗概

曼殊千臂千鉢經。題云大教王。則釋迦與大日。於摩醯首羅天宮説之。可知其述作之志。固已不小。其所説取華嚴梵網與金剛頂之意。融合渾化。更有所加上。其成正在金剛頂經出之後。經中云曼殊受五智尊金剛界灌頂。是以可證焉。爾餘所説亦有可徵者。其所謂金剛界蓮華臺藏世界海中。曼殊現金色身。身上出千臂千手千鉢。鉢中現出千釋迦。千釋迦復現出千百億化釋迦者。非華嚴梵網之説相而何哉。此經所説。即在總攝一切法金剛性海瑜伽三密三十支三摩地法。先説五字觀十大願十種三摩地無比法。清淨實相爲此經之宗。眞如法界爲此經之體。宗本三曰。毘盧遮那法身本性清淨。出一切法。金剛三摩地。曰盧舍那報身。出聖性普賢願行力。曰千釋迦化現千百億釋迦。顯現聖慧。

身流出曼殊室利身。作般若母。體本五。曰本源自性清淨聖智金剛聖性。曰無動大圓性。鏡金剛菩提。曰平等性金剛法界。曰如性觀察理趣金剛聖力智用。曰成就菩提聖性金剛慧劍。是即金剛頂宗所謂五智也。十六大菩薩。殆同于略出經。六大力士金剛。頗類于胎藏法。又有十方大菩薩。更說根本。心曼荼羅。結界灌頂。結契印五真言。十種金剛性海。三摩地。十種法性觀門。十種聖行三昧。五仁者。千臂千鉢曼殊相。十種清淨戒結印口授等。次說身口意三密各十支。即此經眼目也。以入毘盧遮那五智五頂金剛界道場。爲此法前方便。其加上於金剛頂宗之意。乃可以見矣。受此法灌頂於阿闍梨。亦有曼荼羅。爲五重院。中心安本尊。四門安四天王。四角置香水瓶。四門置香案香爐。乃教相廣博。而事相極簡。亦是一變化也。以下說十信十住十行十迴向十聖位十發趣心十長養心十金剛心十聖地等。十法之數。亦甚類于華嚴。以上說了。而佛下祇園精舍。更說外道之非理等。實爲文殊五字法教理發達之極。然以其非八家請來之故。我密家多不用之。是可惜也。

評して曰はく、志主深く此經を信じて、我密家多不用之。是可惜也と云ふと雖も、此經は唐末の偽作にして印度傳來の經に非ず。菩提三藏の翻譯にあらず、法眼を具す

る者は、卷を繕きて之れを看ば、宜しく偽作を知るべし。有人小野玄妙師既に之れを論ずと雖も、今亦更に之れを論ずれば、遮那釋迦を併せて教主とし、或は釋尊を以て對告衆として、遮那の説法を請問し、或は遮那の出世を説きて遮那釋迦全く別體と爲せり。一經に於て二の教主を存するの理あらん耶。諸經の中に於て、未だ斯の如きの例あるに非ず。又遮那所説の密教を純密と爲し、釋迦所説を雜密とするは平常の法相なり。然るに此經は、遮那釋迦二尊を以て、教主と爲す。故に純と雜とに判屬す可らず。又遮那は法身にして、法界に周遍す。豈特に出世の理あらん耶。遮那は法身、釋迦は變化身にして、用は異なれりと雖も、體は同なり。何ぞ別佛ならん耶。是れ其第一理由なり。又卷第一に云はく、於此經宗及體都有二門。云何説此經宗體有二門。一者清淨實相爲宗。二者眞如法界爲體と。佛自所説の經に於て、自ら更に解釋を爲し給はん耶。是れ鈔釋の體にして、本經の體にあらざるを如何。又全卷に、三性三無性の觀を説きて秘密の觀門と爲す。然るに斯の如きの觀は、顯教權門の觀にして、秘密の觀門にあらず。又卷第五に、解深密經所説の如く、有空中の三時教に説きて、密教を以て第三時の所説として、秘密の法門を以て華嚴解深密

等の顯教大乘に同ぜしむ。是れ法相家の判教なり。密教に於て豈此理あらん耶。卷第七に、十地を以て三等と爲すは、地上二劫の法相にして、密教十地の教理にあらず。同卷に見分相分自證分證自證分の四分を明説せり。見分等の術語は、玄奘三藏より出でて、法相宗の名目なり。殊に四分は、護法論師の釋義安立にして佛説にあらず。若し佛説ならば、安難陳護・一・二・三・四の異論ある可らず。是れ則ち護法系統の唯識學の學人が、相承の宗義を確實ならしめんと欲して、故意に作する經なること掌を見るが如し。又文殊師利千臂の大身を現ずるは、迦葉等の小乘聲聞をして回心向大せしめんが爲なり。豈之れを以て、秘密瑜伽最極の身と爲さん耶。或は華嚴梵網解深密般若等に依り、或は瑜伽唯識智論中論等に依り、又は金剛頂略出經に依り、所説の法門顯密濫雜と雖も、十六大菩薩六大金剛五重三重の壇樣、及び陀羅尼を除きては、悉く顯教の教觀にして、秘密の遮情表徳の觀門にあらず。又菩提薩埵大摩訶薩埵又菩薩菩提埵等と説くが如き、一笑に附すべし。加之、法門の脈絡支離して一貫せず、是れ其の第二理由なり。又化度倉生と云ひ、唯照唯寂唯用唯靜等と説くが如き、譯語文章大に金剛智譯の略出經、文殊五字心陀羅尼品瑜祇經に異

なるは如何。是れ其の第三理由なり。志主は遮那釋迦同體の眞理を以て、大に我が高祖を難破せり。然るに遮那釋迦別佛と説く本經を信ずるは如何。又志主、經の梗概を述ぶるに脱漏あり。十種三摩地無比法の次に、文殊成佛の名號を説き、次に供養の功徳を校量して、有漏供養、無漏供養の差別を説き、體本の次に、十纏を説き、又能對治の三性、三無性の觀を説き、第二卷六大力士の次に、文殊の因位を説く。四足尊とは、兩部曼荼羅等に於て、未だ之れを見ず。又經軌に説かず。何れの尊を指す歟。第三卷十大菩薩の次に、十種慈觀門、五種眞言を説き、次に、十種三密大法觀を説く。第四卷十種性海三摩地の次に、楞嚴三昧の五名を説き、無相の菩提心を説き、七種現證菩提心觀を説き、十種法性淨土觀門を説き、金剛三摩地八聖道力を説き、又十種法性觀門の次に、十種如幻三昧を説く。第五卷先づ普賢が文殊の久遠を明すを説き、五仁者の次に、秘密法教值遇の因縁を説き、三重障を説き、三時教を説く。十種清淨戒の次に、棟擇道場地を説く。第六卷前方便の次に、教授の四義を明す。曼荼羅の次に、阿闍梨用心を説き、魔事及び其の對治法を説く。第七卷初に外凡内凡を説き、内凡に於て、下・中・上の三等を説き、又十地等覺妙覺を説きて、下・中・上最上

の四等とす。然るに妙覺の位を以て、菩薩地と爲すは、不可解の點なり。又覺者佛也と説くが如き、僞作を呈露する者にあらずして何ぞ耶。

瑜祇經梗概

金剛峰樓閣一切瑜伽瑜祇經。金剛界遍照如來。以五智所成四種法身。於本有金剛界大菩提心光明心殿中。與自性所成眷屬説之。初十六大菩薩。四方如來。四波羅蜜內外供養天女四門使者。及金剛界如來。皆各説心密言。又云。曾入金剛界大灌頂。及受金剛界阿闍梨位。應修此法。又云。若有側近置金剛界場。及大悲胎藏。并諸部道場者。若誦此真言。彼諸漫擊羅王。悉皆親近。尊敬持明行者。且經中諸真言。雖皆似金剛頂法。然又有大悲胎藏八字真言一首。應知此經述作。必在胎金兩部本經已成之後。都部陀羅尼目不載之者。蓋或其譯述時。未有此經歟。貞元錄亦不載之。乃非無故也。因想此經傳譯。或在金剛智不空之後。而假名於智歟。然空海已請來之。其出于永貞以前。乃莫可疑耳。此經雖主依金剛頂宗。有一層所加上。既非金剛頂中之一法。別自成瑜祇一部。是以安然謂真言秘密藏。加于胎金蘇悉地。以瑜祇。或可言四藏。經中所説。有愛染金剛法。大勝

金剛法。五瑜伽秘密觀。觀行密印漫荼羅。吉祥佛母曼拏羅。五大虛空藏。求富貴法。降伏魔怨法。漫荼羅諸法。及內護摩軌儀。菩薩心內作業灌頂等。其部乃立六部。其法乃依四種。

評して曰はく、大に瑜祇經を觀るに徹頭徹尾、金剛界の三十七尊の三摩地に依らざるなし。之れを以て一部を通觀するに、金剛頂中の一法にして、別部に非ざること明かなり。但し、大教王經等は、修生を以て表とし、兩部而二を本とすと雖も、此の經は本有を表とし、不二を本とす。是を以て、瑜祇は、金剛頂中の不二深秘と云ふべし。内作業灌頂を説きて、極秘密中の秘と云ふ、以て知るべし、金剛即寶光蓮華即羯磨と説くが如き、三部五部の相融無碍を示すなり。又諸佛頂の功德殊勝を示さんが爲に、特に佛頂部と云ふと雖も、佛頂を以て立て、一部と爲すの意にあらず。故に經に云はく、内作業灌頂、極秘密中秘。此名五部源と。故に乃立六部と論ずるは、文字に屈執するの誤失なり。

惡法

但諸成就法中。恨有惡法。即如云於屍陀林中。取死人之衣。以己身血。畫不動使者。而念誦是也。其成就法中。或盛血於髑髏。或以脛骨攪血。或髑髏上畫像。或以己血塗壇畫像。或骨末和髮爲燒香。或人骨爲槩。或燒猫糞。蛇脫皮鼠狼肉等。或魚膽和灰作人形。或用人屍。犬脂。犬肉。魚肉等。或身塗灰。或披神線。或在寒林禁語修法。是皆外道邪法。而遂入於密教者。弊毒亦可謂甚矣。縱雖以佛教甚深三昧耶。豈能化而爲正法乎。密教墮落之因。未嘗不在斯種惡法。與瑜伽中之邪義也。胎藏曼荼羅所以缺此尊者。想大日經作者。夙忌其惡法。乃棄斥以除之歟。

評して曰はく、密教甚深の教理に於て、未だ了解せず。故に、三乘權教の見解を以て、此妄評を爲す。太だ誤れりと謂ふべし。何となれば、此法、元來外道の惡法邪法なりと雖も、彼の外道邪惡の法を迷信する劣慧の機類を誘化して、佛の正道に引入せんが爲めに施爲する、隨順隨轉の巧方便にして、密教中に於て、遮那此法義を説き、行者亦此法を修す。其事作法は、彼の惡法に似同すと雖も、之れをして正法善法と成さしむるは、毗盧遮那三密加持の力用なり。秘密加持の深旨之れに在り。天台尙ほ性惡不斷を談ず。況んや密教に於てをや。密教の呼摩法の如き、其事作法は、事

火婆羅門の邪火法に似同すと雖も、眞言行者、三平等の觀門に住して法佛の三密を以て加持する故に、正法の呼摩と成つて惑業苦の三道を焚燒す。以て例して知るべし。又金剛界曼荼羅、亦烏樞瑟摩明王なし。何ぞ唯胎藏を云はん耶。胎藏曼荼羅外金剛部の其多くは、外道所祭の邪神なり。邪神には必ず邪法あり。之れを信ずる機類の爲に、故らに毗盧遮那邪神の身を現じて、彼の邪法を説きて、正道に引入するは、胎藏曼荼羅外金剛部の本義なり。此を安立無量乘と釋す。故に、大日經住心品に云はく、如來應供正遍知、得一切智智、彼得一切智智、爲無量衆生、廣演分布、隨種種趣、種種性欲、種種方便道、宣說一切智智、或聲聞乘道、或緣覺乘道、或大乘道、或五通智道、或願生天、或生人中、及龍夜叉、乾闥婆、乃至說生摩睺羅伽法、若有衆生、應佛度者、即現佛身、或現聲聞身、或現緣覺身、或菩薩身、或梵天身、或那羅延、毗沙門身、乃至摩睺羅伽、人、非人等、各各同彼言音、住種種威儀と。又同經息障品に云はく、或以羅爾迦、微妙共和合、行者造彼像、而以塗其身、彼諸執著者、由斯對治故、彼諸根熾然と。又密印品に、諸の茶吉尼の印言を説くが如き惡法にあらずして何ぞ乎。故に夙忌其惡法、乃棄斥以除之歟と論ずるは、大に失せり。

第四篇 中 唐

不空開密教盛運

蓋以其修證之篤。機用之大。體得王佛二法相待之關紐。因以開斯盛運。可謂偉矣。惟其致盛也。一半賴帝王之力。故帝王一替。則盛衰之運變焉。是以會昌一難。殆無孑遺。共終李唐之祀。法脈亦全滅於禹域。欲不歎豈其得乎。

評して曰はく、實に然り、我が日本國今に至つて尙密教の盛昌なるは以て知るべきなり。豈貴からざらん乎。

不空不遊印度本洲

或云。不空周遊五天。其事蓋出於臨終陳情表。然是則示寂之日。弟子等所作耳。其請新譯經入藏表中。又有遊五天尋求所未受者。并諸經論之語。所謂五天者。不過猶謂天竺。即唯指師子國云爾。非指玄奘等所徧歷之五天竺者。蓋不空足跡未遂及於印度本洲。

也。不空之師。乃普賢阿闍梨也。普賢與金剛智之師寶覺。固爲別人。然而不空之師。謂龍智者。以嚴郢影讚序及碑文爲本。不空未曾自言之。趙遷所撰不空行狀。則以爲普賢阿闍梨。飛錫所撰碑文亦云。其國有普賢阿遮梨聖者。位隣聖地。德爲時尊。從而問津。金剛界傳法次第記亦云。至南天竺國。得遇長年普賢阿闍梨。宋高僧傳亦依之。而付法傳却取嚴郢之言。略付法傳。龍智菩薩之下注云。亦名普賢。然此非別有典據。唯爲合于龍智金剛智不空相承之傳說。強欲以普賢龍智爲同一人而已。龍智存在之可疑。如前既所辯。乃不空之師。定爲普賢。不須復論也。想普賢即寶覺之弟子。受金剛頂法。而住佛牙寺。不空再往時。寶覺既不在世耳。其所受於普賢。蓋爲金剛頂法。而其所贊歸之經。則金剛頂經也。故乾元元年請翻經表中。不空自言。行天竺而得金剛頂瑜伽經等八十部。大曆六年請新翻經入藏表。復自言。遊五天而得梵本瑜伽真言經論五百餘部。又曰。金剛頂瑜伽法門。是成佛速疾之道。其修行者。必能頓超凡境。達于彼岸。餘部真言。諸佛方便。其徒不一。遺書又云。遠遊天竺。涉海乘危。遍學瑜伽。親禮聖跡。得十萬頌法藏印可。相傳來歸帝鄉。爰泊今聖。弘教最深。十八會瑜伽。盡皆建立。三十七聖衆。一一修行。恆觀五智之心。弟子慧勝等。雖五部未霑。並一尊精熟。俗弟子功德。使李開府。瑜伽五部。先以授之。臨

終陳情表亦言。遊五天而所得。金剛頂瑜伽十萬頌。諸部真言及經論等五十餘萬頌。遂未曾言及。實大日經。又受胎藏法之事。是豈得以大日經爲包含于所謂諸部真言中者乎。故殿郢影讚序云。得瑜伽十八會法。五部祕藏。碑文云。揚摧十八會法。金剛界傳法次第記亦云。重受金剛界法。獨趙遷行狀。及飛錫碑文。乃稱謂十八會金剛頂瑜伽。并毘盧遮那大悲胎藏。五部灌頂。真言祕典。經論梵夾。五百餘部。僉以得其所傳。宋高高傳付法傳。乃並承其說。蓋趙遷飛錫誤之耳。故不空歸唐後。所授于弟子等。自主金剛界。如前既所示。但不空曾從金剛智。兼受胎法。智乃受之於無畏。是固旁修耳。故造玄胎藏界血脈。乃不載不空。是不足怪也。

評して曰はく。臨終の陳情。弟子の所作なるべしと雖も。不空豈之れを見ず之れを知らざらん乎。其表自作に異ならず。既に周遊五天と云ふ。何を以て。唯獅子國のみと断定する耶。又不空未だ曾て自ら之を言はざる故に。不空の師は龍智に非ずと云はゞ。例するに無畏の師達磨掬多にあらざるべし。無畏三藏未だ自ら曾て之を言はざる故に。圓珍和尚青龍寺法全に從つて相承する血脈の龍智の下に。或號長年普賢と。是れ法全闍梨惠果の口授を得て。珍和尚に授くるは論なし。然るに普賢

阿闍梨を以て龍智と爲すは。惠果の口授に依ること明白なり。然らざれば。何に依つて長年普賢と註する乎。是を以て。略付法傳龍智の下に。亦名普賢と註し給ふは。高祖の私斷に非ざることを知るべし。何ぞ唯爲合于龍智等と云ひ。強欲以普賢等と云はん乎。又大日經は。曩きに無畏三藏。梵本を請來し。既に翻譯を爲すを以て。更に翻譯を要せざる故に。請翻譯表中に。之れを言はずと雖も。傳へざるに非ず。入藏表の梵本。瑜伽真言經論五百餘部の中に。胎藏法部なかる可らず。若し之れなくば。不空如何して胎藏部の翻譯を爲さん耶。遍學瑜伽の言。廣く金胎兩部に通ずべし。瑜伽の言。金剛頂部に限るに非ざること。大日經を熟讀せば。思半を過くべし。趙遷は。不空入室の俗弟子。不空に親炙して。能く其の説を聽く故に。其所撰の不空行狀の末文に云はく。小子遷執巾捧錫九歲。于茲握筆持硯八年而已。乃至大師所有行化之由。曾親稟受平生之日。命令序述。在於侍奉。未暇修纂。況乃奉臨終遺言と。飛錫亦不空の門に入りて。譯場に參列し。委しく不空の行狀を知つて。其碑文を作る。何を猥りに大悲胎藏と云ふべけん耶。又金剛智。兩部灌頂の秘重を以て。不空に授け。不空之れを受けて。兩部一雙に。以て惠果に授く。惠果は。理智の雙璧を一括して。我が高祖

に授く。兩部の間に於て、敢て正旁なし、亦兼正なし。高祖、六七兩月の灌頂入壇、及び四度加行の法規、其の證と爲すべし。何ぞ兼受旁修と云はん耶。無畏金智の互授、兩三藏未だ自ら曾て之れを言はず、信ずるに足らざる耳。造玄の血脈も頗る誤謬多し、依用するに足らざる也。

畧出經與金剛頂大教王經

想畧出經與此經、原本已不同。

評して曰はく、大教王經は、廣大儀軌品の一品を譯出す。略出經に云はく、我今於百千頌中金剛頂大瑜伽教王中、爲修瑜伽者、成就瑜伽法故、略說一切如來所攝真實最勝秘密之法と。故に十萬頌廣本の略出なること明かなり。是を以て原本不同なり、而して所說に具缺あるは敢て論ず可きに非ざる也。

卅七尊與卅七菩提分法

經中以三十七尊、比二乘具修三十七菩提分法、足以知三十七尊之理想及其數所、本

焉。

評して曰はく、聖位經の意は、唯二乗が具さに三十七の道品を修するに非ざれば、無學の果を證すること能はざるに例して、眞言行者は、具さに三十七尊の三摩地を修するに非ざれば、成佛すること能はざるを明す。三十七尊の數を、二乗の三十七の道品に於て、其の本を取るにあらず。又三十七菩提分法を以て、三十七尊三摩地の理想と爲すの意に非ず。三十七尊は、本有法爾の數量を示す。他に標準を取つて定數を爲すにあらず。豈二乘自度の理想を取つて、眞言三摩地の理想と爲さん耶。天殊地別なり、濫すること勿れ。

不空肆意誦出

蓋不空自隨其所得印可之意、體得金剛頂宗之義、肆意以制作耳。譬如聖觀自在觀行儀軌題下注記、云出大毘盧遮那成道經、而雜以金剛頂宗蓮華部心印明、可以爲一證矣。故不空之稱出於某經、依于某經者、大抵不足措信也。然不空入大日如來之三昧而所得、與其印可之師普賢阿闍梨之三昧裡所受於大日、其意何必有所相異耶、則彼此

共以爲法身說法固莫不可也。但不空所出者多非梵本翻譯。直所自撰述耳。若令不空果將來十萬頌金剛頂大經本。則應於其譯出。孜孜日亦不足。且明其出於某會某品。必矣。何復要採訪前諸三藏之遺夾。而後奏請翻譯乎。加之其所譯出之金剛頂經。亦何有止于初會初品。而却及雜密乎。所以其不然者。乃由不空實不齋大經本而已。

評して曰はく、密教に於て、胎藏法と金剛界法と、兩部雜部とのみあるは前述の如し。觀自在觀行軌は、大日經より出づと雖も、兩部雜部の軌なり。何ぞ不空肆意制作と云はん耶。又不空は、德學備足の大阿闍梨にして、天地を感動し、鬼神を哭泣せしむるの道力あり。豈虛言を吐きて、天下の耳目を欺くべけん乎。若し三摩地中所見所聞の身説を以て、法身の説法と爲さば、肆意制作と云ひ、不足措信と云ふは何ぞ耶。但不空所出多非梵本翻譯。直所自撰述耳と云ふは、妄推私斷。誰か之れを信ぜん。何となれば勅詔を奉けて、翻譯を爲す。其の會場に於て、作法あり、規則あり、立會者あり、肆に自撰の經軌を出さば、筆授譯語証義等の諸士、之れを肯ずべからず。又不齋大經本と云ふに至つては、前に評するが如し。

理趣釋梗概

大樂金剛不空眞實三昧耶經般若波羅蜜多理趣釋。即理趣品之疏釋也。始有十六大菩薩之名。乃加金剛薩埵爲十七尊。以十七句門爲其三摩地。新組織理趣曼荼羅以說四種變化。又以十五密語之能說者。各爲曼荼羅主。遂以建立十五曼荼羅。更說阿闍梨灌頂修行曼荼羅。是所謂五秘密也。其曼荼羅觀行作法。各皆依金剛界法。又說五部各具五曼荼羅。而云。如一切教集瑜伽經所說。若實然。則第六會之一部。應同于第三會。何有設別會之要乎。又注記云。薦福大和金泥瑜伽曼荼羅是也。且就修行曼荼羅云。具如金泥曼荼羅像東南隅是也。薦福大和上者。蓋指金剛智。想金剛智所畫。有金泥五部五曼荼羅。而其東南隅。圖五秘密歟。五秘密者。初萌于瑜祇經。理趣品未曾說之。理趣釋蓋衍瑜祇之意以加之。而漫言如第三會。可知。釋乃非翻譯。係不空若後人撰述者。故宗叡眞言疑目。雖有薦福寺曼荼羅之事。爲非天竺人撰述之證。且云。疑後人爲高舉。書言奉詔譯。兼亦入經錄歟。宗叡炯眼。可謂徹于紙背矣。抑大般若經理趣分。一改稿爲實相般若。再改稿爲理趣般若經。三改稿爲般若理趣品。四變而爲理趣釋。然未足以成金剛

頂經等六會之全分。後雖趙宋施護譯遍照般若波羅蜜經出。猶未至成全分。更又增訂而爲宋法賢譯最上根本大樂金剛不空三昧耶大教王經。至茲殆不堪下發達之語。亦足以察非十八會之自初具備焉。

評して曰はく、如有十六大菩薩とは、四方四佛の四親近の十六大菩薩に濫じて好からず、改めて十六金剛と云ふべし。又釋經の本文に、具如金泥曼荼羅像東南隅是也とあるを以て、可知釋乃非翻譯、保不空若後人撰述と云ふは妄評なり。是れ不空三藏の註語にして、而して本文に非ず。前の薦福大和尚等の註の如く細書と爲すべきを寫生誤つて大字と爲して本文に加ふ。故に之れに依つて、釋經を以て不空等の作にして翻譯にあらずと斷定するは早計と云ふべし。又如一切教集瑜伽經乃至別會之要とは非なり。何となれば、第六會と、第三會とは、五部具會の相同じきを以て、第三會を指すと雖も、其の第三會は毗盧遮那の三摩地に於て、五部具會を説き、第六會は、金剛薩埵の三摩地に於て、五部具會を説く。既に三摩地に別あり。何ぞ有設別會之要乎と云はん耶。又十六大菩薩生を以て、疾證菩提の行位と爲すは、金剛頂經特有の法相にして、顯教の教理を以て理解すること能はざる法門なり。然

るに、大般若理趣分に云はく、當經十六大菩薩生、定得如來執金剛性、疾證無上正等菩提と知るべし。金剛頂第六會の般若理趣品、印度に流行せしに、時の人、所有の般若を綜合して、般若部を大成せんとする時、品號の般若波羅蜜多を見て、大般若經に加入するなり。故に却つて理趣品は根本にして、而して之れを改めて理趣分とし、亦改めて實相般若と爲すなり。若し然らざれば、大般若の當位に於て、如何して十六大菩薩生を解することを得る耶。

金剛頂經念誦法經等

金剛頂經第六第七第八三會、所說皆粗相同、而殆不免重複、但念誦法經以下四軌、四供養內外、正反於金剛界法、圓珍疑之、云、乖常式、亦宜矣、是中成就儀軌、獨云、出吉祥勝初教王瑜伽經、蓋亦謂第八會耳、此儀軌末附敬愛法、說金剛愛染菩薩、及金剛鉤女菩薩觀法、亦爲瑜祇法之一變化、以上所舉、雖有普賢儀軌五本、不空請入藏表中、唯載金剛頂勝初瑜伽普賢菩薩念誦法、及普賢金剛薩埵念誦法各一卷、因想餘三軌者、蓋不過相傳異本、而理趣品以下諸經軌、皆盡爲金剛薩埵法、金剛薩埵獨部法、於是始出焉。

夫寶積之密迹金剛力士。一變而爲陀羅尼集經之金剛藏。再變爲胎金兩部之金剛手菩薩。金剛薩埵。而與普賢菩薩同化。三變而至不空譯撰理趣品。理趣釋。又化爲五秘密等法之金剛薩埵。於是乎。金剛頂第三第六第七第八諸會。渾然飯于一法。絕不見其差別。十八會指歸之綱目。殆屬徒爾。以故。圓珍亦疑。上記諸經軌之所以相異。非無謂也。評して曰はく、第六會は、金剛手より、外金剛部に至つて、般若理趣を説くを以て本とす。第七會は、行人に、時なく、方なく、有爲戒に依らず、菩提心を以て先とし、無爲戒に住するを本とするを説くを以て旨とす。第八會は、第七會の法門に於て、更に廣説するを以て本とす。是の故に本旨各各不同なり。所飯は一法なりと雖も、作法は相似て同じと雖も、本旨既に異なれり。何ぞ不免重複。不見差別。殆屬徒爾と、斥けん耶。又指歸は其大意を提ぐ。百千頌の廣本を讀まざして、何ぞ漫りに之れを評するを得ん。又薩埵部の儀軌は、外の四供を以て内に安じ、内の四供を以て外に置くは、内外相融の深旨を顯示す。金剛界の常法に非ずと雖も、敢て違法に非ざるなり。

蓮華部法出處矛盾

若依十八會指歸之意。則蓮華部法。當出于徧調伏品。而今乃爲出于降三世大儀軌。亦不免有出處矛盾之難而已。評して曰はく、大智降伏法の内に、大悲攝受の法なくば、佛の事業あらざる故に、降三世品中尙蓮華曼荼羅品あり。敢て矛盾に非ず。

雜密佛頂入金剛頂宗

是即取材於雜密佛頂化以爲金剛頂宗一尊者。實此宗慣用手段也。評して曰はく、若し本來佛説の金剛頂經なかりせば、雜密を以て足れりと爲すべし。然るに不空等の師何の必用ありて、其の材料を雜密に取つて新に金剛頂を作る耶。知るべし、本來遮那所説の密教あり、之れを以て本として、伽耶成道の釋迦應變無碍に之れを説くを雜密教と爲すなり。其の本末を混ざる勿れ。

瑜伽宗重智

亦可以察金剛頂宗之偏重乎智矣。

評して曰はく、金剛界法は、上轉修生の智を以て本とし、胎藏法は、所證の眞如法界の理を以て旨とす。故に其の表面に約すれば、理智に於て各偏重ある、何ぞ敢て怪むに足らん。其の内證に約すれば、理智相互に相應して平等なり。

入藏表中不舉釋字母品及菩提心論

入藏表不舉釋字母品及菩提心論蓋以其非不空譯耳。

評して曰はく、入藏表中に、擧げざるは皆不空の譯にあらずと爲す乎。果して然らば、降三世極深密門及び如意輪瑜伽等の如き、不空の譯に非ざる乎、豈夫れ然らん耶。

不空不重胎藏

不重胎藏亦可由此以徵也。

評して曰はく、胎藏部に於ては無畏三藏既に翻譯を爲し、亦儀軌の撰述を爲して敢て足らざるなし。是の故に金智、不空多數翻譯せず亦撰述せずと雖も、敢て胎藏を重ぜざるにあらず。金剛智、要略念誦法を譯し、不空は、五字眞言修習儀軌等を譯し

て、胎藏の觀行を宣傳し、補翼す。豈不重と云はん耶。無畏三藏、金剛頂部に於て、翻譯著作頗る尠しと雖も、敢て金剛頂を重ぜざるに非ず。何となれば、大日經疏に云はく、入金剛界成正覺と。又十地を釋して云はく、若解金剛頂十六大菩薩生、自當證知也と。又五部心觀圖記を著して大に金剛頂の觀門を宣傳せり。以て知るべし。然るを翻譯著作の多少を以て輕重を論ずるは偏見と云べし。

金剛頂宗聖觀音法

聖觀自在菩薩心眞言瑜伽觀行儀軌、初說道場觀作法印明、雖多依胎藏法、其觀音心印明、用金剛界蓮華部心、乃云出於大毘盧遮那成道經、然大日經中、未曾有別說觀音儀軌、此軌則唯用經中所出印明而已、不空所言之經、軌出典、多不足信者、率如斯、且比諸先念誦法門等、則見隨誦出異時、其意樂亦不同耳、蓋非必各有梵本、而譯之也。

評して曰はく、不空翻譯儀軌に、出於大毗盧遮那成道經と云ひ、或は出於某經等と云ふ。其の出す所の本經に於て、或は觀行の作法儀軌を説くあるべく、或は、唯本尊の三密をのみ説くあるべし。然りと雖も、既に所依の本經あり。何ぞ一概に不足信

と云はん耶。又無畏三藏譯の略本の「大日經」に於て、觀音の作法儀軌を説かずと雖も、廣本に之れを説く乎も知る可らざるをや。或は後人の妄添か、不空豈「大日經」に別に觀音の儀軌を説かざるを知らざらん耶。

孔雀明王始爲佛母

明王は男性。而佛母は女性也。若女性則當稱明妃。若男性則不當爲佛母。故以虛空眼佛母卽爲明妃。般若爲佛母故。波羅蜜形乃表女性。然而以明王爲佛母。猶以摩利支天軍荼利金剛爲菩薩。至不空時。諸尊法變化。肆隨意樂。漸致斯紛亂。亦是一弊也。

評して曰はく、眞言教に於て、明王、明妃、佛母、部母等と稱するを、世間の男性、女性を以て解釋すべきに非ず。功德の能生を以て母と云ふ、信を以て道元功德母と云ふが如し。智徳を稱して明王と云ひ、定徳を稱して明妃と云ふ。故に佛母を以て明王と稱するも敢て闕なし。須らく密號名字を知るべし。何ぞ致斯紛亂と云はん耶。又、摩利支天軍荼利明王は、自利利他の功德を具するを以て、菩薩と稱するに何の不當かあらん。

三部明王

然三部明王。則不同於蘇悉地。以一字佛頂爲佛部明王。以軍荼利爲通三部明王。乃呼佛頂以明王者。與先以無能勝明王爲佛部上首。殆相撞著矣。是皆作經家意樂各不同之所致。其決非一佛所說。亦可以證焉。

評して曰はく、曼荼羅海會の諸尊は、悉く皆毗盧遮那の差別智印なるを以て、其内證に於ては平等無差なり。志主も、此理を解するならん。故に此尊を取つて明王と爲し、或は彼の尊を以て、亦明王と云ふ。法門に違ふことなし。又明王は、其部の斷障を主どる。上首は其部の第一位なり。掌どる所同じからず。何ぞ撞着と云はん耶。諸尊内證平等の眞理と、表面掌どる所の差別とを知らずして、誤つて撞着を認め、非一佛所說。作經家隨意著作と斷ずるは、阿闍梨職位の言論にあらざるべし。

十八道

然而此乃可見本於印度國俗。待大寶之禮也。

評して曰はく、此の一段は稀に能く、以世間淺名顯法性深號の密教の深旨を得たる
と稱すべし。

仁王般若法

不空釋此經陀羅尼。又作儀軌。以爲金剛頂部法。然本經爲毫非有其義。
評して曰はく、五方の菩薩は、中央は、金剛波羅蜜なり。東南西北は、四方四親近の隨
一たる薩寶利牙の四菩薩を擧ぐ。是れ金剛頂部に屬する起盡なり。然るに然本
經爲毫非有其義と云ふは如何。

隨求明王

經名中又呼之無能勝明王。胎藏夙有無能勝明王。明妃。今乃以隨求明王與之同視。不
詳其果何意。蓋亦阿闍梨一時之意樂耳。
評して曰はく、釋迦院眷屬の無能勝と、隨求明王とを同視すと解するを以て、此の評
を爲す。然るに隨求陀羅尼功德を歎じて、無能勝と云ふと雖も、釋迦院眷屬と同體

視するにあらず。豈阿闍梨一時の意樂を以て立名を爲さん耶。上求下化の功德
を具するを以て、菩薩と稱するに何の相違かあらん。

陵譏崇拜

然如陵譏廟中行護摩。漿水塗于陵譏。以乳洗陵譏。則非亦崇拜之者而何哉。
評して曰はく、陵譏廟に於て、呼摩を行ずるは、外道を降伏せんが爲なり。又陵譏を
洗ふに、漿水に毒藥、犬血等を加味す。是れ陵譏を毒するの意なり。若し崇拜を爲
さば、塗るに毒藥を以てし、之れを擲打し、之れを踏みて以て辯裂を爲さん耶。

金剛童子法

聖迦拏忿怒金剛童子菩薩成就儀軌經。題下注云。出於蘇悉地經大明王教中第六品。
然檢蘇悉地經。其第六品。乃持真言法品。而不會說斯事。加之。全經中亦遂不有所見焉。
蓋作經者之假託耳。

評して曰はく、假托を爲して、出於蘇悉地經第六品と云ふと雖も、若し蘇悉地經を檢